
ロストナンバー

混沌の使者

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ロストナンバー

【Nコード】

N4241V

【作者名】

混沌の使者

【あらすじ】

助言がありまして、タイトルを変えました。『よくある話』↓
『ロストナンバー』です。
相変わらず、センスねえなあ……。

この話は、『魔法少女リリカルなのはStrikers』の介入話です。

基本的に原作どおり進みます。

あらすじを簡単に説明すると、

闇の書事件時に死んだ一人の少年が、J・S事件時に生き返るといった話です。

プロローグ（前書き）

この話は題名どおり、よくある話です。
少なくとも、私の中では。

その分、心情を細かく書いているつもりです。
そこを楽しんでいただけたらと。

ですが、なにぶんまだ素人の身、何かアドバイスがありましたら、
いただけるとうれしいです。

では、どうぞ。

プロローグ

俺は……どうなった……？

辺りは漆黒の闇に染まり、何もない空間。そこに俺は漂っていた。何をしてもなく、ただ俺はその闇の海に浮かんでいた。

何が起こったのか？　だが俺は、問うまでもなく知っている。自分の行ったことくらいのは自覚はある。

あの時——闇の書の暴走が起きたとき、俺たちは全員の力で、闇の書のコアを露出させ、宇宙空間に転送させた後、アルカンシエルと呼ばれるとてもない威力の武器で、完全破壊するという博打を行った。

しかし、それは失敗に終わり、コアを露出することは叶わなかった。

その時、俺は心の中で、皆に別れを告げた。

もし、うまくいかなかったら、こうすると決めていた。

この街が、こいつらの想いが、護れるなら、それでいいと思った。だから俺は——作戦が失敗した瞬間、すべての魔力を解放して、

闇の書に突貫した。

皆の驚愕に染められた悲鳴じみた声を聞きながら、俺は風を切つて突き進んだ。

俺は元々、皆より群を抜いて、魔力値が高かった。だから、出来ると思った。自分の命と引き換えにすれば……。

俺は獣のような唸り声をあげながら、自分を鼓舞するように、この一撃にすべてを賭けた。

ぶつかった瞬間、耳をつんざくような凄まじい轟音を聞きながら、自分の身体が崩壊するのを俺は見た。

だが、最初に目に写ったのは、壊れゆく俺の相棒だ。^{デバイス}俺の最後の博打に、《ボクはどこまでも相棒についていくよ》という涙を流したくなる言葉をくれた相棒だ。あいつには、感謝してもしきれな

い。

次に目に写ったのは、指先から崩壊する俺の身体。指先から爪先から、端から崩壊していく俺の身体。

最後は何だか穏やかな気持ちだった。

やる前は、死ぬのが怖くて震えてたのに、不思議なものだ。

だが、もつと不思議なのは、あいつらの——なのはやフェイト、はやての悲鳴が——泣き叫ぶ声が、聞こえたことだ。

こんなにも、轟音を響かせてるのに、すっかり聞こえてくる。本当に不思議だ。

俺はそんなあいつらに一言、声にならない謝罪を述べて、この世を去った。跡形も残らず。

なら、ここはどこだろう？ 辺りを見ても、闇が在るだけで、他には何もない。

もしかして、ここが死後の世界なのか？ と思い、だったら地獄かなあ？ 俺そんな悪いことしたっけ……？ と少し考え、あいつらを泣かせたからかなあ……、と思い、苦笑した。

こんなところまで来ても、思い出すのは、数ヶ月、数日友達になったあいつらのことばかりだ。もつと思いつくことねえのかよ、と自問するが、それでも、やっぱり思い出すのは、あいつらとの日々ばかり。それだけあいつらとの日々が楽しかったってことか、と自答した。

にしても、と周りを再び見回す。何もない……、あまりに空虚な空間に、はあ、とため息を吐く。

いつまでこうしていればいいのか？ 死ぬっていうのは、退屈なんだなあ、と少し間抜けなことを思いながら、瞳を閉じた。

第1話

次の瞬間、俺が目を開けて、飛び込んできたものは――
樹？

だった。それもたくさんの樹だ。つまりはここは森ということ。
次に感知したのは、風の音やその風に揺らされる葉同士の擦れ合う音。チュンチュンと鳥の囀りさえずりまで聞こえてきた。

先程まで、確かに真つ暗闇の中を漂ってたはずである。それが今
はこの通り、やけに現実味溢れる世界になっている。

もしかして、地獄から天国に行ったのだろうか、とかふと思った
が、違うだろうなあ、と本能が否定する。

これは現実だ。地獄でも天国でも、ましてや死後の世界でもない。
俺は生きている。

その考えが頭を過った。

しかし、と俺の理性的な部分が、それを否定する。

俺はあるとき、確実に死んだ。ちゃんと自覚したはずだ。死ぬそ
の寸前まで、その死を確かめて死んだはずだ。

やはり、生きてるはずがない。俺の理性的な部分が、そう答えを
出した。

「目、覚めた？」

だが、その考えは呆気なく間違いだとバツテンを付けられた。ど
うでもいいが、あのテストとかのバツテンって、何だか傷つくよね、
なんてどうでもいいことを思いながら、俺に話しかけてきた少女を
見る。

今更だが、俺は仰向けに寝た格好であり、そして、俺は正面を見
ている。

つまりは、その少女は俺の顔を除き込んでるわけだ。

自然、顔が近くなり、軽くドキツとした。その少女は、穢れを知らぬ純粹無垢な瞳で、長い髪は地毛なのか、綺麗な紫色をしていた。何だか、護ってやりたい、と思わせる少女だった。

俺が言葉に詰まっていると、少女は首を傾げて、不思議そうな顔を見ると、俺から顔を離し、スタタツと足音を聞かせて、去っていった。

一体何なんだ？ と思い、身体を起こす。

そうすると、視界が変わって、何か違うものが見える——といったことはなく、相変わらず視界に写るのは樹ばかり。

やはり、俺は生きてるのだろうか？ いまいち実感がない。

「目が覚めたようだな」

そこに朗々と響く、低めで渋めな声が、上から聞こえた。

上を向くと、目の前には長身の男が立っており、短めの黒髪をしていた。何となくだが、その顔には幾つもの苦勞を乗り越えてきたであろう年輪が、刻み込まれているようだった。

「……ここは？」

今度はきちんと言葉に出す。

男は一部の隙もない動きで、俺の目線までしゃがんだ。

どうやら、警戒しているようだ。まあ、俺も警戒してるから、お互い様だが。

「辺境世界の森の中だ。そこでお前は倒れていた」

「……そうですか……」

どうやら、本当に生きてるみたいである。

何だか本当に現実味がなく、自分の身体を確かめるように、全身

を見る。

「あ……」

と、今更気づいたが、俺は裸だった。大事なところは、かけられていた毛布で隠れていたが。

「ておおあああ！？」

あまりの驚きに、どこぞの狼の叫び声をあげて、俺は毛布を引っ掴み、全身を隠した。いや、だって、男でも裸見られるのは、結構恥ずかしかったりするんだぜ。

そして、更に気づいたことがある。

「成長してる……？」

何かおかしいと思ったら、背やら何やらが成長している。声変わりもしているらしく、子供の時より、低い声だ。

そんな俺の驚いている様子を男性と女の子は、不思議そうな顔で見ている。

「お前が倒れているところをルーテシアが、拾ったのだ」

と、慌てる俺に、男性は現状——どうして俺がここにいるのかを教えてくれた。

俺、あの子に真っ裸を見られたってことか……うわ…………すげえ恥ずかしい……、と俺は顔を赤らめて俯いた。

だが、やはりここに何故いるのかは、全然わからない……。それはきつとこの人たちにもわからないだろう。

だが、なるべく状況を把握しなければ、と思い、男性に質問する

べく顔を上げる。

「おーい、旦那あ！ ルールー！ 飯出来たぞお！」

だが、その決心はわずか1秒で、封殺された。

どうやら、声からして、女の子のようだ。

まだ連れがいたのか、と思い、声がした方を向くと、そこにいたのは――

「妖精？」

なんかこう童話とかおとぎ話みたいなのに出てくるような愛くるしい小さい妖精。そんな感じの子が、鍋を調理し終えていた。

なんだろうか……もしかして俺は、おとぎ話の中にも紛れ込んでしまったのだろうか？ 確かに魔法が存在していたわけだし、そういう不思議現象も無きにしも非ずなのかもしれない。

って、なわけねえだろ。

「あなたも」

「あ、おい……」

俺はルーテシア――恐らくだが、ルールーは愛称だろう――に連れられ、同じ釜の飯を食うことになった。正確には鍋の飯か……。

そして、鍋の近くに行くと、その少女の姿がよく見えた。

燃えるような赤い髪に、少しきつめに吊り上った瞳。そして、非常に小さい背丈……てか、これは小さいというか何というか、いや、もうホント妖精としか言いようがない。

「おう、アンタ目が覚めたんだな」

「あ、ああ」

その少女が話しかけてきた。俺は少し戸惑いながらも、返事をした。

そして4人で飯を食うことになった。

とりあえず、先程やろうとした状況を知るための質問に移ることにする。

「あ……と……」

と、声を出したはいいが、男性の名前が分からず、出鼻を挫かれた。

男性はそれを察すると「ゼストだ」と短く名前を告げた。

「あのゼストさん、変なこと訊くようですが、今って何年ですか？」

「今は新暦75年だな」

あ、やべ、新暦じゃあわからないな。とはいっても、日本の暦なんて知らないだろうし、うゝむ……何かキーワードでいくか……。

「あの、それじゃあ、えっと、ジュエルシードっていうロストログアが暴れた事件を知ってますか？」

「いや」

「それじゃあ、闇の書っていうロストログアが暴れた事件は？」

それにゼストさんは、眉をピクツと動かした。どうやら、知っているみたいだ。

「それから何年経ちました？」

「……10年だ」

ゼストさんは、少し警戒の色を濃くしながらも、何も聞かずに答えを言ってくれた。

余計な事には、関わるまいといった感情が、なんとなく伝わってくる。

しかし、10年……覚悟はしてたが、そんなに月日が経つてるとは……、そのことに驚愕しながら、考えるのは、なのはやフェイト、はやてのことであつた。

さっきジュエルシードや闇の書の名前を言っただからだろうか、つい思い出してしまった。

ここまで来ると、生きているのが現実味を帯びてきて、急に会いたいという気持ちが沸いてきた。

そうなる、もう止まらなかつた。あの楽しかった日々が、どんな思い出されていく。

そしてそれは――

「どこか、痛いのか？」

「え？」

そのルーテシアの言葉に、思わず下を向く。そこには、俺の顔から零れ落ちた涙であろつものが、垂れていた。

きつと俺の沸いて出てきた気持ちが、心の許容範囲を超えて、涙として出てきたのだらう。

俺は恥ずかしくて、目を手で覆つた。

ルーテシアが俺を気遣い、近寄ろうとしたのをゼストさんが、静かに止めた。

俺もそれはありがたかつた。こんなの今知り合つた人だとしても、まじまじと見てほしくないから。

ようやく落ち着いた俺は、3人を見回した。

「……すいませんでした。見苦しいところを見せてしまった」

「……」

「うっん……」

「気にすんなよ」

ゼストさんはただ黙っていたんだけど、気にしないでいいといった意思が、見て取れた。気のせいかもしれないが。

ルーテシアも赤い妖精も、気にしてないといった態度を取った。

そして、飯が食い終わると、会話は完全に止まり、静寂が訪れた。

「何も……訊かないんですね……」

その静寂を破ったのは、俺だった。なんとなく、堪えきれなくて、そう訊いてしまった。

「聞いてどうなる」

答えは思った通りだった。

このゼストという男性は、とにかく関わりたくないのだろう。

だが、別に冷たいとかではない気がする。

寧ろ、どこか優しげな目をしている。

きつと、この2人を危険に晒さないために、なるべく不安要素を取り払おうとしてるんだろう。

あとは、ただ単に目的の邪魔か……まあ、どっちにしても、俺はいつまでもこうしているわけにはいかないようだ。

「お前はこれからどうする」

「……」

だが、特に何をするともなかった。

確かに俺は生き返ったみたいだが、俺は一度死んだ身だ。それは確実なはず。

そんな人間が、今更何をしようというのか？　なのは達に会いに行く？　そんなのあり得ない。あいつらの中では、確実に俺は死んだ。クリスマスのあの日に、俺は死んだんだ。ただ驚かせて、警戒を生ませるだけだ。死んだ人間が生き返るはずないのだから。それに、あいつらは俺のことなんて忘れているかもしれない。いや、それがいいんだ。忘れていれば、あいつらは俺のことを思い出して、泣かなくて済むんだから。

「……さまようだけです。特にすることはない……」

だから、そう俯きながら答えた。

ゼストさんは「そうか」と呟くと、そっぽを向いた。

そして、徐に立ち上がる。

「行くぞ、ルーテシア、アギト」

その言葉を言うと、ゼストさんは、歩いてここを去ろうとする。そこに――

「ゼスト……」

ルーテシアがゼストのローブを摘みながら、上目遣いで、するような瞳を向けた。心なしか、アギトと呼ばれた妖精も同じような顔で、ルーテシアの肩から見上げていた。

それにゼストさんは、たじたじになり、非常に困惑の色を表していた。

俺は優しい子だな、と思いながら、立ち上がって3人の所へ歩く。そして、ルーテシアの肩を叩いて、こちらに向かせる。

「ありがとう、ルーテシア。でもいいんだ。きっと、俺がいたら迷惑だろうし。だから、行きな」

「……」

ルーテシアはしばし迷ったように、視線をあちらこちらに飛ばすと、コクツと頷いて、ゼストさんと一緒にここを去っていった。

さて、俺はどうするか……、と独り考える。

とにかく、街か何かでも探すかと思いつたが、今、俺は毛布にくるまっている状態である。こんな状態で、街なんか歩いたら、確実に逮捕される。

はぁ、とため息を吐いて、毛布を二つ折りにして、端を肩の上で結んで、下も結ぶ。そうすると、服みたいになる。

まあそうしたところで、だからどうした、としか言えないんだが、ホントどうするか……。

俺はあてもなく歩き出す。

そこで、ふと思いついたのは、相棒^{デバイス}のこと。

俺は生き返ったみたいだが、相棒はどうなったんだろうか？ あいつもどこかで生き返ったんだろうか？ そう思ったところで、自嘲気味に笑う。

そんなわけないか……、と目元を押さえて、俯いた。

俺の相棒は、闇の書に突貫して、俺と一緒に死んだ。だけど、あいつは俺の無茶に付き合っただけで死んだのに、俺はこうして生きている。そう考えると、何で俺だけ生き残っちゃったんだよ、と泣きたくなかった。

思わず、その相棒の名が口から出た。

「……アクセル……」

次の瞬間、急に右手が光を放った。

「なん——ッ!？」

その光は、まるで俺の“アクセル”という言葉が、キーだったかのように増幅し、辺りを光で埋めていった。

俺はあまりの光に目を瞑り、光の奔流に耐える。

そして、収まったか……、と思い、目を開けると——

「へ……?」

思わず間拔けな声が出た。

俺の手の上にいたのは、緑色のボーイッシュな髪型に、碧色の瞳、若草色の服にスカートを身に纏った妖精。その妖精も戸惑っているのか、自分の身体を見て、その瞳を驚愕の色に染めていた。

そして、俺がいるのに気づいたように、その瞳がこちらを向き、更に驚愕に目を開かせた。

《相……棒……?》

「もし……かして……アクセル……なのか?」

その妖精の言葉は、俺がいつも聞いていた呼び方だった。そんな呼び方をする奴は、1人しかいない——そう、アクセル以外にあり得ない。

っていつか……!

「アクセル、お前、女だったのか!？」

《へ? え!? あ!? み、見ないで相棒!》

アクセルは身体を隠すように、手で覆う。俺はその相棒の言葉に思わず目を逸らした。

一体全体どうなってんだよ！ と今回何度思ったか、わからないことを思いながら、混乱する頭を冷やすことに専念した。

第1話（後書き）

初めまして、または、お久しぶりです。混沌の使者です。

とりあえず、プロローグと1話を投稿しました。
いかがでしたか？

まだまだ、未熟な身ですが、頑張って書きます。

一応、Strikersに沿ったもので、大体20、30話で
完結する話になると思います。

これで何か掴めたらなあ、と思います。

それでは、また♪

第2話（前書き）

第2話はアクセルお披露目会です。

てなわけでしょう。

第2話

「よし、情報を整理するぞ」

《うん》

俺と相棒は、あの後、落ち着きを取り戻し、とにかく、現時点でわかることを纏めていた。

要約するところだ。

俺と相棒は、あの時、確実に死んだはずだ。それは死の間際まで、意識があつたから、確実なはず。

だが、不思議なことに俺たちは、10年という月日が経った今、こつして生き返った。

そして、ある意味、一番の驚きだったのが……。

「アクセルが女だったとは……」

これだ。いや、もう、正直、生き返ったなんかより、こつちの方が驚きだ。だって、こいつとは、数ヶ月、一緒にいて、一緒に修行してきて、死地を乗り越えてきた相棒だ。まさか、今の今まで、ずっと男だと思っていたとは……。

《ごめんなさい相棒、ボクも隠すつもりはなかったんだけど、相棒が男だって、勘違いしてたから、それでもいいかな、って思って》

相棒は、俯いて、申し訳なさそうに、謝罪してきた。そんな顔されたら、怒るに怒れないじゃんかよ……。

「いや、俺も勘違いしてたのが悪かったんだ。すまなかったな相棒」
《相棒が謝ることじゃないよ！ ボクが言わなかったから……》

「いや俺が……」

《ううんボクが……》

そんな言い争いが、2、3回続き、2人して、プツと吹き出した。だつてよ、あの時、死ぬ決意して、今までありがとう、とか言つてたのに、次の瞬間（俺の感覚だと）には、こうして言い争つてゐて、何か可笑しくて、現実味が無さすぎて、思わず笑えてきちまつた。それはきつと相棒も同じなんだろうな。

「なあ、相棒」

《うん？》

俺は一頻り笑うと、その場に寝転がり、俺の顔の横にいる相棒を呼ぶ。

「おかえり」

《ただいま♪》

アクセルは可愛らしくニパツと笑みを浮かべると、ふよふよと浮かび、俺の胸の上に寝転がる。

《相棒、あったかい》

「う……ばっか、お前、変なこと言つなっつ」

《相棒、なに赤くなつてゐるの？》

俺の胸の上に寝転がりながら、アクセルは小首を傾げて、不思議そうな顔で尋ねてきた。

そのあまりの愛らしい姿に、自分の顔が紅潮していくのがわかった。

「……ッ！ な、なんでもない！」

「相棒、こつち向いてよ」

俺がそっぽを向くと、アクセルは自分の方を向かせようと、俺の頬を引っ張ってきた。

ああもう、男だと思ってたときは、こんなことなかったのに、と悪態を吐いたところで、ふと不思議に思ったことを口に出した。

「そついや、お前は何でそんな姿なんだ？」

そつだよ。さっきまで、他に色々あって、疑問に思わなかったが、元々、俺の相棒のアクセルは、碧色の丸い宝石だったはずだ。というか、一番最初に疑問に思ふべきところだったな。

《うーん、ボクにもわからない。あの時、ボクも自分の身体が壊れていくを感じたし、でも相棒と一緒になら、それでもいいって》

「……ッ、そういうこつ恥ずかしいこと言っな、バカ」

《でも、本当のことだよ？》

一切合切、全くと言っていいほど、嘘を吐いていない顔で、それも物凄くあどけない顔で、そう言ってきた。

なんというか、もう可愛すぎて、抱き締めたくなるなこいつは、と段々沸いてきた頭が、そんなことを考え始めたが、落ち着け、と理性がそれを抑え込んだ。

とりあえず、アクセルを掴んで、俺は座り直して、アクセルを前に置く。

「まあいいか。それで……お前は一応デバイスなのか？」

《うん。姿とか機能は、ユニゾンデバイスに似てるみたいだけど》

「ユニゾンデバイス？」

《簡単に言えば、術者の内から力を与えるデバイスかな？》
「そうなのか……じゃあお前は今、それになってるのか？」
《うっん。厳密には違うみたい。ほら》

そう言ったアクセルは、その姿を俺にとって、見慣れた姿——
鞘付きで、白銀色の幅広の巨剣に変化した。
あまりに唐突なことに俺は、口をあんぐりと開け、呆然としていた。

《どうかしたの相棒？》

「あ……い、いや、びっくりしてな……へえ、まさかデバイスに変化できるとは……」

アクセルの言葉で、呆然とした状態から復帰した俺は、その幅広の巨剣を掴み、鞘から抜いた。

「ははっ、あの時のままだな。この手に馴染む感じ。うん。本当にお前は相棒みたいだな」

《あゝ！ まさか信じてなかったの！ ひどいよ相棒！》

俺の言葉にアクセルは、憤慨して、妖精の姿に戻ると、ポコポコと小さい手で、胸を叩いてきた。

「すまんすまん、悪かったよ」
《もお……！》

相棒はプンスカプンスカ、と怒ると、腕を組んでジト目で、こちらを睨んできた。

何だか一々仕種が可愛いなこいつは、と再び沸いた頭が、良からぬ事を考え始めたため、理性がストップをかける。

「それで、具体的にそのユニゾンデバイスとの違いは何なんだ？」
《うん。さっきも言った通り、ユニゾンデバイスっていうのは、術者の内から力を与えるデバイスなんだ。つまりは、術者に融け込んで、一緒に戦うの》

「……つまりは、お前みたいに、デバイス化は出来ない」と
《そういうことだよ》

ふむ、と少し考えると、そういえば、さっきの赤い髪の子は、アクセルと同じような感じだった。ということは、アレが本物のユニゾンデバイスか……、と思いを馳せる。

あの頃は、聞いたこともなかったが、結構いるのだろうか？ と考えて、まあ考えても仕方ないか、と一瞬にして、考えを放棄した。

「他に特徴はあるのか？」

《他には……あ、アウトフレームになれるよ》

「アウトフレーム？」

《うん。これだよ》

突如、アクセルが光に包まれる。

一瞬、心配になったが、それも光が晴れていく内に、驚愕に変わっていく。どうも今日は驚いてばかりだ、ともう悟りにも似た感情を宿しながら、その光の中のものを見る。

そこには――

「アク……セル……？」

《うん、ボクだよ相棒》

なんというか、もうホント驚くのに疲れちゃった……。
アクセルは光が晴れると、その姿は、容姿はそのままに、身長

み小学校低学年くらいになっていた。

まあ、アレだ……。

「良い手品師になれよ」

《ならないよ！ 手品じゃないし！》

あ…… っと、思わず現実逃避をしてしまった。少し驚きすぎて、頭が回らないみたいだな。それで、自己を保つために、身体が勝手に現実逃避を行ったんだ。きっと。

今度は間違えちゃいけない、と思いながら、アクセルの肩を掴む。

「大丈夫だ、相棒。お前は俺が立派な手品師にしてやる」

《相棒…… う—— って違うよ！ 相棒があまりに真剣に見てくるから、頷きそうになったじゃないか！》

ダメだ…… 現実逃避状態が外れない。今日1日だけで、色々ありすぎなんだよ。頭の許容量越えちゃってるんだよ。整理する時間を俺にくれ。

「すまん。頭がショートしそうだ……」

《だ、大丈夫？》

俺が頭を押さえて俯くと、さっきまで怒り口調だった相棒は、氣遣わしげに見てきた。

そんな相棒を安心させるように、頭を撫でてやると、まるで、猫のように、目を細めて、気持ち良さそうにしてきた。可愛すぎるわあ、何か落ち着いてきた。撫でてるのは俺なのに、俺が落ち着くってどうなの？ とか思わなくもないが、アレだ、人の温もりに触れてるから、結局、どっちも落ち着くんだろう。

さて、現状で知りたいことは、大体わかったし、どうすっかなあ

……。

「これからどうするよう、相棒」

自分では何も思い浮かばなかったので、相棒に訊いてみる。

《なのはちゃん達に会いに行くとか？》

アウトフレーム状態を解除して、妖精モードになったアクセルが、その提案を出した。

だが、それは――

「ダメだ。俺たちは、少なくともあいつらの前じゃあ、一度死んでる。会いに行っただって、警戒されて、混乱させるだけだよ」

《そう……だね……》

アクセルは少し残念そうに俯いた。

まあそうだよな。こいつも、レイジングハートやバルディッシュとは、仲良くやってたし、会いたいよな。

俺は残念そうなアクセルの頭を指で撫でてやる。

「そんなしょんぼりするなよ。そうだ。遠くから見ただけなら、構わないから――な？」

《うん》

俺がそうやってあやしてやると、聞き分けの良い相棒は、コクツと頷いた。

俺は満足げに笑みを浮かべて、立ち上がる。

「そうと決まれば、地球に行く前に、何か服買わねえとな、行くぞ

相棒
「

《うん》

相棒はふよふよと浮いて、俺の肩に飛び乗った。

《ところで相棒》

「うん？」

《お金は？》

「……あ……」

第2話（後書き）

いかがでしたか？

今回はアクセルのこのみなので、文字数は短かったですでしょうが、楽しんでいただけたら幸いです。

では、また♪

第3話（前書き）

今回は第3話です。

アニメ的には、新人達の最初の任務の時ですね。

では、どうぞ。

第3話

《相棒、お腹空いた》

「何でデバイスが腹減らすんだよ」

《だって減るんだもん》

「はあ」

今の俺は1枚のコートを纏い、丈夫そうな木を杖にしながら、どこかの森の中を彷徨っていた。言つとくが、1枚のコートって言うたって、中は裸とかじゃない。ちゃんと服を着ている。ちなみに、コートには顔を隠せるようなフードが付いている。

あの後だが、金がないことに気づいた俺たちは、何か金になるものはないか、様々な珍しそうなものを見つけ、質屋に売りに行った。いやはや、何処の世界にもそういう店があつてよかった。

まあその際——店に売りに行く——はアクセルにバリアジャケットを展開してもらい、事なきを得た。とりあえずそのまま変換した金で、服を買い、それに着替えたわけだが……金が尽きて、考えてみれば、ルーテシア達と食事をしてから、何も食べてないことに気づいた腹が、グッと情けない声を出し始め、今はこうして金になるものがないかを探している。

だが、正直、服買う金を集めるのに、丸1日かかったのだ。そう簡単には見つからなかった。

《ん？ 相棒、あっちの方で、何か妙な反応が……》
「妙な反応？」

アクセルが何かを感知したらしく、東の方角を向いた。

俺もつられてそちらを向く。確かに何かの反応がする。だが、普通の魔力反応とは少し違う。どちらかというと、ロストログアの反

応に似てる気がする。

「気になるな……行ってみるか……どうせやることもないし」
《うん》

とりあえず、腹の虫を抑え込んで、妙な反応のする場所へと歩を進めた。

森を進んでいくと、目の前に断崖絶壁が現れたので、飛行魔法を使い、フードを目深に被って宙に浮き、下を見ると――

「列車か……」

何やら、凄まじい速度で爆走する列車があった。どうやら、暴走しているらしい。

《相棒！》

コートの中から顔を出したアクセルの声に、俺はアクセルの見る方角を向く。すると、そこには、流線型の飛行機械だろうか？ そんなものが大量に、こちらに向かってきていた。

一体何なんだ？ と頭を掻き、さてどうするか……、と思ったところで、遠くの方から魔力反応、更にわりと近くから魔力反応を感じた。

それも、感じたことがある魔力……、その事が俺の心臓を音が聞こえるほどに、脈打たせた。俺は今、相当緊張している。

心臓が跳ねすぎて、突き抜けるんじゃないかっていうほどに、ドクンドクンと脈打っている。

何だか変だ。俺の感覚じゃあ、せめて1週間会ってない程度なのに、この郷愁にも似た感じ。それほどに俺は、死んでる間、ずっとこいつらに会いたがっていたということだろうか。

何故だか、頭がクラクラする。あれほど会いたいと思っていた人たちに、ここまで早く会えることになるとは……、と何か運命めいたものを感じながら、だが、と思う。俺はあいつらに会ってはいけない。知られてはいけない。俺はもう死んだ人間だから……。

「そのフードの魔導師、こちらは管理局です！　今すぐ武装を解除してください！」

この声……忘れるはずがない。昔より少し大人びてるが、アイツの声だ。まあ、こんなところにいれば、怪しまれるのは当然だな。もう1人の方は、あっちの飛行機械のところに行ったか……。

機動六課では、若干のざわめきがあった。

大量の飛行型のガジェットが現れたかと思ったら、もう1つ列車の上の方から、魔力反応を感知し、フードの魔導師を捉えた。

仕方なく、ガジェットはどちらかというところ、殲滅戦特化の高町なのはが担当し、そのフードの魔導師をフェイト・T・ハラオウンが担当することにした。新人たちは列車の攻略戦である。

そんな中、フェイトはフードの魔導師の元へと向かっていた。こんなところにいる以上、もしかしたらガジェットを操っている関係者の可能性が高い。

フェイトは自然飛行するスピードが上がった。

フェイトがそのフードの魔導師を視界に捉える。すると、魔導師は逃げる気はまったくないのか、こちらを見向きもせず何か深刻そうな雰囲気醸し出している。

フェイトは魔導師を自分の間合いに捉えたところで、止まり魔導

師に呼び掛ける。

「そのフードの魔導師、こちらは管理局です！ 今すぐ武装を解除してください！」

フードの魔導師は、しばし沈黙すると、ゆらりとフェイトの方を向いた。

顔は見えないが、その雰囲気は何かに耐えているようだった。そして、魔導師は言葉を発した。

「フェイト・テストロッサか……俺はお前と戦う気はない……」

低めの声がフェイトの耳に届く。どうやら、男のようだ。

聞いたことのない声……のはずだ。なのにどこかで聞いたことがある気がする、とフェイトは訝しげな顔を作るが、すぐに意識をフードの男に向かわせる。

フードの男は、それだけ言うと、本当に戦う気はないのか、それ以降フェイトを見向きもなくなった。

フェイトはその態度に、何のつもりだ、と思ったが、やはりここにいる以上、事情くらいは訊かないといけない。

「なら、ここにいる理由を六課の方で、話してもらいます。武装を解除して、こちらまで来てください」

「すまないが、それは無理だ。放つては置けないか？」

「こちらもお仕事なので。あなたがこの件に関わっているかもしれない以上、連れて行きます」

フェイトはフードの男に詰め寄る。フェイトは有名である。その強さは管理局を知っている者ならば、ほとんどの者が知っているだろう。それに、相手は戦う気はないという。だったら……。

「そうか……なら、俺も全力で逃げるとしよう」

だが、男の返答は予期したものではなく、投降する気はないらしい。フェイトもその返答に臨戦態勢に入る。

「いくぞ相棒」

《でも相棒、ボクを起動させたらバレるんじゃないの?》

「あ、そうか……仕方ねえ、後で様相を変えとかないとな。今回は徒手空拳で戦うしかないか」

男は小声で何かと話し合っていると、デバイスを展開させずに拳を構えた。どういいうつもり……? とフェイトが考えた瞬間――

「ふっ」

「ひゃ!?!」

耳元に息を吹きかけられ、フェイトは思わず飛び退いた。

フェイトは耳を抑えて、耳を真っ赤にしている。

それを男は面白そうに見ていた。顔は見えないが、肩が揺れていることから、笑っているのだろうことがわかる。

フェイトはその男のふざけた態度に、憤りを示す。だが、冷静に考えると、あの男はいつの間に関に自分の後ろに回ったんだらうか?

と思い、戦慄を覚えた。目を離れた覚えはない。ただ、忽然と消え去ったのだ。

フェイトは今度こそ捉えてみせる、という決意と共に再び男を見る。

「無駄だよフェイト」

「あぐっ!」

しかし、またも捉えられず、後ろに回り込まれたフェイトは、肘関節を決められ、動けなくなる。

「くっ……」

フェイトは拘束を外そうともがくが、綺麗に極められているためか、全然外れない。

その間、男は何もせず、ただフェイトを拘束する。

「わかつたろ？ 逃がしてくれないか？」

すると、男は自分とお前では、相手にならないといった言い方をしてきた。

フェイトはその傲慢な態度に、憤りを覚える。

「だ……それが！」

「ぐおっ！？」

フェイトは頭を前に倒して、勢いをつけて後ろに思い切り、傾けた。それは男の顎にぶつかり、男は呻きフェイトの拘束が弛んだ。フェイトはそれを見逃さず、瞬時に男の拘束を外す。

フェイトは外した直後に、バルディッシュに鎌のような魔力刃を作り出し、男を切り裂こうとする。

しかし、男は瞬時に飛び退き、それを躲した。その際、痛そうに顎を押さえていた。

フェイトはこのチャンス逃さず、更に鎌で追撃する。

男は、うおっ！？ とか、おわっ！？ といった悲鳴を上げるも、フェイトの鎌は掠りもしない。

フェイトはそれに舌打ちすると、飛び上がり、鎌を振り上げると、

気合と共に振る。鎌の魔力刃は、フェイトが振ったと同時に離れて、ブーメランのようになり、回転しながら、男に向かう。

男はおっと、と言ってそれを躲す。

フェイトは男が躲したのを見越してたかのように、男の躲した地点に移動すると、その鎌を振り落した。

決まった……！！　と思うフェイト。今までの戦闘経験で、培ってきた勘が確実に躲せないタイミングだと告げていた。

しかし、その瞬間、フェイトは得も知れぬ感覚に捉われる。

——な……にこれ……？

奇妙な感覚だった。男の腕がまるでコマ送りのように動き、バルディッシュの柄の部分を掴み、鎌の動きを止めた。まるで、自分の周りだけ、時間の流れが変わったかのような感覚に、フェイトはどこか懐かしい感じを覚えた。

——でも、どこ……？

フェイトは鎌が止められ、無防備にもかかわらず、その感覚の正体を探してしまった。その結果、男に蹴られてしまい、飛ばされてしまう。そこまで、強く蹴らなかったのか、フェイトは大したダメージは負わなかった。だが、それでも充分離されてしまった。

「じゃあなフェイト。今日は楽しかった」

男はそう言い残すと、多重転移で逃げたようだ。

機動六課のサーチャーもその姿をロストした。

フェイトは男の言い草やあの奇妙な感覚に、思い出せそうで、思い出せないというもどかしい感じを覚えたのだった。

「ふゝ、逃げ切れたなゝ」

フェイトから逃げ切った俺は、どこかの森の中で、木にもたれ掛かっていた。

《あゝいゝぼゝうゝ》

そしたら、コートから出てきたアクセルがジト目で俺の事を見てきた。

《ホントならもつと早く逃げ切れたのに、何で逃げなかったの！あそこまでする必要なんかあったよ！》

アクセルは俺がやり過ぎたことに、プリプリ怒り出す。うゝむ、フェイトの顔を見てたら、思わず悪戯したくなっちまったんだよなあ。でも、正直に言うわけにもいかないしな。それにきちんと会えないと思うと、なるべく顔を見ていたくなった、なんてのも言えねえし。どう言ったもんかなあ。

俺がそうこう考えてる間も、アクセルはむう、と唸り、頬を膨らませながら、俺を睨んでいた。

俺はそれに「まあ落ち着けて」と、アクセルを宥める。

「思い付いたぞ相棒」

《何を？》

アクセルは俺の言葉に、可愛く小首を傾げる。

とりあえず、話題の転換に成功して、一安心したところで、口を開く。

「あいつらに正体をバレないように、サポートするんだ」

《もしかして、今後の方針？》

「おう」

《で、でも、フェイトちゃん達は、何の事件を追ってるの？》

「さあな。まあそこら辺は後々調べていこうや」

《短絡的すぎない？ あんまり関わり過ぎたら、正体がバレちゃうかもよ》

まあアクセルの言うこともつともだ。もし、フェイト達に本当にバレたくないと思うなら、関与しないのが一番だ。

でも、あれなんだよなあ……俺はあいつらが困ってるなら、放っておけないんだよなあ……、と思い、気まずげに頬を掻く。

あそこには、はやてはいなかったようだが、フェイトとなのはがいるなら、一緒の可能性は高い。

ならば、手伝わないわけにはいかない。これはもうなんというか一種の義務みたいなものなのだ。

あいつらのことだから、また何か大変なことでもしているのだろう。それを手伝わないのは、俺の本能が否定するのだ。

俺もつくづく損な性格してるな、と少し自嘲気味に笑った。

そんな俺の様子を見るアクセルは、頭の上に疑問符を浮かべていた。

「まあいいだろ。とりあえず、色々と動く前に、バリアジャケットとデバイスの様相を変えないとな」

《うん》

アクセルはまだ腑に落ちない感じだったが、俺の言うことならと

いった感じに頷いた。

「だがその前に」
《うん》

しかし、俺らはそれらを一旦保留にしても、やらなければいけないことがあった。それはアクセルも気づいているようだ。

—グウ—

—キュウ—

「腹減った」
《お腹空いた》

第3話（後書き）

今回は……まあ、再会ですかね。

フェイト達は相手が誰かわかってないわけですが、ヒントは散りばめられているという。

まあ、そんな感じでした。

それでは♪

第4話（前書き）

3日連続投稿）……かな？

さあ、何日まで連続で投稿できるかな？

では、どうぞ、

第4話

ここは機動六課の部隊長室。

今は機動六課が出来て、新人達の初めての出勤の後——そこに集まっているのは、八神はやて、リインフォース・ツヴァイ、高町なのは、フェイト・T・ハラOWNだ。

何故、隊長陣が集まっているのか、それはあのフードの魔導師についての話があるからだ。

八神はやては、全員集まったのを確認すると、口を開いた。

「あの魔導師、一体何者なんやろうか」

「うん。フェイト隊長があそこまであしらわれるなんて」

はやてもなのはも、あのフードの魔導師の実力に驚いていた。それはそうだ。相手にしたのは、管理局でも若くして、執務官になったほどだし。その実力は、幼馴染みの自分達が一番よく知っている。

だからこそ、苦戦ならまだわかる。相手を楽に倒せるなどと、自惚れているわけではない。ただ、軽くあしらわれたのが、信じられないのだ。それほどの実力差を持つ相手がいるのが。

と、そこで、はやてがフェイトの顔色が悪いことに気づいた。

「どないしたフェイトちゃん？ 顔色悪いよ？」

はやてはお仕事モードを解除し、友人としてフェイトを心配する。フェイトは顔を俯けて、誰にもわかるほど顔を青くしていた。

「……ご、ごめんね。なんでもないの……」

「なんでもないようには見えないよ。はやてちゃん」

「そつやな。今日は解散しよ。とりあえず、あの魔導師については、要注意つてことにしとこか。あとフェイトちゃんは、気分悪いなら、シヤマルに見てもらつてな」
「……うん……」

そうして3人は、解散することになった。

フェイト・T・ハラオウンは医務室に向かう廊下を1人で、歩いてた。

なのはが、送る、と言ってくれたのだが、フェイトはそれをやりわり断つた。

フェイトはある1つの事が気になっていた。それはもちろんあの魔導師の事。更に言えば、あの“コマ送りのような感覚”だ。

あの後、ずっと考えていて、その懐かしい感じを思い出した。それは――

――あの人の……

10年前、あの闇の書の暴走が始まり、私たちが作戦に失敗した直後に、自らの命と引き換えに、闇の書を破壊してみせたあの人。

“時流操作”。それがあの人の使っていた希少技能だ。その力は絶大で、時の流れを支配する、というもの。

その力は、ジュエルシードを巡る際に戦ったとき、模擬戦をしたときに受けたから、その感覚はわかっている。あの魔導師と戦ったときのあの感覚は、そのときの感覚に似ていた。

でも……、と思い直す。

――あの人は死んだ……。

私たちの目の前で、あの人は死んだんだ。その身体が崩壊していく様まではつきりと。

私のせいで……、その考えが浮かぶ。

あの時、私はあの人の様子がおかしいことに気づいていたはずだった。でも気のせいか、と思って考えをやめた。あの時、私がもつとあの人の事を考えていれば、あんな事にはならなかったかもしれない。あの人が死ぬことなんて、なかったかもしれない。

——手を握れフェイト！ 俺たちの手を！ 今はそれだけでいい！

あの人の事で思い出すのは、その言葉。あの人は、崩れゆく庭園の中で、そう言って私に手を伸ばしてくれた。嬉しかった。あの時、差し伸べられた手の感触は、10年経った今でも思い出されるようである。

だが、それを思い出すと、思わず泣いてしまいそうになる。

——もう、あの人はいないんだ……。

その事が重くのし掛かる。

でも……今はその事を考えてる暇はない、と思い、フェイトは顔を上げて、前を歩き出した。

高町なのはは、フェイトと別れて、自室のベッドに腰かけていた。手を組み、その上におでこを乗せて、なんだか悩ましい雰囲気を醸し出している。

思い出すのは、あの人の事。一緒に学校に通い、一緒に帰ったあの。そして、もうこの世には、いないあの。

何故、10年も前の事を、今この瞬間思い出したのか？ それには理由があつた。

——あの魔導師……。

と、今日現れたフードの魔導師のせいであつた。モニターで見たあのフードの魔導師の動きが、あの人と酷似していた。

なのはは、あの人と一番長くいて、一番近くにいた。一番近くで、あの人の戦っている姿を何度も見た。

あの人が空を翔る度に、空が紺碧に染まり、美しい色彩が生まれる。それを見る度に、私もあんな風に飛べたら、と常々思ったものだ。

そんなあの人の動きとあの魔導師の動きは、本当に似ていた。あの速さも避け方も、目を閉じれば、浮かんでくるあの人の動きと重なる。

しかし、それは——

——ありえない……。

あの人は、闇の書を止めるために、その命を散らした。だから、あの魔導師があの人わけがない。

あの人は自分のせいで死んだのだから。私が巻き込まなければ、あの人はこつちの世界に来ることはなかったはずだ。私が殺したようなものだ。

あの人はどんな時でも、私のことを心配してくれた。自分がピンチになつても、それでも私のことを。

あの人の言葉は、いつも私を励ましてくれた。フェイトちゃんのこと、悩んでいた私に——

——自分の気持ちを正直にぶつけられたいさ。それが俺の好きな

高町なのはって、女の子だぜ。

そう言ってくれた。あの時は、あまりに気障な言葉に笑ってしまったが、心が軽くなったのを覚えている。

いつも、そんな言葉で、場を和ませては、いざというときには、真剣に立ち回ってみせる。

そんな姿に見惚れていた。今でも時々考えることがある。何であの人はあんなことをしたのか。想像はつく。でも、あの人の口から聞かないと、結局は机上の空論でしかない。

——あの人の声が聞きたい……。

思わずそう考えたのはは、口元を押さえる。

ここ数年、そんなこと思ったことなかったのに……、と視界が歪む。

そう思うと今度は、会いたい、といった気持ちだが、溢れだす。考えても、どうにもならない。叶わない願い。

ダメ！ 抑え込まなきゃ。今はそのことを考えてる暇はない。新人たちの教育があるんだから！

なのはは自分を叱咤すると、顔を上げて、涙を拭った。

八神はやては部隊長室の椅子にもたれかかっていた。

フェイトちゃんは大丈夫やるか……、と思いながらも、考えるのはあの魔導師のことである。

どうにも気になる。はやてはモニターを開く。

そこにリインも近寄って、一緒に見てくる。

そのモニターに映ったのは、あのフードの魔導師。

「どうしたですか、はやてちゃん？」

そんなはやてにリインが、気になって質問する。
はやては、ううん、と悩むような仕種をして、徐に口を開く。

「この男の言葉、気にならへんか？」

「言葉ですか？」

リインはわからない様子で、首を傾げる。

はやてはモニターを巻き戻し、ある場面まで戻す。

それは男の第一声のところである。

この時、男は「フェイト・テストロツサか……」と言った。

その事に、はやては疑問を覚えていた。それをリインに言つと、
「どこがですか？」と返された。

「確かにフェイトちゃんは有名やし、名前を知ってても不思議やない。でも、もしフルネームで呼ぶとしたら、フェイト・T・ハラオウンって呼ぶはずや」

「そうかもしれないですけど、長いから省略しただけかもですよ」

「そう……やな……」

他にもある。あの魔導師は、やけにフェイトに親しげな言葉で話しかけていた。

もし、自分の予感が当たっているならば、あの魔導師は、フェイトがハラオウンの養子に入る前に、フェイトと会っており、少なくとも、知っており、更に養子に入った後、まったく接点がない相手ということになる。

そして、もし、もしだ。その魔導師が、私やなのはちゃんのことを知っているならば、思い浮かぶ人は1人しかない。

あの闇の書の最後の作戦で、命の灯を消したあの人だ。

私のせいで死んだあの人。私がすっかり主として、その役目を果たしていれば、あの人はあんなことをしなくて済んだ。済んだのだ。本来、私がしないといけないことをあの人が、その命を賭して、それを為してくれた。

でも……。

——そんなん頼んだ覚えはないわ……。

はやては顔を俯けた。リインが雰囲気の変わった、はやてを心配するように寄り添う。

あの人とは、短い間だったが、仲良くしていた。それだけでも、あの人の優しさは、充分伝わってきた。

それも、まるで人の心が読めるんじゃないかっていうほど、気が利く。あれはもう才能みたいなものだろう。

私はそんなあの人のおかげで、闇の書の闇の中から抜け出すことが出来た。あの人のくれた言葉。

——それでいいのかよ、はやて！ よくねえだろ！ 戻ってこい！
俺がこの命を懸けて、お前を守ってやる！！

闇の書の闇の中にいたのに、あの人の言葉は届いた。その言葉で、私は顔を上げて、あの闇の中を抜け出したんや。

その言葉は、確かに嬉しかった。でも、それでも——

——ホンマに命懸けてどないすんねん。残された人が、どう思うかわかつとんのか……。

はやてにはその言葉の責任も重くのしかかっていた。あの人にあんな言葉を言わせたのは、自分が弱いからで、自分が何も知ろうとしなかったから。

あの人はそんな私の代わりに、その命を散らせたのだ。

何で？ そんな言葉が浮かぶ。はやてとは、たった数日、友達として関わっただけだ。それなのに……。

でも、わかってる。あの人は、そんなことを気にする人じゃない。たとえ、数日だって、友達になった人——いや、目の前に困っている人がいるなら、助けようとするだろう。そんなところに惹かれていたんだし。

わかってる。わかってるけど——

——それでも、何でって思てまう……。

どうしても、そう思ってしまう。

いっそ、貴方の口から、言ってくれたら……、と叶わぬことを思い、一筋の涙を流した。

「いらつしゃいませー」

唐突だが説明しよう。

とりあえず、腹が減った俺たちは、何か探そうとしたんだが、さすがにもうそんな気力も出ず、アクセルの《バイトした方が早いんじゃない？》という言葉に、それもそうか、と頷いた俺は、ミッドチルダの店でバイトをしている。

何故、ミッドチルダなのか？ 地球に行けばいいじゃないか？

とか、思うだろう。俺も最初はそう思ったわけだが、やはりあつちでは知り合いが多すぎる。10年経った今、知り合いがどこに住んでいるのか、確認できない以上、無闇にあちらで働くのは、感心しな

い。

ならば、他にバイトできるところだと、手早く稼ぐなら、やはりデカい街があるミッドチルダ以外にない。というか、それくらいしか知らない。元々、次元世界についての知識など、ほとんどないのだ。まあここでもバレる可能性はあったが、地球よりは低いだろうと考えた。

そういうわけで、ミッドチルダでバイトを探そうとして、どこにするか、と肩に乗るアクセルと話しながら歩いていると、アクセルが不意に《ここがいい!》と言ったので、とりあえず、入ってみた。どうやら、ファミレスか何かみたいだ。ついでに、日バイトって募集してますか? と訊くと、はい、と答えられたので、これ幸いと思い、そのままスタタッと店長の元まで行き、面接を行うことにした。

色々質問されたが、店長は、俺に出身世界は? と訊いてきたので、97管理外世界出身と答えたら、採用、と手を握り言われ、すぐさま採用が決まった。ちなみに、店長は小太りの優しそうなおっさん。

その後、早速ホールに出たわけだが、なるほど、と納得した。それは、メニューがやけに見たことあるもの揃いなのだ。つまりは地球の料理なわけだ。通りで、出身世界を言ったら、採用されたはずだ。きつと、ミッドチルダ人には、馴染みがないから、メニューを覚えるのに苦労する人が多いのだろう。

しかし、どうして、ミッドチルダにこんな地球の料理を売っている店があるのだろうか? と思い、同じホールの人に訊くと、「ほら、管理局にエース・オブ・エースって呼ばれている容姿端麗で、腕利きの局員がいるだろ? その局員の影響なんだってよ」と言われた。なんとなくだが、もしかしたら、なのはかもしれないと思った。俺はあいつなら、言われかねないと苦笑を漏らした。

俺はホールの仕事をそつなくこなし、夜の街へとしゃれこんだ。まあ、しかし、本来なら俺は、子供の状態から、急に大人になっ

たはずなのだが、なかなかどうして、結構落ち着いたものである。仕事もしたことなどなかったが、案外簡単だったし、ふむ、どうやら、精神年齢も成長しているということなのだろうか？ まあいいか。

俺は日バイトの給料を片手に、コートを羽織って、さてどうするか……、と考える。

あの店長は、よかつたらここで本格的にバイトしないかい？ みたいなことを言っていたが。まあそれもいい。とにかく、金がないからな。

それと、飯の事しか考えてなかったが、住むところも探さなくてはいけない。

だが、今は飯だ。ファミレスなんかにしたせいか、腹が減って仕方ない。アクセルも同様なのか、俺のコートの隙間から顔を出すと、キヨロキヨロと店を品定めしていた。

と、次の瞬間、相棒は目を光らせて、指で差して叫んだ。

「相棒、あれ！」

そちらを見た俺は、思わずずっとこけた。

いやだつて、まさか『かつ。寿司』があるとは……。つくづく地球の代物がノミネートされてるな、としみじみ思いながら、まあ、これなら一皿100円で、結構満腹まで食べそうだな、と考え、俺たちは店に入った。

店の中は、まるつきり地球のそれと同じだった。これは現地まで行って、相当調べたに違いない、とかどうでもいいようなことを思いながら、とりあえず席に座る。

そんなわけで食べ始めたわけだが――

「具と酢飯を分けて食うやつ始めてみた」

《う、うるさいなあ、ボクの口に入らないんだもん》

思わず苦笑してしまった。

アクセルは具を取って、具と酢飯を分けて食べていた。もちろん、俺は普通に具と酢飯と一緒に食べている。

てか、口に入らないんなら、アウトフレームになればいいだろう、と思ったが、言葉には出さないでおく。だって、この方がかわいい——ああ、いや、なんでもない。

しかし、まあそんなアクセルを見ると、なんだか和む。

そっいゃ——

「あの時のアクセルは可愛かったなあ」

笑いを堪えながら、俺がそう言うと、アクセルは《うう……そのことはもう忘れてって言ったのに……》と頬を赤らめて、俯いた。

それは俺の服を買いに行った時のことだ。

俺の服を買い終わった時のことだ。

店員が、「それってユニゾンデバイスですよね！」と割とテンション高めに言ってきたので、「え、ええと、まあそうですね」とちよつと違うが、まあ同じようなものだろうと思い、そう返した。

「実はですね、うちの店はユニゾンデバイス用の服も取り扱ってるんですよ！」

そしたら、再びテンション高めの答えが返ってきて、俺はそのテンションに押され——

「へ、へえ、どんなのを扱ってるんですか？」

と、つい言ってしまった。何だろうか、こういう店員って、物凄い勢いがあって、どうにも気圧されてしまう。

店員は目を光らせると、「ちょっと待っててください！」「と言って、奥の方に言った。

よし、去るか、と思ったのだが、店員は光の速さで戻ってくると、品物を見せてきた。てか、これ――

「ふ・く・じゃ・ね・え・し・し！」

何故か店員が持ってきたのは、ユニゾンデバイスが付けられるような小さいネコミミとネコシッポだった。

なに持ってきてんのこの人！？ アクセルになに付ける気だよ。店員のギラギラと光る目に、アクセルも俺の後ろに隠れて、震えていた。

とりあえず適当にあしらって――

「ほら、付けて付けて！」

あつるえゝ？ 俺の後ろに隠れていたはずのアクセルは、いつの間にか店員に拉致られていた。

てか、こいつ絶対自分が見たいだけだろ！

アクセルは店員の勢いに押されると、されるがままネコミミとネコシッポを付けた。

こ……これは……！

「やあん！ 可愛い！！」

「アクセル……」

アクセルはそれを付けられると、羞恥で顔を真っ赤にして、俯いていた。

いや、しかしマジに可愛い。なにこの可愛い生き物。本当にアクセルか？ おかしいな、子供のときはただの生意気なやつだったはずなのに。人間フォルムになるとここまで違うのか……！ と戦慄しながら、俺はジッとアクセルを見つめる。

アクセルはその視線に、もじもじしながら、うう、と嘆いていた。そんなアクセルに店員は、何事かを呟いた。アクセルは何を聞いたのか、それでまたも頬を赤く染めた。

「ほら、早く言ってあげて、あなたのご主人様に♪」

《で、でも、相棒にそんなこと……》

「相棒じゃないでしょ！ ご・しゅ・じ・ん・さ・ま♪」

《うう……》

アクセルの言葉は、一瞬にして封殺され、アクセルは店員の勢いに押され、口をパクパクさせながら、何かを言おうとしては、諦めるといった行動を繰り返す。

だが、最終的には店員に押されて、意を決したように俺の方を向いた。

《ご、ごごご主人様！》

ご主人様！？

《ぼ、ボクがご奉仕してあげる》

ご、ご奉仕て……！

そう言ってアクセルは、上目使いになり、ネコのポーズを取ると、

止めの一撃を放ってきた。

《に、にゃん》

「ぐ……ふぁ……！」

バカな……！　今までこんな一撃を受けたことがあっただろうか……否！　断じて否だ……！

可愛いとは、可なり愛でられる者に言われる言葉だ！　俺はこれから、アクセルを目一杯愛でることにしよう！　何故なら可愛いから！　可愛いは正義だからだ……！

待て！　落ち着け俺！　何言ってるんだ！

俺は沸き出した——寧ろ、吹き出した頭を必死に落ち着かせる。アクセルなんか、もう自分が見てられないのか、顔を真っ赤にして俯いて、《……相棒のばかぁ……》と呟いていた。俺関係ねえじゃんよ。

ちなみに店員は悶えすぎて、身体が恐ろしいくらいクネクネしていた。店員はその状態のまま、口を開く。

「良いものを見せてもらったわぁ。それは記念に挙げる」

そう言い残して、未だにクネクネしたまま奥へと消えた。

ようやく落ち着いた俺は、恥ずかしがって動けないアクセルのネコミミとネコシッポを取ってやる。

《相棒……》

アクセルは俺に、ありがとう、といった視線を向けた。

俺はその視線に「気にするなよ」と返し、ネコミミとネコシッポをポケットにしまった。

《相棒……？》

アクセルは俺のその行動に、訝しげな視線を俺に向けた。
すまん相棒。俺の本能が叫ぶんだ。これを捨てるなど……！
そしたら、アクセルは再びモジモジし出した。俺が、どうした、
という視線を向けると、アクセルは上目使いで俺を見て、口を開い
た。

《相棒は……またして欲しい？》

「……ああ（キリッ）」

アクセルは再び顔を赤くして、俯いた。

俺のバカ野郎……。

これは俺のせいなのか？ 寧ろ、アクセルが可愛すぎるのが、い
けないんじゃないだろうか？ そうだ俺悪くない。うん、悪くない。
これ、きっと、アクセルが可愛いせいだ。俺、決して悪くない。

まるで、暗示のように心で呟き、「いくぞ、相棒！」と言って、
ここに来る前に買ったフード付きコートを羽織り、相棒と共に店を
出た。

店を出た直後に、アクセルは今更自分の発言が恥ずかしくなった
のか、コートの中から、《やっぱりさっきのことは忘れて……》と
か細い声で言ってきた。

すまん相棒。忘れることは……出来そうにない……！

俺は言葉を濁して、街を歩くのだった。

まあ、そんなことがあったせいなのかはわからないが、アクセル
は大体コートの中にいるようになった。

その事を思いだした俺は、にへらへら、と頬を弛ませる。
それに気づいたアクセルは、『ばかばかばか〜！』と何度も俺
の肩をポコポコと叩くのだった。

第4話（後書き）

アクセル、な回でした。

いえ、冗談です（笑）

なのは達の苦悩の回ですね（笑）

では、また♪

第5話（前書き）

なんとか連続投稿中。

もうすぐ途切れるかもです……。

ではどうぞ。

第5話

さてと……。

俺は安宿を出ると、んゝ、と背筋を伸ばす。

ちなみに、格好は相変わらずフード付きコートだ。アクセルも相変わらずコートの中。あと、俺はあのファミレスで働くことにした。せつかくだし、金がないとどうにもならないからだ。

まあ、それは置いて、今は情報である。

なのは達の手伝いをするにしても、まずは何をしているのか？

どこにいるのかを知らないといけない。

それを知るために、ここ数日は情報を集めていた。

とりあえず、熱心な情報集めでわかったことは、なのは達はミッドチルダ中央区画湾岸地区にある機動六課という場所にいるらしい。そこはどうやら、古代遺失物管理部というらしい。つまりは、ロストロギアを取り締まる場所ということだ。あいつらしい……かな、と思うが、どうにも、腑に落ちない。

どうやら、あいつらは管理局では大分出世頭で、メキメキ業績を上げている若きエース達らしい。

そんな奴等が一堂に会すこと^{かい}を組織が、了承するだろうか？ 組織の事はよくわからないが、戦力を分けないと、なんというか、この部署だけ優秀な人材が集まってずるいぞ、みたいなことになるのではないだろうか？ それに強すぎる力は、言ってしまうば、諸刃の剣だ。謀反など起こされた日には、たまったものじゃない。

そんな理由から、どうにも、あの機動六課というのには、別の目的があるように思える。

まあ、それが何なのかはわからなかったが。

これ以上調べるなら、内部に侵入する以外ないだろう。

だが、実は俺は良い情報を手に入れていた。

今日この日、どうやら、なのは達、機動六課はホテル・アグスタ

とかいう場所で、仕事があるらしい。

俺はそれを陰ながら、手伝うために今はそこに向かっていた。

とは、言っても、正規ルートは通っていない。ホテル・アグスタ近くの森の中を、進んでいる。

てなわけで、早速、ホテル・アグスタをその視界に捉えた。俺は買った双眼鏡で、周りとはどんな様子かを確認する。

管理局員が奔めいてるな……、といった感想が浮かぶ。

しかし……物々しい……か……？　どうやら、何かのオークションをするらしいが、そんなに貴重なものがあるのだろうか？　まあ、そういうところは、結構きな臭いことがあるっていうし、当然なのかな……。

「ところで、アクセル、オークションの開始はいつからだ？」

《あと3時間後だよ》

「長……」

その間、何してればええねん、とどこぞの関西人のようなツッコミを入れて、「暇だ」と言っ、後ろに寝転んだ。

そして、何分経ったのか、俺は静かに目を開ける。

「アクセル……」

《うん。あの機械達磨の反応だよ》

「いい暇潰しだ。生き返ってから、剣も振ってねえし、試し斬りといくか」

《もう……近くには機動六課がいるんだよ？》

「顔見られなきゃ大丈夫だよ。新しいアクセルのお披露目といこうじゃねえか」

《どうなっても知らないよ》

アクセルが光に包まれる。そして、晴れると同時に現れたのは、

黄金に輝く幅広の巨剣。以前のアクセルは、白銀色の幅広の巨剣だった。少し派手過ぎたか、と思ったのだが、まあ使えるならいいか、と思い直し、このままでいった。

次にバリアジャケットだが、以前は白一色で統一した衣服だったが、今は全身を黒い衣服で統一してみた。最後にその手に、目の部分だけ、細く空いている仮面を持っている。

俺は茶色いコートに、その下にバリアジャケットを着て、その顔に仮面を着けた。そして、金色の剣を掲げる。

あとは突き進むだけだ……！

「いくぜ相棒……！　ただ一刀の元に――斬り伏せる……！」

紺碧色の魔方陣が、足元に浮かび上がり、俺は機械達磨共に向かって、突撃を開始した。

『『『！！？』』』

その時、機動六課のロングアーチ勢と前線の者達、全員に衝撃が迸った。

凄まじい魔力反応を感知したのだ。ロングアーチは機械が即座に感知し、前線メンバーはその肌で、感じ取った。

前線でガジェットを潰す予定だったシグナムは、瞬時にシャマルに通信を送る。

なにがあつた……？

突然、魔力反応が……！　今、位置情報のデータを送るわ！

シグナムの元に、その魔力反応の位置情報が送られる。

一体何者だ……！ とシグナムは戦慄した。これまでも、幾多の戦闘を管理局でもしてきたが、ここまで1人の人間に戦慄を覚えたのはいつ以来か。奴以来だな……、と10年前に戦った自分と同じ剣使いの少年のことを思い出した。

だが、今はその事を考えている暇はない。シグナムはヴィータやザフィーラに、その魔導師の相手は自分がする旨を念話で送ると、その魔導師の元へ飛んでいった。

確信はないが、恐らく相手は、あの以前現れたフードの魔導師だろう。あのテストロッサを簡単にあしらったという。

油断は出来んな……、と考えながら、魔導師の元に辿り着いた。

「……」

着いたら、シグナムは思わず、言葉を失った。それはコートを来た仮面の大剣使いが、嬉々としてガジェットを倒していた。まあ、仮面を被っているので、顔は見えないが。

そういえば……、と思い出す。奴は確か、テストロッサに戦う気はないと言っていた。だがあそこにいた。そして今、奴はガジェットを倒している。

つまりは、奴の目的はガジェットを作った犯人……現時点では、ジェイル・スカリエッティということになる。

だが、やはり直接奴に聞かねばならないと思い、シグナムは地上に下りる。

魔導師もシグナムに気づいたのか、近くにいた最後のガジェット？型を黄金に輝く大剣で斬り裂き、シグナムの方を向く。

魔導師はその仮面のお陰で、表情は読み取れないが、どこかやる気はないといった感じが見てとれる。

シグナムは目を細めて、魔導師をジッと見る。何か……変だ……、

と妙な違和感を覚えた。既視感——というのだろうか。それに似ていた。こうして立ち会っているだけで、その既視感が増していく。一体何者なのだろうか？ といった疑問が浮かんだところで、魔導師が口を開いた。

「シグナムか……前にも言ったが、俺はお前達と戦うつもりはない」

やはり、あの時の魔導師か……、と自分の予想が、当たったのを確認し、シグナムも口を開く。

「だが、一緒に来る気はない……か？」
「ああ」

シグナムはすらりと剣を抜くと、言葉を発する。

「事情も話せはしないか？」
「そうだな」

その魔導師の言葉で、シグナムは自身の足元から、ベルカ式特有の三角形の魔方陣を浮かばせた。

「ならば、もう言葉はいらぬ」
「相変わらず、剣で語れか……」

魔導師の小声で呟かれた言葉は、シグナムには届かなかった。魔導師は未だやる気はないのか、言葉を続ける。

「いいのかシグナム？ 人畜無害な俺を構っている暇はないと思うがな。寧ろ、俺はお手伝いをしてやってるんだぜ」

「貴様が心配する必要はない。前線メンバーは皆優秀だからな」

シグナムはその魔導師の尊大な態度に、多少イラッとするも、冷静にそう返す。

その間も、シグナムと魔導師の間には、バチバチといった剣気が交差する。

動けない……、シグナムは一筋の汗を垂らす。魔導師には隙がなかった。まるで、自然体のように立ち、隙だらけのように見える魔導師だが、その実、まったく隙はなかった。

何かのきっかけさえあれば、その拮抗は解ける状態だ。

その瞬間、遠くから爆発音が聞こえた。ガジェットが壊れた音だ。その音で、空気が動いた。

「……ッ！」

キンッという剣がぶつかり合った甲高い音が鳴り、2人の姿は交差し位置が逆転する。

シグナムはその威力に顔を顰める。たったの一撃だけで、腕が痺れた。あの細腕でここまで……！それにシグナムは驚愕し、更に既視感が増大していくのを感じた。

——なんだというのだ……！

それを煩わしいと感じながら、瞬時に振り向く。魔導師もほぼ同時に振り向いた。

そして、再び駆ける。剣同士がぶつかり拮抗。すぐに弾かれる。

「レヴァンティン！」

《エクスプロージョ！》

レヴァンティンを鞘に納め、カートリッジをロードし紫色の魔力

が、溢れだす。

「相棒！」

《うん！》

魔導師は剣を背中に背負った鞘に仕舞うと、片手を前に突き出す。その手に魔力が凝縮していく。

「飛竜一閃！！」

「デイベインバスター！！」

シグナムの放った魔力を乗せた連結刃による一撃が、魔導師の砲撃とぶつかり煙が舞う。

デイベインバスターだと……！　なのはと同じ砲撃に、シグナムは多少驚く。だが、デイベインバスターはどちらかというと、そこまで難しい魔法ではない。それはスバルが真似していることからわかる。

だが違う。既視感は猶もシグナムを侵食していく。私はこの男と会ったことがある……！　その既視感はシグナムにその答えを導き出した。

だがどこで……？　思い出せない。最近ではない。前だ、ずっと前。だが、はやてと会う前ではない。ならば……！

その答えが出た瞬間、心臓を鷲掴みにされたような感覚に陥る。

まさか、そんな……！

それはシグナムの動き、思考を固定させてしまった。

シグナム！

そのシグナムにシャマルから、念話が届いた。それでシグナムは思考の渦を抜け出す。

あの魔導師が新人たちの元に向かつてるわ！ 急いで！
すまない！ わかった！

シグナムは短く謝罪をし、新人たちのいる後方まで急いで下がった。

本当に貴様なのか？ だとしても、今さらになって何故……？

こちらは新人達のいる後方。

今は先程有人機動に切り替わったらしいガジェットを相手にしていた。

前線はヴィータとザフィーラで抑えていたはずなのだが、どうやら敵側に召喚士がいたらしく、優れた召喚士は転送の達人でもあることから、新人達のところまで、ガジェットが来たのだ。

それに新人達是对応しているのだが、有人機動に切り替わったガジェットは、今までの対応では対処できず、苦戦していた。

そんな中、ティアナは自分の攻撃が効かないことに、苦渋の顔を示していた。

ティアナはここ数日、考えていた。自分が何故ここ——機動六課にいるのかを。何故なら、六課前線メンバーの中で自分だけが凡人だったからだ。

隊長や副隊長陣は言わずもがな、歴戦の勇者たち。相方であるスバルは、ティアナの目から見ても才能が有り、伸び代のある子だ。エリオもあの歳にして、魔導師ランク陸戦Bを持っているし、キャロに関して、竜召喚というレアスキル持ち——なにより、フェイト隊長の秘蔵っ子達だ。

この中で、自分だけ特筆したものがない。

だが、だからといって、そのまま黙っているつもりはない。自分はいつだって証明してきたのだから。自分の能力と勇気を。

だから、シヤマルやロングアーチの人たちが、フードの魔導師が迫っており、もうすぐシグナムが来るので、それまで耐えるように、と伝えられても、自分たちがやると言って、譲らなかった。

エリオとキャロを下げ、スバルとティアナはガジェット群と対峙する。

スバルはガジェットたちを引き付けて、ティアナの魔法の時間を稼ぐために、ウイングロードを走りながら、牽制する。。

——特別な才能やすごい魔力がなくなたって、一流の隊長達がいる部隊でだって、どんな危険な戦いだって……。

ティアナの足元には、ミッドチルダ式特有の円形の魔方阵が浮かぶ。更に周囲にオレンジ色の魔力の弾丸が、生成される。

「私は——ランスターの弾丸は、ちゃんと敵を撃ち抜けるんだって……！」

俺はシグナムを振り切ると、新人達のいる後方へと下がっていった。

それというのも、さっきシグナムと戦っていた最中に、魔力反応を感知した。恐らく、あれは転送魔法だ。しかも、新人達の方だった。

アクセルが言うには、どうやらあの機械達磨は明らかに動きが変

わって、強くなったとか。まあ、それ以前に、あの機械達磨、ただの機械かと思っただが、近付いたら魔力がキャンセルされた。どうやら、妙な力を持っているらしい。

まあ、ちよつと濃いめに魔力を込めたら、簡単に斬れたが。

だが、新人達に相手にさせるには、少しキツイ気がするのだ。

実力の程はわからないが、あの列車のときに見た時は、まだまだ甘いという印象。

だからこそ、あの時期の奴らつてのは、無茶をしたがる可能性が高い。

いや、まあ、9歳から19歳になった奴が、何言つてんだっと思うだろうが、俺も9歳の頃は無茶をした。闇の書に突っ込む以外にもな。

だから、どうにも不安が拭えない。

俺は新人達のいる場所まで急いだ。

そして、その姿が見えてくると、予想通りの展開があつた。

オレンジ色の髪の少女が、明らかに自分の抑えきれる限界以上の魔力弾を操ろうとしているのが見えた。

あれは暴発するな……、と直感的に悟つた俺は、更にスピードを加速させた。

ティアナの放った魔力弾は、寸分たがわずガジェットを破壊していく——はずだった。

しかし、1個の魔力弾が、1体のガジェットを仕留め損ね、そのまま、ウインググロードを走るスバルの元へ、吸い込まれるようになっていった。

スバルはティアナが、そんなミスをするとは露とも思わず、打ち

合わせのフォーメーション通りに走っていて、気づくのに遅れた。
そのため、完全に避けきれないタイミングを失い、スバルは衝撃に
備えた。

だが――

「……」

フードの魔導師――今は茶色いコートを羽織った黒衣の魔導師――
が、スバルの目の前に突然現れ、ティアナの放った魔力弾を“素
手”で、鷲掴みにしていた。

魔導師はその掴んだ魔力弾を振りかぶり、残ったガジェットに向
かって、投げ放つ。その魔力弾はガジェットを撃ち抜いた。

「あ、ありが――っ！」

スバルが突然のことに頭がついていかず、とりあえず、頭が助け
られたことのみを理解し、お礼を述べようとした瞬間、魔導師の姿
が消えた。

スバルは、どこに……！ と驚いた顔で、周囲を見渡す。
すると、その魔導師はいつ間に移動したのか、ティアナの前にい
た。

ティアナは自分のやったことが、理解できていないのか、魔導師
が目の前にいても、微動だにしない。そのことにロングアーチやシ
ヤマルが、ティアナに呼び掛けているのだが、それでもティアナの
頭には入ってこないのか、反応がない。

スバルが、エリオが、キャラが急いで、ティアナの元に向かおう
と、ウイングロードを作り出した。

その瞬間、パーンっという甲高い音が鳴り、スバルやエリオ達の
動きが止まった。

ティアナは何をされたのかもわからないまま、頬を押さえ前を向

いた。すると、そこにいたのは、あのフードの魔導師だった。それで、やっと自分の目の前に魔導師がいることが分かり、更に頬を叩かれたのだと理解した。

ティアナは魔導師を迎撃しようとしたのだが、指が——身体が震えて、まったく動かなかった。それはスバルたちも一緒のようだ。その正体はすぐにわかった。恐怖だ。

——次元が違う……！

その内に秘めた魔力量が——実力がわかってしまった。何をしても無駄というのが、それだけでわかった。全身が震え、力が入らない。押し潰されるようなプレッシャーに、ティアナは立っていられず、その場にぺたりとへたりこんだ。それに合わせて、魔導師もしゃがみ込む。

「なあ、訊くぞ？ お前は今、何をした？」

「わ……たしは……」

魔導師の言葉に、もうわけがわからず、ただ答えようとするが、その次の言葉が続かない。

自分のミスを認めたくないのか、それとも、ただ単に恐怖で二の句が告げないのかは、わからないが、それ以上言葉にはならなかった。

「勇気と無謀を履き違えるなよ。新人には新人の戦い方がある」

ティアナの肩に手が置かれる。魔導師の表情は見えないが、心配してる感じが伝わってきた。

それが伝わったのか、ティアナは考えるように俯いてしまった。その瞬間、魔導師はティアナの元を跳び退いた。

その直後に火炎を纏った剣が、ティアナの目の前に振り落とされた。

「無事か！」

それはシグナムであった。

ティアナはそのシグナムによって生まれた熱風に、戦々恐々しながら、呆然と頷いた。

実際、シグナムによる攻撃に一番恐怖を感じたティアナだった。

シグナムはそんなティアナを見て、傷がないことを確認した後、魔導師を見る。

魔導師はそのまま立ち尽くしていた。その大剣を肩に担ぎながら。

「貴様は……！」

そのまま言葉を続けようとしたシグナムだが、うまく言葉が出なかった。

一体何と言って確認すればいいのかわからなかった。奴は本当にあいつなのか……？ と疑問があれど、そんなはずはない、とすでに答えは出ていた。

死人が生き返るなどありえないのだから。シグナムはそう考え、キツと魔導師を睨む。

魔導師は、やれやれ、と肩を竦ませ、言葉を発した。

「仕方ないな。じゃあ俺が味方である証拠を見せようか」
「なんだと……？」

シグナムは油断せず、魔導師の動きに注意する。
しかし、魔導師は微動だにしない。

なにを……？ と思った瞬間、突風が吹いた。

——ディメンジョンソード・Eモード

突風は魔導師から吹いていた。シグナムはその突風に耐えながら、油断なく構える。

次の瞬間、辺りの森から、ガジェットが破壊される音が同時に起きた。

そして、ロングアーチから信じられない報告が送られてきた。

が、ガジェット、全機撃破……

ばかな……、とシグナムは驚きに震えた。ヴィータやザフィーラは、未だ戦闘中だった。更に言うなら、まだガジェット群は大量に残っていた。

それが一気に消えた。破壊された。そして、それを為したのは、言動から言って、“まったく動いていなかった”この魔導師ということになる。

ガジェットは1箇所にいたわけでも、この近くにいたわけでもない。様々に散っており、ここから、大分遠くにいたガジェットもいる。

それを1歩も動かず、この魔導師は倒したというのか……、その信じられない事象に、シグナムは呆然と立ち尽くした。

「信じてもらえたか？」

「やはり、貴様がやったのか？」

「ああ、俺と相棒でな」

「……」

魔導師はそう答えたが、シグナムは未だに信じられなかった。並の魔導師——いや、達人の魔導師でも、そんなことを出来る奴など、

いないと言ってもいい。

だが、そこまで考えたところで、思い出す。奴の希少技能は確か……。

——時流操作……。

詳しくは知らないが、確か時を操るとかいう希少技能……ならば、この事象も出来るかもしれない。
いや、でも、まさか……。

「本当に貴様なのか……？」

その信じられないことに、シグナムは呆然と呟いていた。

魔導師はシグナムのその雰囲気と言動に、何か焦りの混じった声
で――

「まあ信じなくてもいいがな……」

と言って、その場を驚異的なスピードで去っていった。

その後、ロングアーチから、あの魔導師を見失ったという旨が伝えられた。

第5話（後書き）

今回は主人公の強さを見せときました。

まあ最強なのかな？

多分、最強です。

最強系が嫌いな方は、ごめんなさい。

この話上強くないと、動かしづらくて。

では、次話でまた♪

第6話（前書き）

ギリ間に合いませんでしたね……。

今日は忙しかった（笑）

1日に1回更新はやはり難しいです。

ですが、なるべく早く更新できるように頑張ります♪

では、どうぞ♪

第6話

あの後、機動六課はガジェットを有人機動にし、転送魔法を使った召喚魔導師を見失い、更にあの大剣の魔導師も見失った。

それだけではなく、どうやら、密輸品であった代物が盗まれたらしい。

今は前線メンバーは、見張りに回っている。

その外であった話を、なのはとフェイトは、オークシヨンの会場でひそひそと話していた。

「そっかティアナが……」

「うん」

「それにしても、あの魔導師……」

「うん。シグナムが対峙したみたいだけど、相当な実力だね。ただ、私たちに協力する気みたいなのを言ってたとか」

「畏……かな……？」

「どうだろう？ ガジェットも倒してたみたいだし、今のところは敵じゃないのかも。警戒するに越したことはないけど」

「そうだね……」

2人はそう会話を交わすが、どうも考え事をしてる感じで話している。

あの大剣の魔導師。今回は話を聞いたただだが、シグナムと互角に戦い、更にはガジェットを一瞬にして、全機破壊した実力。

完全に並の魔導師ではない。そして、どうしても考えてしまうのは、あの人のこと。

敵じゃなく、顔は見せられない。顔が見たい、と思う。そうすれば、あの人がわかる。

だが、心の奥底ではわかっている。あの人のはずがない、と。だ

って、あの人は死んだのだから。魔法の大前提だ。人は生き返らない。

あの人が生きてるという希望を持って、何度裏切られ、そして傷ついてきたか。それを体験してきた。

また、繰り返すことはない。希望を持ち過ぎれば、裏切られたとき、今度は立っていられないかもしれない。進めないかもしれない。だから、希望は持たない。持ちたくない。でも……どうしても、考えてしまう。あの人は実は生きてるんじゃないだろうか、と。

生きてて、急に現れて、自分たちを驚かせて、ケラケラ笑い出す。どこか大人びていて、しかし、子供っぽいあの人が。そんなわけないのに。

そういうことを思う度に、私ってバカだな……、と思う。それが、なのはやフェイト、ここにいない、はやてが抱えている辛い過去だった。

なのはとフェイトが、考え事をしていると、オークションの司会が懐かしい名前を呼び、なのはとフェイトはそちらを振り向いた。

そこにいたのは、ユーノだった。ユーノ・スクライア無限書庫司書長だ。なのはやフェイトとは、幼馴染である。

その姿に2人は顔を綻ばせた。

はやてはシグナムに呼ばれて、ひとけ人気のない廊下にいた。

とはいっても、今はオークション中で、人など元々ほとんどいないのだが。

はやては自分呼び出したシグナムに、不思議そうに尋ねた。

「どうした？ 気になることでもあったか？ わざわざ呼び出すな

んて」

シグナムはしばし考えるように俯くと、意を決したように話し出した。

「主はやて、落ち着いて聞いてください。私はあの魔導師が——」
「待って！」

シグナムはビクツと体を震わせる。

それだけ、今のはやては鬼気迫るものがあつた。

それ以上の言葉を話すことを禁ずるような。

言葉を遮られたシグナムは黙り、はやてが口を開く。

「それ以上はあかん。あかんのや。そんなことあるはずないんやから」

はやては震える身体で、震える声でそう言った。

信じればまた裏切られる。今回も今までと同じだ。信じて、世界は自分たちを裏切るのだ。そんなものはもうこりこりだ。

もうそういうのには、耳を塞ぐと決めた。自分はもう振り回されたりしない。

更に、今は大事な時期だ。ここで心を揺るがせるわけにはいけない。

「その話はもう終わりや。とにかく、その魔導師には注意はしておく。ただ、必要以上に警戒することはないかもしれへんな。でも、油断はせんように」

「はい……」

はやてはそれだけ言って、去って行った。

シグナムはそんなはやての様子に、一抹の不安を覚えつつ、自分も警備に戻った。

はやてはシグナムと別れ、廊下の壁に寄り添って、片手を頭に乘せた。

ダメやな私……、と自己嫌悪に陥る。

なんで、どうして、わかってるのに、裏切られるとわかってるのに、何故、何故、自分はこうも希望を持ってしまうのだろう。

あの人は生きている。

シグナムにはああ言ったし、耳を塞ぐとも決めた。それでも、思ってしまう。それだけ、あの人の存在は、私を縛り付けている。

あの人が悪いわけやない。私が希望を持ってしまうのが、いけないや。でも、どうして、死んじゃったんや……。どうして、あなたがいないんや……。

はやての希望は募るばかりで、叶うことはない。それが堪らなく苦しくて、痛くて、寂しい。あなたがいない、という事実が。

はやてはそれを思うと、人知れず涙がこぼれた。

「どうかしたのかい？」

はやては、その声に驚いて、その人の顔を見ようと顔を上げる。そこには久しぶりの顔があった。

「ロツサ……？」

それはヴェロツサ・アコース査察官であった。

はやてとは従兄妹という仲が、一番しつくりくると本人も述べているほど。

ヴェロツサは、はやての顔を上げた姿に驚いた。その目元にはくつきり、涙の跡があったからだ。

はやては、ハッとしそれを腕で乱暴に拭った。

「な、なんやねん！ 急に現れるやなんて！ またお仕事さぼってるんですか？」

はやては焦りながら、誤魔化すように、ヴェロツサに憎まれ口を叩く。しかし、ヴェロツサは誤魔化せなかったようで、見透かしたような目で、はやてを見た。

はやては、うつ、となり、視線を泳がせた。

「一体どうしたんだい？ はやてがそんなに動揺するなんて珍しい」

ヴェロツサの優しく、すべてを受け止めてくれるような声が、はやての耳に届く。

一瞬、胸の内を吐露してしまおうかと考えたが、甘えたらあかん、と考えなおす。

私は今、部隊の隊長なんや、その隊長がそんな弱気なところ見せたらあかん。

そう思ったはやては、今度はしっかりと——強い意志を持って、ヴェロツサを見て、言葉を発する。

「なんでもあらへんよ。気にせんというて」

ヴェロツサはそのはやての決意に満ちた目に、これ以上訊くのは野暮かな、と思い、「わかった」と返事した。

その後は、2人で他愛のない話から、仕事の話と色々話したのだった。

《相棒……？》

俺は目に見えて落ち込んでいた。アクセルが気遣わしげに見てくるのだが、構う余裕がないほどに落ち込んでいた。

ここはミッドチルダにある安宿の一室——俺が借りている所だ。今はベッドに腰掛けて、頭を抱えて俯いていた。

何故かという、あのシグナムとの別れ際の会話が原因だ。

——本当に貴様なのか……？

これはつまりそういうことだろう——つまりは、シグナムが俺の正体に感付いた。

いや、確かに前後の会話で、貴様が本当にガジェットを倒したのか、と聞こえなくもないが、どうにもあの雰囲気は、ガジェットがどうかというよりは、寧ろ、俺自身に言っている言葉だった気がする。

感付かれるとは思わなかった。いや、まあ、確かにフェイト戦のときに時流操作は使ったし、ガジェットを倒すときにデイメンジョンソードを使ったけど、アレは何が起こったかは、ほとんど感知できないような技だし、バれるはずないと思ったんだが。

それなら、言葉だろうか？ 確かに少し親しげ過ぎたかもしれない。だが、その程度で俺と疑うなどありえないだろう。

「一体、なんで感付かれたんだろ？」

そう思ったら、勝手に口から洩れていた。

それを俺の相棒が、考えるような仕種を一瞬して、徐に口を開く。

《……剣筋とか？》

「……は……？」

思わず、間抜けな声が洩れた。いやちょっと待て。

「それは一番あり得ないだろ。確かに俺は子供から、急にこの歳になつてから、剣筋に変化はほとんどないが、あいつらにとっては、もう10年も前の話だぞ。覚えてるはずないだろ」

《わからないよ。それほど、相棒との戦いが身にしみてるのかも》
「うむ……いや、だって、アレだぞ。俺があ頃の——9歳時なら、生まれる前の話だぞ。そんなもん覚えてるはず」

《それは極論過ぎて、意味がわからないよ》

「くっ……すまん。気が動転した。何にしてもどうしよう……」

俺は再び途方に暮れた。

感付かれたなら、恐らく、シグナムは、なのは達——というよりは、確実にはやてには話そうとするだろう。

それはマズイ。俺は、はやて達に思い出させたくなくて、こうして顔を隠しているというのに、話されたら、きつとあいつを苦しませることになってしまう。

やっぱり、関わらない方がいいのだろうか？ いや、でも、俺はあいつらの助けになつてやりたい。いや、ならなきゃいけない。何故かはわからない。でも、そう思う。

なら、この際、自分の正体をさらして、実は俺は生きてました——
！ と言うとか。

——論外だ……。

そんなもん警戒されるだけなのは、わかつてるじゃねえか。
死んだ人間は生き返らない。それは魔法の大前提だ。まあ、その前提を覆した存在がここにいるわけだが。

そんなもんあいつらが信じるはずないし。
やっぱり、傷つける覚悟で、手助けするしかないのか……。
だけど、やっぱりこれ以上、あいつらを傷つけない……。
手伝わないのが一番。それでも俺は……。

「あいつらの助けになつてやりたい……」

《相棒……だったら手伝おうよ》

「アクセル……」

《ボクはどこまでも相棒についていくよ》

その言葉は、アクセルが俺と交わした最期の言葉。俺があの時、
ああすると決意できた言葉で、勇気をくれる言葉だった。

アクセルは本当に俺に尽くしてくれている。俺は多分、アクセル
がいなければ、こうして生き返っても、何もできなかったと痛感し
ている。

前はどこか生意気だけど、それでも俺のためなら、どんなことでも
アシストしてくれた。

妖精化した今でも、こうして俺を信じて、俺に寄り添ってくれる。
ただ、妖精化したせいかな、相棒というより、どこか娘のように感じ
てしまうことがあるが。

まったく……こいつには敵わない……。――

俺はどこまでも信じてくれる相棒の頭を撫でてやる。

相棒は、いつも通り撫でてやると、ネコのように気持ちよさそう
に目を細めた。

ホント可愛い奴……。

そうしていると、落ち着いてくる。

「ありがとよ相棒」

《うん》

俺の少し無理をした微笑に、アクセルは何も言わずに頷いた。
そして、アクセルは話題を変えるように、明るい口調で訊いてきた。

《そういえば相棒、ボク実は相棒の希少技能の力って、よく知らないんだけど、説明してよ》

「そうだったのか？ まあいいぞ」

それは驚いた。でも、確かに詳しく説明したことはなかったな。
まあ、俺も完璧に理解しているわけではないんだが。

「とりあえず、俺の希少技能の名前は、“時流操作”。これは知ってるな？」

《うん。確か時間を止めたりする能力だよな》

「いや、厳密には違う。時流操作は、時が動く際の粒子——時粒子を操るんだ」

《でも、それを操って時間を止めるんじゃないの？》

「違うな。これを操ったところで、時間は止まらない。俺が出来るのは、時間を“縮める”ことと“弛める”ことだけだ」

《縮める？ 弛める？》

「ああ、正確に言えば、時間の感覚を縮めたり、弛めたりするんだ。時間の感覚を縮めれば、俺の指定した空間は、そこだけ時間の感覚が早くなる。弛めれば、時間の感覚が遅くなるんだ」

《ふえー、なんだか難しいね》

アクセルはどこか俺を尊敬するような眼差しで、見つめてきた。
こんな目を向けられたのは、初めてだ。あれ？ 初めて？ なんか悲しくなってきた……。

「ああ、俺もこの力を理解するのは、大分苦労した。今はこうして

使いこなすことが出来てるがな」

《うん。そういえば相棒、確か前はディメンジョンソードみたいな大技使ったら、頭痛い、気持ち悪いって呻いてたのに、今回は何にもないね》

「まあ、多少はあるがな。子供の時よりはない。多分、知覚の変化に大人の身体が、ある程度耐えられるようになったんだろうよ」

《知覚の変化って？》

「ああ、それは、えっと……何て言えばいいかな……なんつうか、俺の感覚だとモノクロの世界に入るんだ。このモノクロの世界っていうのは、俺の感覚が追いつかなくなったことで起こった現象だ。この間の俺は、ほとんど思考が追いついていない。ただ、敵が前にいるから、斬るって感じだな。で、まあ、最終的に車酔いみたいな感じになる」

《そっか……それって大丈夫なんだよね？ 相棒、いつも辛そうにするから心配だよ》

こいつそんなこと気にしてたのか。俺は俯くアクセルを指で、頭を撫でてやる。気づいたんだが、どうにもアクセルは、頭を撫でられると、気持ち良さそうに目を細めるのだ。まるでネコのような。ネコといえば……。

「アクセル……俺、お前がまたネコになってくれたら、元気出るかも」

《ふえ！？ で、でもあれはもう！》

「ここにあるぞ？」

俺はポケットから、例のネコミミ、ネコシツポを取り出す。アクセルはそうだった……、という顔をして、しばし思考する。やるべきか否かと。

そうして、アクセルは決意できたのか、顔を上げる。

《相棒が……元気になるなら……》

アクセルは目をきつく閉じ、恥ずかしそうに顔を赤くしながら、絞り出すように言った。

はぁ……こいつホントに可愛いな……もう俺の娘みたいに育てたろか。娘なんていねえけど。てか、そんなこと言っというて、娘だと思ってる奴に、ネコミミ、ネコシッポ付けさそうとしてる俺って一体……。

アクセルは俺の言い付け通り、ネコミミ、ネコシッポを付け始めた。こういう俺に従順なところは、昔と変わらないな……。

《ど、どう？》

アクセルはもじもじしながら、確認するようにそう訊いてきた。スッゲー可愛い（キリッ）。

とか、言ってやりたいが、ダメだ。どうにもイジメなくなるなこいつは……。

「相棒、それじゃあダメだ」

《そ、そうなの？》

「ああ、お前はネコなんだ。ネコならネコらしく、語尾に、“にゃん”とつける」

俺がそう言うと、アクセルは沸騰するんじゃないかというほど顔を真っ赤にし、頭から湯気が出ていた。マジで沸騰してないよな？アクセルはそれでも文句は言わず、もごもごと口を動かす。俺が「それじゃあ聞こえないだろ？」と威圧をかけると、あう、とし再び挑戦しようと口を開く。

《ぼ、ボクの格好はどうか……に、にゃん》
「ふむ、まだ恥ずかしさが残るが、及第点だな」
《そ、そう……にゃん……？》

意識を乱さなかった俺を褒めてほしい。ちくしょう、可愛すぎる。
しかし、俺ってこんなにSっぽかったっけ？ でも、よく考えると、なのは達のこと結構からかったか。

ふむ、新しい発見だな。まあなんにしても、もう限界だ。
とりあえず、抱きしめて頬を摺り寄せる。

「可愛いぞアクセル」

《ふえ！？ あ、相棒！ やめてよ！ くすぐりたいよ！》
「にゃん、は？」

《あつ……に、にゃん……》

「可愛いな、アクセル」

「あ、相棒」

黄土色のような光を放つ部屋の真ん中に、黄色い瞳を持つ——どこか狂気めいた男が立っていた。その前には、モニターが開いており、そこには仮面を被った男が映っている。更に、その左下辺りに小さいモニターがあり、1人の女性が映し出されていた。
どうやら、通信のようだ。

モニターの女性が、狂気めいた男に話しかける。

「何か気になることでもあるのですか、ドクター？」

ドクターと呼ばれた男は、その言葉にククツ、と笑うと、愉しもうに言う。

「彼は面白いよ。なにより強い」

「強い……ですか……ですが、本当に彼がアレをやったのですか？」

「彼以外の誰かがやったと？」

「ええ、モニターにも何かの影くらいしか映っていませんし、彼がやったかは、判断が付きかねますが」

「いや、きつと彼だよ。彼はもしかしたら、ロストナンバーかもしれないね」

「ロスト……ナンバー……？」

モニターの女性は、ドクターのその言葉に、訝しげな表情を作る。ドクターはまたも愉しそうな表情を作ると、語りだす。

「僕のスポンサーがね、言ってたんだよ。『私はロストナンバーを探さなくちゃいけない』ってね。僕もよくは知らないけど、すごい力を持ったもの達っていろいろはわかるよ。なんたって、あの男は僕以上に狂気に走っているからね」

「ドクター以上ですか……！」

モニターの女性は驚いた様子。なにげに失礼である。だが、ドクターが気にした風もなく、押し殺したように笑う。それにモニターの女性が、慌てて言葉を発する。

「す、すいません！」

「いや、いいんだよ。いやあ、彼はホントに興味深いよ。ククク、愉しくなってきたね」

部屋にはドクターの笑いが、響き渡るのだった。

第6話（後書き）

どうっすかねえ？

とにかく、この感じで続けられたらいいんですが……。

あ、もし、なにかあったり、助言などがありましたら、遠慮なく感想やメッセージでどうぞ♪

では、また♪

第7話（前書き）

段々と更新が遅れてきましたね。

なるべく、1週間以内には、1話更新できればいいんですが。

では、どうぞ。

第7話

まあ……なんだ。やっぱり悔しいんだろうな……。

今は夜。俺は遠くから、双眼鏡で機動六課を見ていた。

その双眼鏡の先には、あの誤射をしたオレンジ髪少女が映っている。その子は未だに1人で、練習をしていた。

実はあのホテル・アグスタが終わった後も、少し様子を見ていたのだが、やはり相当落ち込んでいるようだった。なのはにも少し怒られていたようだ。

そういえば、そのときユーノがいたな。あいつ眼鏡なんかかけてしかも、大分背が高くなってやがった。野郎……。

まあ、それはさておき、今はあのオレンジ髪の奴だな。

無理してんなあ……あのバカ。あゝあゝ、息切らして、あゝ、倒れそうじゃなか。あいつあんなこととして、また本番とちったらどうすんだよ。全くわかってねえなあ。まあ、強くなりたいっていうのは、わからなくもないんだが。何であそこまで、根詰めるかねえ。

直接本人に訊きに言っちゃるか……。

《相棒、何かまたよからぬことを考えてない?》

「流石、相棒。鋭いな」

《もう……》

アクセルは呆れるが、それでも文句は言わなかった。なんだかんだ言いながらも、ついてくるこいつは本当にいい娘だ。

さって、本当はあのデッケ地上本部とかいうのに忍び込むなり、なんなりして情報が欲しかったわけだが、まずはあの子のことを何とかするかなあ。

このままほつとくと、どうなるかわからん。なんと言っても、なのはのお仕置きを受けたら、トラウマだけじゃすまされないからな。

しかも、今はあの時より、きつと更に強力になつてゐるはずだ。やべ、身体が震えてきた……。

「相棒、どうやってあの機動六課に忍び込めるかなあ」

《忍び込む気なの、相棒？》

「おう」

《……》

相棒は声も出ない程、本気で呆れてしまった。

いや、まあ、無茶を言つてゐるのはわかつてるが、ほつとくわけにもいかんだろうよ。このままじゃ、あいつマジで潰れるぞ。まあ、俺が心配することじゃないかもしれないが、それでも気になるんだよな。

なんか……昔のなのは見てゐてえなんだよな。なのはなんて、スゲエ無茶してたんだぜ。あのバカ、砲撃とかバインドとか数日の間に、超ぶつ放してたけど、あれ、陰でずっと練習してやがったんだ。流石に怒つたのを覚えてゐる。ただ、逆に怒られたのも覚えてゐる。俺も無理してたんだって、そんなことないのにー（棒読み）

まあ、それはいいんだが、どうやって入るうかな。堂々に入ったら、センサーに引つかかるかなあ。いや、案外いけるんじゃないか。行つてみようかなあ……。

「行つてみるか、アクセル？」

《……ボクの予想なんだけど、計画無しだよね？》

「おっす」

《……》

そんなに呆れないであげて相棒。って、自分で言つてちゃ世話ないな。まあ、それでも、アクセルはついてきてくれるんだが、ホントいい娘。さて、今から乗り込もうかな……。

ということで今、俺は機動六課の前——よりは少し遠くの方にいる。いや、だって、あんまり近いとセンサーが反応するかもだし。ふむ、とりあえず行ってみるか。

「時流エネルギー解放。アクセル、俺を走らせろ」
《うん。ブースト!》

「あれ？」

薄い紫の髪をした女性——ルキノ・リリエが、モニターを訝しむように見る。今何か……、と思ったところで——

「どうかした？」

茶色い髪の女性——アルト・クラエツタが、ルキノのその様子に、どうかしたか訊く。

ルキノは「いや……」と言葉を濁して返すのを、アルトは「気になるなら、言ってみなよ」と言っ、ルキノに問い詰める。

「いや、うん。多分気のせいだよ。ごめんねアルト」
「そう？ まあ、それならいいんだけど」

アルトとルキノは、通常任務に戻った。

「ふー、どうだ？ 気づかれてないか？」

《多分、警報も鳴ってないし》

俺はモノクロの世界から脱すると、茂みの中にいた。

自分で移動したのだが、なにぶん、知覚が追いつかないから、世界に色がない。そのため、俺は勘で、目的地に行かなくてはいいけない。大分慣れたが、変な感じだ。

まあ、何にしても、バレてないみたいでよかった。

さて、あのバカの所に行ってみるか……。

そんなわけで、あいつの練習してる近くの樹の上に登った俺は、あのバカの様子を見る。

あのバカは、点滅する魔力弾のようなものを浮かばせると、光ったものに自身の拳銃デバイスを向けるといふ作業を繰り返す。

こいつはいつまでやる気なんだか……そろそろ止めてやろうか。

オレンジ髪の少女——ティアナ・ランスターは、練習に勤しんでいた。

ティアナが、ここまで力に固執するのには理由がある。

それは兄——ティーダ・ランスターのことだ。

ティーダは首都航空隊に所属しており、一等空尉だった。つまり

は、なかなかのエリートである。

そのティードが、一度任務に失敗し、犯人に手傷は負わせたものの逃がしてしまった。その犯人は、その後すぐ捕まったのだが、心ない上司が、酷い一言を浴びせた。具体的には、死んでも捉えるべきだった、そんな内容である。

それが原因かはわからないが、少なくとも要因の1つぐらいにはなったのだろう。彼はとある任務で無茶をして、逮捕はしたが、その命を落とした。

だが、それだけなら、まだよかった。兄は名誉の死を遂げた、こうとも思えた。

しかし、あの心ない上司は、全くの無駄だった、と言った。

兄の最期の仕事をそう言ったのだ。

そんなことは、幼いティアナには耐えられなかった。

大好きだった兄をそんな風に侮辱されて、黙っていられなかったのだ。

だから、兄の無念を晴らすため、兄が目指した——執務官という夢を妹である私が、叶えようと思った。そうすれば、きっと兄も報われると——喜んでくれると思って……。

私は強くならなきゃいけない。強くなくちゃいけない。凡人だろ
うと、なんだろうと、兄——ティード・ランスターの無念を晴らす
ために……！

その時、ティアナの上から声がした。

「そんなに根詰めると倒れるぜ」

その声はどこかで聞いたことのある声だった。あのフードの魔導師……！ ティアナはそれに瞬時に気づき、対応しようと、テバイス
を構えた。

「アンタ！」

「そんな大声出すなよ」
「むぐっ！」

ティアナが大声を出した瞬間、ティアナの口が防がれた。ティアナはそれに敵だと判断すると、ロングアーチに連絡しようとするが

「余計なことはしない方がいいぜ。やっちゃうよ……？」

ふっ、と耳に息を吹きかけられる。それにティアナはぞくぞくっとなり、気持ち悪い！ という感想を抱いた。

だが、それに意識を乱して、連絡どころではなかった。

ティアナはいち早くこの男から、離れたいと思い、もぞもぞと動くが、男は相当力が強いらしく、全然拘束が外れない。

「はっはっは、無駄だよリス君。君では俺の拘束は外せないさ」

「」

「むぐぐむぐむぐ（ふざけないでよ）！ むぐ（この）！」

ティアナはその男のふざけた態度に、憤りを示し、力づくで拘束を外そうとする。

どうにも、怒り心頭なティアナは、連絡するということを忘れているらしい。元々、多少イラついていたのだ。その上、こんなわけもわからないような男に、いきなり“リス君”と言われて、冷静に対処ができなかった。

「まあ、冗談はさておき、少し落ち着けよ。お前がこの状況ですることは何だ？」

そつだ念話！ と男の言葉で思い出し、ロングアーチに念話をし

ようとしたが、繋がらなかった。なんで……？　と思うと、後ろから押し殺したような笑いがした。

「むぐぐ（アンタ）！」

「すまんすまん、実はなかなか高性能の結界を張らせてもらった。通信も繋がらないし、探知されることもない」

騙された……、と思い、顔を赤らめて悔しがるティアナ。なんなのよこいつ！　何がしたいのよ！　あるときもよくわからないこと言って！

「それでお前さあ、こんなことしたって意味ないぜ。訓練が何のためにあるか知ってんのか？」

男はティアナの口の拘束を外す。ティアナはイラついて、あまり息をしていなかったのか、プハッ、と一気に吐き出した。

アンタに……！

「アンタになにが分かるのよ！！　アンタみたいに強い奴には、わからない！！　凡人の苦しみなんで！！　普通に訓練してるだけじゃ、強くなてなれないのよ！！」

そして、心の丈を吐き出した。あんな——ガジェットを一瞬で倒せる——すごいことが出来るのだ。私のような凡人の苦しみなんでわかるわけない。才能がない人間は、人一倍訓練しないと強くなれないんだ。才能のある人間に、そんなことわからない！

この子リスが……！ 俺はこの子リスの言葉に、少し憤りを覚えた。それは、以前自分が思っていたことだからだ。魔法などなく、ただ剣を振っていた俺が、ずっと思っていたことだ。

今してみれば、あの頃の自分は本当にウザい奴で、ム力つく奴だった。だから、この子リスに憤りを覚えた——いや、自分自身にか。だが、この子リスが間違ふ必要はない。周りには、あいつらがいるのだから。

「強く……ね…… 1つだけ教えといてやる。訓練つてのは、強くなるためにするもんじゃねえ」

「……どういふ——」

子リスには、俺の言葉がわからなかったようだ。まあ、仕方ないがな。いずれわかるだろうさ。

しかし……少し油断したか。林の少し奥の方から、殺気のようなものをピリピリ感じる。この子リスも、その雰囲気があったのか、押し黙ってしまった。

その正体がわかった。林の奥の方から、ぬうつと人影が現れた。暗がりによく見えないが、シンプルそうな杖型デバイスを構えていた。

「ティアナを離しな。じゃねえと撃つぜ」

その声は男のものだった。どうやら、子リスの訓練を見に来たようだ。そして、この子リスがが捕まっている姿を見て、すぐさまデバイスを構えたのだろう。

男がいる方向からは、怒気を孕んだ気配が流れてくる。

相当、頭にきているらしい。こいつの恋人か何かだろうか？

まあ、なんにしても、あいつ……。

「……その震える手で、俺を当てられるのか？」
「くっ……！」

手が震えてやがる。あれじゃあ当たらねえな。何かのトラウマか？ 魔法を撃つのに躊躇いでもあるのだろうか？ まあ、都合はいい……っと思つたが、やられたぜ……衝動的に出てきたわけじゃねえのか。俺の結界も小さい結界だったしな。ただの時間稼ぎだったわけか。

俺の周りに、大量の気配を感じる。明らかに敵意だ。その中の1人が、口を開く。

「まさか堂々とウチに乗り込んでくるやなんてな。そやけど、ここが年貢の納め時やで」

はやてか。他にも、周りからそろそろ出てきたか……。なのはにフェイト、シグナム、ヴィータ、それに前線メンバーか……。

俺は今、子リスを人質にとって、機動六課の面々に囲まれてるフールドを目深に被った犯罪者つてところか……。

あれ？ 俺スゲー悪い奴じゃね？ しまった……まさかこんなことになるとは……。やっぱり考えなしっていうのは、いけないかな……。

まあ、それを気づかせるわけにもいかんか……。

「俺が何の準備もなく、忍び込んだと思ってるのか？」

とりあえず、そういう法螺^ほを吹いてみた。

六課の面々は、俺の言葉を信じたのか、それとも、元々そういう可能性が高いと踏んでいたのかは知らないが、驚いた様子もなく、俺の隙を見つけるように取り囲んでいる。

流石に訓練されてるし、修羅場はくぐってきてないか。どうつすかなあ、ディメンジョン系は、発動に時間がかかるんだよな。その間に撃たれそうだな。

俺がそう考えてると、はやてが話しかけてきた。

「なんでここに乗り込んで来たんや？ シグナムが言うには、私の味方やちゅう話やけど……？」

「そうだな……味方だ。今回はこの子リス君に用があつてな」

「誰が子リスよ！」

「お前だお前」

まったく、動物愛護の精神を知らんのか、この子リスは……。そんなこと言ったら、俺の態度に呆氣にとられたのか、皆ぽかんとしていた。

なんだ全員動物愛護の精神を知らんのか、なのは達にもちゃんとつけてやったるうに。

なゝんて冗談言ってる場合じゃないか……。どないしよか……。

「まあ、こいつが子リスなのは置いといて」
「むぐぐ！」

とりあえず、子リスが何か言いそうだったので、口を塞いどいた。

「俺を逃がしてくれないか？ このままじゃあ危険だと思うがな」

俺が。

はやて達は、この子リスが危険になると思ったのか、それとも、何か他にあると思ったのか、更に警戒を強めたようだ。

やべえ、逃げ切れるかなあ。流石に自信ねえなあ。

まあ、でもやるしかねえんだが……。

俺はコートの中のアクセルをデバイス化させ、地面に黄金に輝く剣を刺す。

そして、子リスを背中を押して手放す。

「えっ？」

「俺の言葉をよく考えるんだな」

そう言い残し、俺は速攻駆ける。

俺のスピードは、高速移動魔法により、相当速い。そうでなくとも、俺はスピードを軸に鍛えているため、普通に速いのだが。

しかし、この中には、俺に勝るとも劣らない速さの奴がいるんだよな……！

「フェイト……！」

「行かせない……！」

俺の速さに追い付いたフェイトは、その鎌を振り落としてくる。

俺はそれを剣で受ける。

瞬間的に弾き合つと、再び駆けて、またぶつけ合つ。

俺やフェイトみたいなスピード型には、止まるというのは、頭がない。常に動き、相手を攪乱し、そして、油断したところを打つ。それが常套だ。

まあ、それは1対1のときだけだが……。

フェイトは俺の動きを止めるように、デバイスをぶつけてきた。わかってやがるよな、こいつは……！

「ティアナ！」

「はい！」

そこで、なのはと子リスが、魔力弾を生成し出した。

ちっ……！

「クロスファイアシュート！」

桃色の魔力弾の群れと、オレンジ色の魔力弾の群れが、俺に襲いかかってくる。

入れ替わるように、フェイトは俺から離れる。

流石に避けきれねえか……！

俺はバリアを全面に展開し、その攻撃を耐える。

へっ……なんだよ、なのは当たり前だが、あの子リスも充分やるじゃねえか。

魔力弾の雨が止んだ瞬間、駆けてくる影が見える。

「うおおおおお！！」

青髪とヴィータか……！

雄叫びを上げながら、その拳と槌を俺のバリアにぶつけてくる。

俺のバリアは、その2つの重撃に耐えきれず、パリンとガラスの割れるような音とともに、破片を撒き散らし消えた。

当然、バリアが壊れたことにより、俺の身体には、拳と槌が直に襲いかかり、盛大に吹き飛ばすことになった。

吹き飛ばれた俺は、そこら辺の樹を薙ぎ倒しながら、飛んでいき、勢いが死んできたところで、樹に激突して止まった。

「ブラストレイ！」

そこに撃ち込まれるのは、デカイ竜から放たれる炎弾。それは俺を火で包み込んだ。

あっちいなちくしょう！

「はあああああ！」

更に魔力の高鳴りを感じ、前を向くと、火の中を赤髪の少年が、もうスピードで突っ込んでくるのが見えた。

調子に……！

俺は突き出された槍の先端を、手のひらに極小に展開したシールドで、ガードする。

「乗るなあ！」

「うわあ！？」

そして、そのまま槍を掴み投げ飛ばす。

赤髪の少年は投げ飛ばされ、その場から強制的に立ち退かれる。そこに更に魔力の高鳴りを感じ。

これはマズイ……！

「紫電……！」

シグナム……！ シグナムの持つ剣には炎が絡み付いている。

流石に受けきれねえ！ 時流エネルギー展開！

世界が白と黒の色だけで構成される。シグナムの動きは、スローモーションのようになり、俺はその中で動く。

即席で展開したため、あまり効果は長くない。俺は半身ずらし、モノクロの世界を脱する。

「一閃！！」

その瞬間、俺のすぐ横を炎を纏った剣が通り過ぎる。

俺は術技硬直が起こったシグナムを蹴り飛ばした。

そこで、今までで一番の魔力の高鳴りを感じ。

「闇に、染まれ」

ディアボリック・エミッションか！

はやてを中心に、闇が広がっていき、俺を呑み込んでいった。

俺は全力でシールドを展開し、その衝撃に耐える。

段々とその力が弱まっていく。

この間に……！

「やった……か？」

ディアボリック・エミッションが止んでいき、はやてが訝しむように、その止んでいく闇の一点を見る。

他のメンバーも警戒を緩めていない。

だが、あめえ……！

「油断は禁物だぜ……？」

『『『』——ッ！？』『』『』』

——ディメンジョンソード・Eモード

俺の時流エネルギーとアクセルとの高速移動魔法の併用による広域殲滅型の剣技に六課の前線メンバーが、全員倒れ伏した。

だが、大した怪我は負わせてないはず。まあ、動けないだろうが。

結構ギリギリだったが、なんとかやってところか。

さて、ここから去——ッ！

「くっ……！」

「いい腕だ。危なかったぜ」

俺は後頭部に向かってきた魔力弾を、ギリギリ首を動かして避けた。

そついや、まだ最初に俺につつかかってきた奴がいたんだっただが、避けられたのを知ると悔しそうに舌打ちし、何もしくなった。

まあ、そりゃあ、勝てないってわかってるだろうしな。仕方ないことだ。

他の奴が動けりゃいいが、しばらく動けねえだろうしな。

動けるまで、この男は足止め出来ないだろうと踏んだか……。

「惜しかったな機動六課。次はまた何かの事件の時にでも会おう」

そう言い残し、俺はその場を移動した。

機動六課の面々は、全員悔しそうな顔をしていた。

第7話（後書き）

ちよい無理矢理感がありましたかね？

そういえば、1万アクセスを突破しました。

皆様のおかげです。本当にありがとうございます♪
これからよろしくです♪

心配なのは、尻下がりにならないか……ということ……。
どうにも、私は後半に下がっていくみたいですからね……そうなら
ないように、頑張らなければ。

では♪

第8話（前書き）

少し遅れました。

けど、まあ、1週間以内には、投稿できたんで許してくださいな（笑）

では、どうぞ、

第8話

「……ッ！」

ティアナは、何度目かわからない憤りを枕にぶつけていた。
今はあの襲撃事件が終わり、全員解散になった。

しかし、なのは達隊長陣は、何かの話し合いをするらしい。
恐らくはあの魔導師のことなんだろうが。

その魔導師を思い出し、ティアナはまたも枕を叩く。

ム力つく！ ム力つく！ ムゝ力ゝつくゝゝ！！

ティアナはム力ついてしょうがないようだった。

アイツなんなのよ！ なんにも知らないくせに！ 勝手なことば

かり言つて！ それに……！

ティアナは怒りで、プルプル震え出す。

誰が子リスよ！！

ティアナの今世紀最大の枕殴りが発動。ぼすつという音が、部屋に響いた。

同室のスバルは、それを聞きながら、荒れてるなあ、と冷や汗を垂らしながら呟いた。

それにしても、と思う。ティアに一体何の用だったんだろうか？
スバルはそれが疑問だった。

あのとき確かに、あの魔導師はティアナに何かの用があると言っていた。そのことをティアナに訊いたスバルだったが、知らないわよ！ とちよつとヒスリックな声で返されたのだった。

しかし、考えてもわからない。よくはわからないが、敵ではないと本人は言っていて、でも、この機動六課に乗り込んできて、しかし、用があつたのはティアナだけで、しかも、倒そうと思えば、もっと酷い怪我を負わせて倒すことは出来ただろうに、それをしなくて。やっぱり、本人が言つてるとおり味方なんだろうか？ と思わ

なくもないが、相手は顔を見せない謎の男で……。あう、なんだ
かよくわからなくなってきた。

グルグル考え始めたスバルは、自分が何を考えているのか、よく
わからなくなってきた。

そこで、再び枕を叩く音が鳴り響く。スバルは見兼ねて、ティ
アナに声をかけるべく、ベッドの縁に手をやり、下を覗く。

そこには、ティアナがベッドに女の子座りをしながら、ぼすぼ
すと枕を殴る姿があった。

スバルはため息を吐き、ティアナに向かって口を開く。

「ティア、ム力つくのはわかるけど、そろそろ寝れば？」

「うっさい！ あも、なんなのよ！ なんなのよ、あの男は
！」

スバルが注意を促すも、怒り心頭のティアナには、届かないよう
だ。

誰が子リスなのよ！ 何が訓練は強くなるためにするもんじゃ
ない、なのよ！ ていうか、子リスってなによ！ リスも知ら
んのか？ そのぐらい知つとるわ！！

ティアナはあの魔導師の返しを想像し、更に鬱憤を溜め、腹の中
にある鬱憤を晴らそうと、更に枕を殴る。

ティアナがここまで、怒り心頭なのは、あの男のせいだけではな
い。自分自身にもある。

あんな簡単に捕まり、それにより、完全に足を引つ張った。本当
なら、最初にあの魔導師を発見した時点で、六課の前線メンバー全
員で、仕掛けていれば倒せたはずなのだ。

それなのに……！

——私は何してるのよ……。

ティアナの枕を殴る音が弱まった。

段々、自分が情けなく思えてきたのだ。

あんな気持ち悪い男に、あそこまで簡単にしてやられたのだ。

それでなくとも、その前に失態を見せているし、ここでも失態を見せて、活躍をした試しがない。

こんなことで、兄——ティード・ランスターの無念を晴らすことなどできるのだろうか？

——出来るわけない……。

強くならなきゃ……、ティアナはそう決意する。

もっと、もっと、訓練して、強くなって、必ずランスターの弾丸は、敵を撃ち抜けるんだって、証明してみせる。

ティアナはそう考えると、布団に包まる。

「スバル、私、明日4時起きだから、目覚ましうるさかったら、ごめんね」

「え……う、うん……」

スバルはティアナの急な態度の変化に、戸惑いながらも返事した。

ここは部隊長室。

ソファーには、なのは、フェイト、その向かいに、シグナム、ヴィータ、そして、部隊長の席に、はやてが座っている。

一様に深刻な雰囲気漂う。そんな中、俯いているはやてが口を開いた。

「してやられたな……」

はやては、あそこまで追いつめて、捕えられなかったのを悔やんでいた。

それ以前に、あの魔導師の潜入を許し、あまつさえ、ティアナを危険な目に遭わせてしまったことで、酷く落ち込んでいた。まあ、そんなのはやてというより、今夜の見張りをしていた者のせい（それだけでなく、相手は規格外の使い手なのだから、誰のせいでもない）なのだが、はやては良くも悪くも、責任感が強い。部隊の長として、何も出来ていないんじゃないか……、と思っているのだ。

そんなはやての心情を知ってか知らずか、なのはが言葉を発する。

「あんまり自分のせいだなんて思わないでね、はやてちゃん」

なのははプライベートモードで話す。周りには、正直、10年来の友人達しかいないわけだから、そうしよう、と判断したようだ。なのはの発言に、ヴィータも身を乗り出す。

「そうだよ、はやて！ はやてが気にすることじゃない」

他の皆も意見は同じようで、一様に頷いている。

はやては、その事に心の中で感謝を送り、顔を上げた。

「そうやな、今はそのことを悔やんでいるより、これからのことを考えんな」

今度はしっかりした声音で、そう発言した。

そのはやての発言で、座り直したヴィータが、ある疑問を口にする。

「アイツって、なんのためにここに乗り込んできたんだ？ 結局、
なにもされてねえみてえだし」

「えつとやなあ、ティアナに訊いてみたんやけど、なんやティアナ
に助言に来たみたいやで」

「助言？」

「訓練は強くなるためにするもんじゃない、やって」

はやてがそう言った瞬間、なのはが急に机を叩き、立ち上がった。
それに皆が、驚愕の表情を浮かべる。それは、音に驚いただけじ
やない。なのはの顔が真っ青だったからだ。

「ど、どうしたの、なのは？」

隣に座るフェイトが、恐る恐るといった感じに話しかける。
しかし、なのはは聞こえていないのか、全く返事をしない。

その言葉って……、なのはが思い出すのは、昔——10年前のこ
とだ。

言われたことがある。私が本気でユーノ君を、手伝おうと決めて、
あの人と訓練していた時だ。

あの人は、ある日の訓練の合間の休憩中に訊いてきた。

——なのはやユーノは、訓練って何のためにすると思う？

私やユーノ君は、よくわからず、強くなるため、といった答えを
言った。

でも、あの人は、優しく微笑を浮かべ、私の頭を撫でると、前を
向いて語りだす。

——それも間違いじゃない。でもな、違うんだ。訓練っていうの

は強くなるためにするもんじゃない。本来は……。

と、そこまで思ったところで――

「なのは！」

自分が呼ばれていることに、なのはやっと気づいた。

どうやら、自分は何秒かぼーっとしていたようだ。それほど、衝撃の言葉だった。

なのははフェイトの呼び掛けに気づくと、無言で座り直す。

「ごめんね」

なのはは、そう言うのと俯いてしまった。

フェイトが再び声をかけようとした瞬間、シグナムがそれを遮り発言した。

「主はやて、もう目を逸らしてはいられないのでは……？」

シグナムは今回の件で、更に既視感を強めていた。あの10年前の戦闘の感覚を。

だが、シグナムとてあのとき死んだ男だと思っているわけではない。何を言おうと、あの男は、あのとき、確実に死んだのだ。自分達の目の前で。

しかし、だからと言って、あそこまで類似点があるならば、確実にあの男が、何かしらの形で、関係しているはず。そう言っているのだ。

シグナムの言葉は、ヴィータ、ライン以外の3人の雰囲気を一変させたようだ。

重く、発言するのを憚るような、そんな雰囲気漂う。

そんな中、よくわかっていないヴィータが、言葉を発する。

「ど、どうしたんだよ一体」

そう訊くヴィータだが、答えてくれるものはいなかった。

ヴィータは、10年前に死んだあの男とは、大した接点がない。戦ったことは、ほばない。それに、あの頃は、はやてを助けることで、頭が一杯で、他を気にする余裕はなかった。

だから、今回のことにも、ピンときていない。ちなみに、リインはもちろん生まれる前だから、知る由もないため、リインも頭に疑問符を浮かべている。

はやては、シグナムの言葉を頭の中で、反芻すると、辛そうに喋りだす。

「でも、そんなことありえへんやんか……あの人は、もう死んでこの世には、何も残さんで死んだんやで？　ありえるわけ……ないやんか……」

はやては消え入りそうな声で話す。

あの人は、肉片一つ残さずこの世を去った。別れの言葉もない。何も残さずに消えた。

そんなあの人が、どんな形であろうと、この世に生まれるはずなんてないはずだ。ないはずなのだが。

何で、こんなにあの人は生きているのだと、信じてしまうのだろうか……ありえないのに、ありえるはずなのに。

どうして……！

「どうして、あの人が生きてるって思ってしまうんやろ……？」

唐突に出たはやての言葉は、なのはとフェイトにもわかってしま

った。

2人も思ってきたことだからだ。ありえないとわかりながらも、そう考えてしまい、あの人の手がかりのようなものがあれば、すぐにあの人がどうか調べたりと。そんな無駄なことを何年もしてきた。死人は蘇らない、そう知りながら、どうしても求めてしまうあの人。

その人に酷似した人が今、目の前に現れた。

どうして意識しないことが出来ようか。ここまで焦がれてきたのに、気づかないわけがない。あの魔導師は、確実にあの人とそっくりだ。動きも、言葉も、口調も、技も、全部が全部、そっくりなのだ。

それでも、あの人は死んだという事実が、なのはやフェイト、はやてを蝕んでいた。

信じてはいけない、と心の奥底で、呟く存在がいるのだ。ある意味、自分が傷つかないための本能的な防衛策なのだろう。

そんなはやて達の心情を知らずに、ヴィータが、はやての言葉で、まさか……！ と声を荒げる。

「あいつが生きてるって言うのかよ……！」

「そこまでは言っていない。少なくとも、奴に何かしらの関係があると見ているだけだ」

ヴィータの慌てた声に、シグナムは冷静に返す。

それでも、ヴィータは信じられないといった表情をする。

シグナムもそれは同じ意見のようで、冷静に見えても、動揺を隠しきれていない。

「で、でもよお、あいつはあるとき、何も残らずに死んだじゃねえか。それなのに、あいつを今更どうこう出来るわけ——」

「ヴィータ——！」

「——ッ!」

ヴィータの言葉は途中で、はやてに遮られた。ヴィータは驚き、言葉を止める。

そのはやての顔は、辛そうに歪んでいた。胸をギュッと押さえて、はやては話す。

「お願い……やめて……あの人の今を汚さんという……」

あの人は、自分のせいで死んでしまった。

それなのに、死んでも、あの人は苦しまなければいけないのか。そんなの許されない。

自分のせいで死んだあの人が、どこかで何かの研究にでも使われてると思ったら、胸の奥がズキッと痛む。

でも、そう思うのに、生きていて欲しいと思ってしまう。

せめて、安らかに眠っていて欲しい、と望みながら、それでも生きていて欲しいのだ。

一体、どっちが本当の私なのだろうか？ わからない。わからないけど、とにかく今は、あの人がいかわしい研究に使われているとは、思いたくなかった。

「ごめん、はやて……」

ヴィータもはやての苦悩は、常々見てきた。だから、自分が言ったことが、はやてを苦しめる言葉だったと分かり、謝った。

「……こつちこそ怒鳴ってごめんな。どうかしてたわ……」

はやても思わず感情的に怒鳴ってしまい、それを謝る。場を沈黙が支配する。それを破ったのは、シグナムだった。

「止めましょう。もう遅い。皆、あの魔導師は、確実にアイツに係している。そのことを念頭に置いておくことにしよう」

その言葉で、この場は解散になった。

《怒怒怒怒怒怒ッ！！》

「ごめんなさい！　ごめんなさい！」

相棒がすごく怒ってて怖いです……。だけど、怒ってる顔もかわい

《相棒！！》

「ごめんなさい！！」

流石、相棒。俺の考えてることがいとも簡単にわかってしまうようだ。

今は安宿の部屋の中なのだが、あれから帰ってきた後、アクセルはあまりの俺の考えなさ加減に憤りを示した。

いや、俺も確かに考えなが過ぎたな……。とか思ったけど、そんなに怒ることないじゃないか……。ぶ、相棒の怒りんぼ。

《相棒、ちゃんと聞いているの！！》

「き、聞いているっばよ……」

どこかのラーメンの具の名前の主人公の口調を真似してみた。

《怒怒ッ！》

「すまんアクセル！ ふざけ過ぎた！」

ま、まったく、うちの娘の説教は、長くて堪えるぜ。

それにしても、あの子リスはわかっただろうか？ ……わかってなさそうだな……あの子リス、やけにプライド高そうだったしなあ。明日には、今日以上に張り切って、いやがったりして。

……ありえそうだな。ふゝむ、やはり考えなし過ぎたか……。年齢は上がっても、思い立ったら即行動ってスタイルは変わらねえなあ、なんて他人事のように思っていると、アクセルが頬を引っ張ってきた。痛い……。

《相棒、聞いてないでしょ……》

「ふあい」

横目で見ると、ジトつとした目を向けるアクセルがいた。

しかし、俺の態度に諦めたのか、はあ、とため息を吐き、もう何も言わなくなった。

これぞ奥義『戲呆^{きほう}』だ（キリッ

《何考えてるのかわからないけど、あさつての方向向いて、かつこつけないでよ》

「我が娘よ。人にはやらなくてはいけないことがあるんだ」

《娘じゃないよ！ それに、それらしいこと言って、誤魔化さないで！》

「な——ッ！ バカヤロウ——！」

《——ッ！》

アクセルは俺の急に発せられた大声に驚く。

お前が……そんなこと言うなんて……。いつか来るとは思ってたけど……。

「反抗期には早すぎるぞ!!」

《だから娘じゃないよ!!》

バカな……!

《そ、そんなに驚愕した表情しないでよ!　ボクは……ボクは相棒の相棒なのに……》

「す、すまん!　そんな泣きそうな顔するな!　俺が悪かった!　悪ふざけしすぎた!」

《グスツ……謝ったから許してあげる……でも、相棒はボクの相棒なんだからね?》

「あ、ああ、すまなかった」

焦った焦った。まさか、アクセルが、ここまで俺との相棒という地位を大切にしていると思わなかった。

これからは気を付けないとな……。アクセルを泣かせるわけにもいかんし。

少し空気が暗くなってしまった。ちよいと話題を変えるか。

「でだアクセル。多分なんだが、あの子リスはわかっていないと思うんだ。どうにか、あの子リスにわからせてやりたいんだが、どうすりゃいいかな?」

《そうだね……でも、その前にいい?》

「ん?　なんだ?」

《相棒は、なのはちゃん達とまた仲良く話したい?》

「……わかってるだろアクセル、俺は——」

《ボクが訊いてるのは、相棒の気持ちだよ》

アクセルはいつになく真剣な表情で、俺の眼を見据える。
それに俺も応えるように、真剣な表情になる。

「そりゃあ、話したいさ。正直な話、あいつらと話したくてしょうがない」

《そうだよね……ねえ、ボクに提案があるんだけど》

「提案？」

「うん」

第8話（後書き）

ふむ、なのは達の方は暗すぎますかね（笑）

その分、主人公部分は軽くほのぼのするような感じに、仕上げてるつもりです。

そういえば気づいてました？

未だに主人公の名前が、公表されていないという事実（笑）

段々、10年前のあの人を言ってるのか、あの魔導師を言ってるのか、わからない人が、出てきたんじゃないかと、戦々恐々してます（汗）

ではでは、なるべく早く更新できるよう頑張ります♪

また♪

第9話

機動六課。それは、湾岸地区にあるミッドチルダ南駐屯地内A7 3区画にある。

そこは、湾岸地区だけあつてか、海が近くにあるため、風に乗って潮の香りがする。

その機動六課は、昨日、フードの魔導師に襲撃に遭った。今はその早朝。

そんな宿舎の前に、小人の姿があつた。緑色のボーイッシュな髪型で、若草色の服とスカートを着ている。その碧色の瞳は、戸惑うように揺れていた。

それは正しくアクセルの姿だった。

アクセルは宿舎の前を困ったように、右往左往していて、明らかに怪しい人である。だが、その可愛らしい風貌から、あんまり怪しく思えない。どちらかというと、誰かに頼りたいけど、でもどうしようといった感じがする。

自分でああ言ったのはいいけど、どうやって入ろう……。

アクセルは途方に暮れていた。

それというのも、昨日のことだ。

提案があるといったボクは、こう言った。

——ボクが機動六課に忍び込むのは、どうかな？

ボクがこう言ったのには、色々理由がある。

まず、ボクは機動六課の人たちには、見られたことはない。コートの中にいたからだ。

更に、情報を得るのに一番いいのは、やはり、機動六課に潜入するのが一番。

一番の理由が、なのはちゃん達のことだ。

もし、なのはちゃん達が相棒のことに気づいているなら、ボクがそれとなく調べて、相棒に伝えてあげること、きつと前みたいに仲良く話せるはず。あの子リスちゃんのこと、相棒に知らせることが出来るし。

そう言ったボクだけど、相棒は――

『ダメだ！ 相棒にそんな危険なことをさせるなんて……！』

すく否定した。

信頼されてないのかな……、と軽くショックを受けたボクだけど、相棒のためにも、ここは引き下がるわけにはいかない。

とにかく理由を聞いたら――

『相棒、お前は知らないかもしれないが、外っていうのは危険な場所なんだ。世間知らずのお前が、そんなところで1人で生きていくなんて……』

そんなことないのに……。ボクだって、世の中のことくらい知ってるもん。

それより、相棒がなんとなく過保護な感じがする……。もしかして、またボク、娘扱いされてるのかな……。

そう思ったら、また涙が流れそうになった。

『うおお！？ 泣くなアクセル！！ わかった！ わかったから！ はあ……無理だけはするなよ……』

相棒は仕方ない、といった感じに頷いた。もお……ボクはそんな

に心配されるほど、弱くないのに……。

そうして今に至る。

アクセルは大丈夫的な発言をしていたわけだが、現に今は非常に戸惑っていた。

それというのも、アクセルはデバイスだったときも、こうして妖精化した今も、相棒と常に一緒だったのだ。

それが今、こうして2人が別れた状態だ。こんなのは初めてなアクセルが、冷静に行動できるかと言えば、答えはノーである。

どうしていいかわからず、ただ戸惑うのが関の山である。

相棒にああ言った手前、もう戻るわけにもいかないし、でも、どうやって機動六課に忍び込めばいいんだろう？ 相棒に手段を訊いて——だ、ダメ！ 相棒に頼るわけにはいかないよ……。うう……。

——キキイ

そのとき、アクセルの背後に、車が止まった。全体的に黒い車である。

え……。？ と思い、アクセルが後ろを向いた瞬間——

《むぐつ！？》

急に身体を掴まれ、車に引き込まれそうになる。

アクセルは、嫌な感じがし、急いで振り払おうとするが、体格差は購えず、車に引き込まれてしまった。

——相棒……。！！

アクセルは、瞳を潤ませながら、言葉にならない叫びを上げた。

昨日、襲撃のあった機動六課宿舍。そこから、出てくる影があった。ティアナとスバルだ。

本来、ティアナは4時に起きて、1人で練習するつもりだったのだが、スバルに起こされた上に、しかも、スバルは自分も一緒にやると言い出した。

もちろん、ティアナはスバルの意見を、体力が保たないなどと言って却下したのだが、スバルは大丈夫だと言って、ティアナに付き合うことにした。

こうなるともうスバルには何を言っても無駄である。諦めたティアナは、一緒に練習することをよしとした。

そして、宿舍を出たところで、機動六課の出入口付近を困ったように右往左往する小人を見つけた。

2人は顔を見合わせ、一体どうしたのだろうか？ と軽く会話を交わし、声をかけよう、という結論に至った2人は、その小人の元に向かった。

だが、向かおうとした瞬間だった。その小人の後ろに、黒い車が止まった。そして、男が1人出てきたと思ったら、突然、その小人を捕まえて、車に引き込んでしまった。

明らかに、連れ込まれた風だった。2人は、誘拐！？ と当たりを付けると、急いでロングアーチに連絡した。

アクセルは震えていた。

相手はどうやら2人組。魔導師でもあるらしく、アクセルは拘束型とケージ型のバインドを架けられていた。

その中で、アクセルは怖さでブルブル震えていた。

それというのも、アクセルは一応この姿から、魔法を使えるには使える。しかし、アクセルはあまり攻撃魔法は得意ではない。このバインドが解けても、逃げ切れる自信はない。

だが、このまま逃げられなかったら――

――ボクどうなるの？

それを考えると、身体が震えて、目が潤んでくる。怖い……。アクセルが一番怖がっているのは――

――相棒にもう会えない……。

そのことだ。やだ……相棒に会えないなんて、やだ、怖いよ……。

《相棒……》

アクセルはヒクヒクと泣き出してしまった。

そんなアクセルを無視し、2人の男たちは会話を交わす。

「ば、バレてないっすかねえ。あんな管理局の目の前なんて」「へ、へへ、そのくらいしねえと、もう一杯一杯なんだよ。ユニゾンデバイスなんて、高値で売れるもん見逃せるかってんだ」

運転席に座るリーダーらしき男は、実に切羽詰まったという風講話す。どうやら、相当余裕がないらしい。衝動的に起こしたようだ。

アクセルはそんな会話を聞きながら、未だにブルブル震えていた。
相棒……相棒……。

アクセルは身体を抱き締めて、心の中で相棒を呼ぶ。来るはずもないのだが、心細くて、怖くて、いつも身近にいた相棒を呼んでしまふ。今は相棒に頼るという、先程まで否定していたことを、ついしてしまっている。

それほど怖いのだ。アクセルにとって、前述したとおり、隣には常に相棒がいた。だが、今は隣に相棒がない。代わりにいるのは、見知らぬ誰か。

相棒、相棒、相棒……。

心の中で、自らのマスターたる相棒を呼ぶ。ガタガタと震える身体を抑えつけながら。

「ちっ、そいつを泣きやませろ！」

「へ、へい」

運転する男は、気が立ってるらしく、アクセルの泣く声がウザくなってきたようだ。

「お、おいっ！」

《ひうつ！？》

隣に座る男に急に怒鳴られ、アクセルは身を竦ませる。相棒……。

「な、泣きやめ！ う、うるせえんだよ……！」

《うぐ……う……ご、ごめん……なさい……》

アクセルはただ怖くて、その人の言葉に従うように、必死に涙を抑え付ける。従わないと怖いことされる……やだ……助けて相棒……。

そのとき、外から声が聞こえた。

「その黒い車！ 止まりなさい！」

声は上から聞こえた。アクセルはその声に聞き覚えがあった。

——なのはちゃん……。

アクセルは希望に顔を上げた。この状況で、知り合いが来てくれたというだけで、アクセルの心は幾分か軽くなった。

だが、頭が働くほどではなく、ただ、助けてくれるといった漠然とした期待感に溢れていた。

なのは達は、ティアナとスバルから連絡を受け取ると、すぐに市街地の飛行許可を取った。しかし、急遽だったためか、1人分の許可しか取れず、なのはしか空を飛んで、追ってきてはいない。

その代わり、フェイトは後ろから車で追い、前線メンバーと副隊長陣は、前方の通路の封鎖を行っている。

そして、なのはなのだが、追い付いたはいいものの、相手は今、相当スピードが出ているし、まだ他の車も走っている。

下手に魔法を使ったら、他の車まで、巻き込んでしまうし、中にいる攫われた子も傷つけてしまうかもしれない。

とにかく今は、前方の通路の封鎖まで、説得という名の脅しをするしかない。それで、相手が観念してくれば、無駄に怪我をさせることもない。危険がないのが一番である。

だが、逆にこのままにしておくと、一般車両もここは通っているため、呼び掛けで、ある程度はけてもらっているが、猛スピードで走っているこの車に、ぶつかったら大惨事である。

そう思ったなのはは、桜色の魔力弾を生み出す。

それを見た車に乗る男たちは、反撃のため、車から魔力弾を作りだし、なのはに飛ばしてきた。

しかし、なのはは的確にそれを自身の魔力弾をぶつけ破壊する。そこで、走っている車が犯人だけになった。

その瞬間、なのはが待機させていた魔力弾を犯人の車の前に持つていくと、炸裂効果を持つて、それが爆発した。煙がもうもうとたちこめる。

「ぬおっ!？」

犯人は急いでハンドルを右にきった。

咄嗟のことに本能が働き、思わずハンドルをきったようだ。人間の前が見えなくなると、まっすぐ進むのは難しいものだ。元々、あまり精神に余裕のなかった犯人だ。理性的に脳を働かせるには、難しいだろう。

犯人の車は、スリップして止まり、しまった……! と思った犯人たちは、急いで車を走らせようとしたが、動かなかった。

な、なんで……! と悪態を吐く犯人たちをしり目に、アクセルの頭にはある声が聞こえてきた。

——さっさとバインド外して逃げるアクセル。俺の相棒ならそんなくらいできるだろ?

それは、間違っはすもない声で、いつも一番近くにいた——

——相棒……!!

アクセルの心が勇気に満ち溢れてきた。

相棒が来ただけで、こんなに違うのかというほど、その眼は強い意志を放っていた。

アクセルは顔を上げ、すぐにバインドとケージを外しにかかる。それは一瞬にして解かれた。そして、解かれた瞬間、窓ガラスが急に割れる。

犯人たちは驚き、目を瞑りガードの体勢を取る。

アクセルは、その瞬間、割れた窓から外に飛び出した。

それに気づいた犯人たちは、連れ戻そうと、外に出た。だが、アクセルを追うことは叶わなかった。

アクセルはもうもうとたちこめる煙を抜けるために、必死で飛ぶ。懐かしき人の元へ。

そして、煙の中を抜けると、アクセルの視界には、警戒している白いロープのようなものを着た魔導師がいた。

しかし、それがアクセルだと分かったと、ティアナたちからある程度の容姿を聞いていたなのは、アクセルに対しての警戒を解いた。アクセルはそんなことは何も気にせず、ただなのはの元へと飛んでいく。

確かにさっきまで、勇氣に満ちていたのだが、逃げ出せたかと思うと、急に怖くなった。1人は怖い……。

アクセルは、なのはの胸の中に飛び込んだ。

なのはは、まっすぐこっちに飛んできた緑髪のユニゾンデバイスにどうしていいかわからず、ただその胸で受け止めた。

《う……あう……こわかったよお……》

そう言って震えて泣くアクセルの身体を、なのはは抱きしめた。

第9話（後書き）

色々省いちゃった（テヘッ

ごめんなさい！ ごめんなさい！

うう、きっと次の話で、細かいことがわかるかと思います。

ちょーつとあつさり終わりすぎちゃいましたしねえ……。でも、こういうの苦手だったり……。

いや、泣き言は言ってられません！

リリカルマジカ……僕には……無理だ……orz

……こんな恥ずかしい台詞言えない／＼／

第10話

「ぬお〜！ アクセル〜！！」

俺は苦悩していた。

それというのも、昨日、アクセルの提案を仕方なく良しとした俺は、今日、アクセルを機動六課の近くまで送った。

それから、アクセルに《こそこそ近くにいないでね。いたら当分口きかないからね！》と言われたため、ため息を吐いて、すごすご安宿まで帰っていったわけだが、心配すぎて呻いていた。

くお〜！ 本気で心配だ〜！ 大丈夫なのかアクセル〜！！
ていうか、なんか連絡が遅くないか？ まさかなにかあったんじゃないか。心配だ……様子を見るに……。

いやいや、見つかったらアクセルに怒られるし、ホントに口きいてもらえないかもしれないし……。
ぬ〜、一体どうすればいい……。

——相棒……。

「アクセル！？」

今、確かにアクセルの声が……！

マジで何かあったのか、アクセル！！

俺はそのアクセルの声が聞こえた瞬間、安宿を飛び出した。
そして、勘を頼りに道を疾走する。

何故かわからねえが、手に取るように場所がわかりやがる。

待ってるよ、アクセル！！

ふむ……。

今、俺は高層ビルの屋上から、爆走している車を見ている。どうやら、あれにアクセルが乗っているようだ。

機動六課も嗅ぎ付けたりしく、その車を追っている。

追っているのは、なのは。その後ろからは、フェイトが車で追っているみたいだ。他の奴等は、多分、道の封鎖が何かだろう。

本当はこんなところで、ジツとしてないで、早くアクセルを助けて、犯人をボコボコにしたいんだが……せっかくアクセルが、出した案を反故にしまうことになりかねない。それは娘の成長の妨げになるかもしれないし……ああ、でも心配だしな……いやいや、可愛い娘には旅をさせるとも言うし……。

とまあ、そうこう考えてると、今まで説得を試みていたなのはが、討って出た。

あれは……そういうことか……！ 利用させてもらうぜ、なのは！ 車や人が捌けた瞬間、なのはが、炸裂効果のある魔力弾を犯人の車の前で、爆発させた。煙がもうもうとたちこめる。

俺は練っていた時流エネルギーを解放。俺の知覚が耐えきれず、モノクロの世界に移行する。

俺の身体は、数キロ離れた煙の中へと突っ込む。

その中には、急ブレーキをして、ハンドルをきった犯人の車の姿。俺は逃げられないように、まずタイヤに素手で穴を空ける。

そのあと、アクセルに念話を送った。ちらっと見たのだが、大分震えて怖がっていたからだ。

そこから更に、アクセルが逃げやすいように、瞬時にガラスを砕く。

そこからアクセルは外に飛び出して、逃げ出した。よし、これで安心だ。あとは……。

犯人共が、アクセルを追うためか、車から出てきた。

「てめえらやってくれたなあ……！」

「な、なんだてめえは！」

「邪魔しやがって、ぶっ殺す！」

煙がたちこめる中、俺が犯人共の目の前に立つと、そいつらはそう言つて、デバイスを向けてきた。

三下が……！ 俺のアクセルを泣かした罪は重いからな……！

「間違えるなよ……殺されんのは——てめえらの方だよ……！！！」

アクセルを拐った2人は、捕まった。

あの煙が晴れると、そこにあつたのは、犯人の倒れた姿だった。その姿は、思わず目を背けたくなるような姿だった。

何故なら——顔が見るも無惨だったからである。おそらく、何度も殴られたのだろう。顔が腫れ上がり、原型を留めていない。しかし、生きてはいたのだが。

煙がたちこめている間、一体何があつたのか、現場の処理をするフェイトは考えていた。

もしかして、あの魔導師……？ いや、でも、何の確証もないか。一瞬、あの魔導師のことが頭に過るが、今は現場の処理をすることにした。

一方、緑髪のユニゾンデバイスを保護したなのは、その子が全く離してくれる様子がなかったので、仕方なく六課まで連れていった。

今は部隊長室。はやてやリインもいる。ちなみに指揮は、グリフィスに任せた。

そこで――

《すうすう……》

「寝ちゃった……」

アクセルは、なのはの腕の中で寝ていた。その服をがっしりと掴んで。

「気に入られてもうたなあ、なのは隊長」

「あはは」

はやての少しからかうような言い方に、苦笑を洩らすなのは。だが、次の瞬間には、真剣な表情になり、なのはは、はやてに問いかける。

「この子、どうしよつか？」

「そやなあ……とにかく、事情を聞かんことには、どうにもならへんし」

「そうだね。この子も離してくれそうにないし」

再び苦笑を洩らす。

アクセルは実に穏やかな顔で、寝ていた。泣きつかれたのか、安心したからかはわからないが、熟睡モードで、どうにも起きそうにない。

そんな健やかな可愛い寝顔を見ていると、思わず笑みがこぼれる。もしかして、マスターとはぐれちゃったのかな……？

なんとなくだがそう感じた。1人でいるのが怖いようだし、そばにいつも誰かいたんじゃないか、という考えもある。

すると、熟睡していたはずのアクセルは、不意に目を覚ます。とはいっても、デバイスだから、元々睡眠は情報の整理みたいなもの

なので、本当に寝ているわけではないのだが。

アクセルは、しばらく、ぽけっと、なのはの顔を眺めると、急にスイッチが入ったかのように、目を見開いた。

《わ！ あ、あの……！ えと……ふえ！？》

アクセルは混乱した。なのは達は、そのユニゾンデバイスの慌てように、えくと、と頬を掻いた。

ボク、一体どうなったんだっけ……？

アクセルは今の状況を順を追って、確認していった。

そして、それが終わると、ほおっと胸を撫で下ろした。

色々あったわけだが、どうやら六課に潜入することが出来たらしい。

「落ち着いた？」

なのはの優しそうな声が耳に届き、アクセルはこくつと頷く。

なのはちゃん……そういえば、こうしてすっかり顔を見るのは初めてだ。すつごく美人になってる……。

「ど、どうしたの？」

あんまりにもじつと見られるものだから、少し恥ずかしくなったのはは、微笑を浮かべる。

アクセルは、《ご、ごめんなさい。その綺麗だったから……》と言った。

なのはは、その正直な言葉に顔を紅潮させていく。

「……お、お世辞でも……嬉しい……かな……」

そう言って、顔を俯かせた。

アクセルはよくわからないのか、頭に疑問符を浮かべている。そこに、はやてが見てられなかったのか割り込んできた。

「それでや、貴女のこと少し訊いてもエエかな？」

《あ、うん》

相棒の言った通りかあ……。

アクセルは、はやてがいるのを見て、そんな感想を抱く。いや、あの襲撃の時に声は聞いているのだが、暗がりだったし、あまりしつかり姿は見ていなかった。

それというのも、フェイトとなのはがいると分かった時に相棒が言っていたのだ。

はやてもいるだろうと。

だが、そんなのはやての処遇が分かる前に死んだ相棒が分かるはずない。

だから、アクセルは《なんで？》と訊いた。

そしたら、相棒は――

『クロノが、はやてみたいな子を無下に扱っはすがないだろうが。あのお人よしの遅刻野郎が』

と言っていた。

それだけでも、クロノのことを信頼しているのがわかる。ちなみに、何故クロノのことを遅刻野郎と呼んでいるかというと、あいつはいつも来るのが遅い、とのこと。

閑話休題。

アクセルはふよふよと、はやての前まで飛んでいく。そして、はやてが口を開いた。

「まずは貴女の名前を訊かせてもらえるか？」
《ボクは“アスカ”っていうんだ》

この“アスカ”はもちろん偽名である。
相棒が付けてくれた名前だ。理由は教えてくれなかった。何でだろう？

「アスカやね。それじゃあ次は、どうして六課の前をうろろしてたのか教えてくれるか？」

《それは……その……相棒とはぐれちゃって……だから、探してほしくて……》

これも、相棒の入れ知恵だ。

提案したアクセルだが、作戦は全くなく、仕方ないので、もっともらしい理由を相棒が何個か考えたのだ。

ちなみに、この場合、管理局の迷子を取り扱うような機関が処理するのだが、基本的に相手が自分のことを探してくれと申請してない限り、ほぼ見つからない。

そのため、アクセルが探してほしくても、相棒の方が探してくれと申請しない限り、アクセルの探し人が見つかることは、ほぼないと言っている。もちろん、呼びかけを行っても、結局、相棒が無視するため意味がない。

そんな理由で、これに決めた。

「なるほどな……そしたら、きっと貴女のマスターも探して思うし、すぐ見つかるやろ。確かめてみるわ」

はやてがラインに指示を送る。すると、ラインがコンソールを取り出し、指を動かし始める。

そして、数分経ち、ラインの指が止まる。

《それらしいものはないです》

「そうか……でも、きつとすぐ見つかると思うし、六課やなくて――」

《やだ……》

アクセルはしゅんっとなると、なのはもとへ飛んでいき、きゅっとなのはの袖を掴む。

アクセルは、確かに六課にいないかもしれないというのもあるのだが、今はそれよりとにかく、そばに知り合いがいてほしいというのが強い。

急に知らない人に、攫われて怖い思いをさせられて、もう1人ではいるのは嫌だろう。

それは、なのはにもわかったのか、アクセルのことを撫でて落ちて着かせる。

「はやてちゃん、あんなことがあった後だし、アスカちゃんも助けた私たちはともかく、わずかの時間でも、知らない人といるのは、可哀想じゃないかな？」

「……そうやな……わかった。マスターが見つかるまでは、六課で面倒みよか」

《ありがとう……》

第10話（後書き）

こんな感じの裏事情でした（笑）

え？ 予想通り？ ですよね（笑）

まあ、そんなわけで、アクセルは六課行きました。

これから、それぞれが独自に、情報集めに入ることでしょう。

さあ、一体どうなるのか。

てなわけで、また♪

第11話（前書き）

ええ……と、ごめんなさい。
遅れました。

今後は早めに投稿できるよう頑張ります。

では、どうぞ。

第11話

これで、アクセルは六課に入れるだろ……。

「はぁ……」

思わずため息がでる。

これからは1人で動くことになるかと思うと……な……。

なんだかんだアクセルがいなくなると、酷く寂しい。

娘が嫁入りしたら、こんな気持ちなんだろうか……。

ちなみに、俺がアクセルに付けた名前は、娘に付けたい名前である。まあ、アクセルに言うと、また泣き出しそうなので、言わなかったが。

さてと、どう動いたもんかな……六課については、アクセルからの情報で、ある程度集まるだろうし、俺が集めるのは、この世界の現状……ってどこか……。

「となると……やっぱ、あの地上本部か……」

俺は遠くに映る超高層タワーを見つめる。

なんにしても、今の俺には情報が少なすぎる。

なるべく、なんでもいいから、自由に動けるだけの情報が欲しい。

とは言っても、どうすればいいかねえ……。

まあ、とりあえず、間近で見えますか。

そうして、適当にゆっくり歩いていくこと、2時間後。

「やっと着いたか……」

軽くげんなりしつつ、目の前の地上本部を見上げる。
間近で見ると、更にデケエな……何メートルあんだろ？

「そのの、どうかしたのか？」

と、そんなことを考えて、ぼーっとしてたら、警備員に話しかけられた。

ふむ……せつかくだし、色々やってみるか……。

「あゝ、実は見学したいんですけど……」

「許可は取っているのか？」

「いえ」

「そうか。なら、ここに行けば許可が取れるだろう」

警備員の人は、端末を取り出し、地図を見せて、ここだと説明してくれた。

まあ、ありがたい……が、俺は許可もらえんのかな……？

「君みたいに、意欲のある子は大歓迎だな。訓練校の生徒か？ 訓練は厳しいだろうが、頑張れよ」

「はい。ありがとうございます」

そう言っ、お辞儀をして、俺は去っていった。

訓練校か……そんなもんもあるんだな。まあ、当たり前っちゃ当たり前か……。

でも、流れの魔導師には、見学させてもらえんかもな……てか無理か、いやでも……。

とりあえず、行ってみるか……。

ウィーン、どっかの国のような効果音を放ちながら、自動ドアが開き、俺は建物から外に出た。

ふっ……わかってたさ……それでも俺は……。

って別に、何か深刻なことがあったわけではないんだがな。

ただ単に、許可をもらえなかっただけ。やっぱり、流れの魔導師じゃダメか……。

この際、どっかの部隊に雇ってもらうとか……そしたら、バイトする必要もないし、情報だって集まるじゃないか……一石二鳥だ！

「……無理か……」

なんとなく、空を仰ぎ見て呟いた。

流石にどこの馬の骨とも知らぬ男を雇うわけねえな。てか、その前に管理局に顔をさらして、なのは達に知れでもしたら、大へ……ん……ん？ 待てよ……確か……。

「変身魔法ってなかったか……？」

そつだ。闇の書事件の時、あの猫共、変身魔法で自分達のことを男に見せてたじゃねえか。

なら、変身魔法を使って動けば、まったく俺だという疑問を持たれずに、いけるんじゃないのか？

キタ、キタコレ、俺ってやっぱり天才だわ。よし、早速……。

「………どうやって、術式組むんだろ？」

オワタ……。やっぱり俺バカだわ……。

いや、待て待て、術式の組み方くらい、何か……本とかに載ってるんじゃないか？ そつだよ。そんくらい載ってるって。

え〜と、どつかに図書館が何かないかな……。

……地理にも詳しくねえや……。

いやいや、こんな時のために、人に訊くという昔ながらの方法があるんじゃないか。

というわけで、交番みたいなやつないかな……。いや、だって、まだ朝だからか、急いでる人しかいないし、呼び止めるのも悪いじやんか。

そんなわけで、とりあえず、歩き回ってみる。

ダメだった……。

ちくしょう……。どうして、こういうときに限って、見つからねえんだよ。

人生つて、追いかけても追い付かないし、見つけようとしても見つからないな……。なんて、達観した気持ちで歩いていると、あることを思い出した。

——そーいや、無限書庫があつたな……。

とはいっても、アレがあるのは、本局だよな……。無断で入ってもいいもんだっけ？

ダメか……。てか、今日何回このやり取りしたかな……。

仕方ない……。気は進まないが、ここは適当な管理局員を捕まえて、ぶっ飛ばして、服を奪うか……。

後で返せば平気だよな。

平気さ。そこら辺の雑魚を誘き出して、ぶっ飛ばしちまえ。と俺の中の悪魔が呟いた。

ダメだよそんなことしたら。生きてたときは善良（笑）な一般市民だったじゃないか。と俺の中の天使が言う。

てか、ちよつと待て天使。何故、一瞬笑ったし。

俺は機嫌を損ねた。悪魔の言うことに従うとしよう。

ふふふ……そんなわけで、俺は今、本局に来ている。
時間が跳んだ？ 気にするな。

今は管理局員の制服を来て、IDも奪ってきた。

これで俺は一時的に管理局員だ。だが、長くは続かないだろうから、後で返して、トズラしなきゃな。

そんなことを考えてたら、それらしい場所に着いた。

うむ……無限書庫……ここだな。

俺は無限書庫の中に入るべく、ドアを開けた。

「……………」

「……………」

……おかしいな……俺の目の前に、長い金髪を肩ぐらいで纏めた眼鏡をかけた見たことのある顔があるぞ。

まさか幻想か？

「君は………？」

やべえ、この幻想喋ったぞ、おい。とうとう生き返った代償でも現れたかこりゃあ……。

「どうして………？」

なんて意識飛ばしてる場合じゃねえ！！

何でここにユーノが！？

まずいますい！ 顔を見られた！？

「え……と……」

「あ……すいません！ 探し物ですか？」

「え？ あ、そのハイ。そうなんですよ。ちょっと変身魔法を勉強しようと思って……ははは……」

……き、気づいてない……？

ま、まあそりゃあそうだよな！ 俺は死んでるんだし、いくら顔が似てるからって、俺が生きてるなんて思わねえか！ はは！ はははは！

はあ……寿命が縮むかと思った……。

とにかく、俺がそう言くと、ユーノは案内してくれた。

だが……気づいてないとはいえ、相当気になってるみたいだ。何回もちろちら俺の方を見てきやがる。

きつと、俺のことを思い出してるんだろうな……覚えてるみたいで嬉しいではあるんだが、その実、あまり思い出してほしくはないな。

残された者の苦しみは、一応俺もわかってるつもりだ。俺だって……いや、それはいいか。とにかく、俺のことで、あまり苦しんでほしくはないな。

「これなんてどうですか？」

ユーノが選定を終えて、俺に本を渡してくれた。とりあえず、あまり長居するのはよくないな。とは言っても、持ち出し不可だから、ここで読むしかねえか。

俺は奇妙な浮遊間の中、本を読むべく開いた。

ユーノは読み始めた俺に、邪魔しちゃ悪い、と思ったか、俺の傍から離れ、仕事に戻っていった。

数時間後。

とりあえず、術式の組み方とかは、頭に叩き込んだ。あとは俺次第だ。

そうゆうわけで、無限書庫を後にして、さっさと戻ろうとしたところ――

「あ！ ちょっと待って！」

ユーノに引き留められた。

それだけで俺の心臓が、鷲掴みにされたような気持になる。まさか俺の正体に気づいて……！

「この後時間ないですか？ その……お茶でもしませんか？」

あれ？ ナンパですかあ？ まさかユーノそっちの趣味に……！俺が若干引くと、ユーノはその意図に気づいたのか、慌てたように手をぶんぶん振る。

「ち、ちが……！ そうじゃなくて……その……君のことが気になっ……」

その発言に俺は更に引いた。やべえ、本物がユーノ？ やめてくれよ。俺にそっちの趣味ないから。

ユーノはまた自分の失言にでも気づいたのか、ぐわーっと頭を抱えた。ユーノはこの10年間で、一体何があっただろうか？

「ち、違っただって！ 僕はただちょっと話がしてみたいだけで……」

「え……と……はい。話だけなら……」

って何言ってんだ俺！！

ユーノの慌て振りに、思わず頷いちまったが、俺は正規の局員じゃねえんだぞ！ バレたらどうすんだ！

と、心中で慌てる俺に、更にユーノは慌てさせる一言を放った。

「ありがとう……あ、まだ自己紹介がまだでしたたよね。僕はユーノ・スクライアっています。あなたは？」

あなたは？　もしかして私のことでしょうか？　本名？　言えるか！　やべえ……！　どうすんの！　どうすんの俺……！

「お……それは……その……ジョニー・マックエデンっていいます」

って……誰だYO！？　マジで誰だ！？　どうした俺の口！　こいつは誰だ！　なんだジョニーって！？　なんだマックエデンって！？

「うん。よろしくジョニー」

「あ、ああ……よろしく……」

もうやだ……ホントに誰よジョニーって……俺これからジョニーって言われんの？　なんかやだわ。微妙に恥ずいわ。

いや、なにが恥ずいって、ジョニーはまだいい。マックエデンって何よ？　なに某ファーストフード店を楽園にしようとしてんだよ。俺はこの中高生なんだよ。マジマック、エデンだわ、てか？

アホか！　てか、そんな中高生おらんわ！　ああもうテンパリすぎて、何言ってるかわからん。とにかく……恨むぞ俺の口……。

「それじゃあ行こうか？　あと僕とはタメで話してよ。僕もそうす

るから」

「ああ……」

もういいや……とにかく、ボ口を出さないようにしないと……。俺とユーノは、本局の食堂に向かった。何故食堂かというと、よくよく時間を見れば、昼時だったので、飯と一緒に食おうということになった。

そうして、2人で飯を食いながら話す。

「ホント急にごめんね」

「いや、いいよ別に。特にすることもないしな。それより、何で俺に声をかけたんだ？」

一応これは知っておきたい。返答次第では、今後の身の振り方を変えなければ……！そして、もしユーノがそっちの趣味に目覚めようとしてるなら、友としてここは止めてあげなければ……！

俺が訊くと、ユーノは少しの間俯くと、すっと顔を上げる。

「こんなこと他人の君に言うのは、よくないと思うんだけど……不思議だな。僕は話したいって思うよ」

ユーノはそう前置きを置くと、話し始めた。

「もう10年も前になるよ。僕らはあるロストログアの破壊をしようとしたんだ」

そこで一息吐く。

どうやら、俺が関係してるのは間違いないみたいだな……。

「だけど、成功しなくてね。それで、僕たちが絶望した時に、1人諦めなかった奴がいたんだ。最後はそいつが全部片付けた。その命と引き換えにね」

「……今でも気にしてるのか？」

「そりゃあね。僕たちがもう少しやれてればって思うよ」

「……！」

俺がそこに口を挟もうとしたのだが、ユーノはそれを遮った。

「でも！ 僕は……それ以上にあいつが許せない……！ あんなことされたって、僕も！ なのは達も喜ばない！ あいつは……！」

「ゆ、ユーノ！ 落ち着け！ なっ！」

「あ……ごめん……」

ユーノ、言いたいことはわかるが、ここは食堂だ……静かにしよう。

と言うのは、少し馴れ馴れしい気がするから、言わないけどな。

まあ、やっぱりそうだよな……俺だってあんなことされれば、許せない気持ちになる。

それでも、俺はあの街をお前らを護りたかった……。

「まあ……その死んだ奴が、君と似ててね。面影っていうのかな」

「……もう10年も前なんだろ？ そいつの顔なんて覚えてるのか？」

「当たり前だよ。友達だしね」

即答かよ。ちょっと嬉しいじゃねえかばか野郎。

まあ、とりあえず俺はそいつじゃないアピールでもしとくか……。

「それで俺に話しかけた……か。でも俺はそいつじゃないぜ」

「あ、ごめん。そんなつもりじゃ……ただそいつと似てるから、少し心配になっただけなんだ」

「心配？」

「うん。なんだか難しい顔してたからね」

そうだったかなあ？ ああ、ユーノにバレないようにって、強張ってたからかな……。それなら納得。

てか、それだけで心配される俺って……んなやらかしてたか？

「そうか？ まあ、あれかな？ 試験が近いからかな？」

「そうなんだ。魔導師ランクアップの試験？」

「え？ あ、ああ、そうそう、それぞれ」

「何ランクを受けるんだ？」

「うえ？ え」と……」

ランク？ ランクってなんだっけ？ あ、あれか。あのAとかAAとかか。無難なランクは何だ？ Dランクくらいか？ いや、思い切ってBランク……いや、じゃあ、間を取ってCランクにするか……。

「Cランクかな？」

「そう……なんだ……」

「えと、何かおかしい？」

「え？ いや、そうじゃないんだけど、ただジョニーから感じる魔力でCランク受けるんだって思ってたね」

おうふ……しまった。同じ魔導師だから、相手の魔力量はある程度わかるのか……しくった……。

「あ、いや、あれだよ。俺ってば、最近管理局入りしたばっかだから」

「そっか。でもジョニーならBランクくらい余裕だと思うけど……？」

「ほら！ 俺ってやつは堅実で実直なやつだから、段階踏んでやりたいわけよ」

「ふ〜ん、まあジョニーがいいなら、いいのかな」

ふ〜、そんな詮索してくれるなよ。こっちは檻けいを出不さないかドキしてるっていうのに。

てか、そろそろ行かねえと。あの管理局員もあのままじゃ可哀想だし。

「じゃあ俺、そろそろ行くわ。またなユーノ」

「あ、うん。今日は話せてよかったよ。じゃあ、またジョニー」

俺はそうしてその場を去った。

なんとかバレなかったな。あとは変身魔法を使いこなして、その素顔をさらせば、俺が俺だと疑われることはなくなる。

うまくいけばいいがな……。

第11話（後書き）

次はアクセル回です。

あと、もし、ユーノが口調おかしいとかあったら、教えてください。

久しぶりだから少し自信なくて……。

では、次話で。

第12話（前書き）

少し遅れました……。

今回は少し文字数が多いです。

では、どうぞ。

第12話

機動六課。その廊下を、ふよふよと浮かびながら飛ぶ2人の小人の姿があった。

それは綺麗な長い銀髪を揺らすリインフォース・ツヴァイト、ボーイッシュな緑髪を揺らすアクセル——もといアスカの姿であった。リインはアスカの手を引き、ここ——機動六課の案内をしているようだ。

同じユニゾンデバイス（厳密には違うが）なためか、すぐに打ち解けたらしく、リインは笑顔で案内している。アスカも戸惑いながらも、笑顔を浮かべて案内されていた。

《ここが食堂です！》

《わあ、広いんだね》

《当たり前です。六課に所属している人たちが、毎日来てるんですから》

えっへん、と何故か誇らしげに胸を張るリイン。しかし、アスカもアスカで、おお、と拍手をしていた。

その時、胸を張ったせいか、リインのお腹が、キュ、と鳴った。それにリインが慌ててお腹を押さえて、顔を赤らめる。

《あう！？ こ、これは、その……！》

と言い訳しようとしたリインを遮って、またも、キュ、とお腹が鳴く音がした。それはアスカからだった。

《はっ……》

アスカも恥ずかしくて、お腹を押さえて、顔を赤らめる。
そうして、2人で顔を見合わし――

《《あははは》》

おかしくて笑いあった。

どうやら、アスカはラインと相当打ち解けられたようだ。

「なんや、すっかり仲良しさんやな」

《はやてちゃん！》

どうやら、昼ご飯を食べに来たらしいはやてが合流。

更に後ろからは、フォワード陣になのはにヴィータも来た。

その中の蒼髪の少女――スバル・ナカジマがアスカの姿を見つけ、
近付いてくる。

「あ、その子って、六課で保護したアスカちゃんですか？」

アスカはそのスバルに対して、知らない人だからか、オドオドしながら、はやての後ろに隠れて、横から顔を出す。

やはり、アスカにとっては、知らない人というのは、畏怖の対象
になっているようだ。頭で良い人だと思っても、どうしても身体が
震えてしまう。

「あれ？ 私、嫌われてます？」

そのアスカの行動をそう取ったのか、スバルはなのはに尋ねた。
なのはは困ったように苦笑すると、アスカに近づく。
そして、アスカを安心させるように、頭を撫でてあげる。

「大丈夫だよアスカちゃん。この人たちは、みんな良い人たちばかりだから」

《……………》

アスカはなのはの言葉に、なのはとスバルのことを代わる代わる見て、意を決したのか、今度はなのはの裾をキュッと掴みながら、スバルの前に出る。

しかし、なかなか声が出ないのか、口をパクパクさせていた。でも、勇気を振り絞り、一度深呼吸をして、再び口を開く。

《……………あの……………ボク……………その……………アスカっていいです。よろしく……………》

それだけ言うと、なのはの後ろに隠れてしまった。しかし、再びちよろつと顔を出す。

そこには笑顔のスバルの顔があった。一瞬ビクツとなったアスカだが――

「うん。よろしくアスカ！」

そう言って、手を差し伸べられ、ほっと一息ついて、アスカは両手でその手を握った。

その挨拶も終わり、次にフォワードメンバーの全員も自己紹介をし終わり、最後にヴィータが自己紹介をしようとしたら――ヒュツとアスカが、なのはの後ろに隠れてしまった。

アスカ――アクセルにとって、ヴィータとは最後は和解したものの、敵である期間の方が長かったため、どちらかというと少し怖いのだ。ぶつかりあったこともあるし、そう簡単に前に立てなかった。しかし、ヴィータはそんなことは知らないので、頭に疑問符を浮かべると、なのはを見上げる。

「おい、なのは、あたしは何か嫌われるような事でもしたのか？」
「え、えっと……さあ？」

当然なのはも知らないため、ヴィータの質問にも、答えられないというわけで、アスカを説得にかかるなのは。
そんなとき、スバルがぼつりと呟いた。

「……目つきが悪いからじゃ……」

ドゴン！

「殴られてえか」

「もう殴ってます……」

思わず出た発言で、天罰をくらったスバルは、頭を押さえて蹲うつすくまる。
つたく、と呆れるヴィータ。

そんなコント染みたことをするヴィータ達を尻目に、なのはとアスカは――

「大丈夫だよアスカちゃん。ヴィータちゃんは、ちょっと乱暴なところがあるけど、優しいから」

《でも……その……》

なのはがそう言うが、アスカはなかなか前に出れない。どうしよう……怖がってたらおかしいと思われる。でも、あの子……鬼気迫る感じで怖かったし……。

あの頃のヴィータは、とにかく一所懸命であつた。そのために、顔も強張り、アスカ――アクセルには怖く思えたのだろう。

まあ、だからといって、デバイスであつたときは、常に相棒がい

たし、怖いという感じはなかったが、やはりこうやって、実体をもつて動けるようになると、どうにも萎縮してしまう。

「本当にヴィータちゃん優しいから。ね？」

《う……うん……でも、もう少し待って……そしたら、ボクも話せるようになると思うから》

「そっか。ヴィータちゃんはそれでいい？」

「まあしゃあねえか」

何故あたしだけ……、と心の中で、少しため息を吐いて、食堂に向かつて歩き出した。

「私たちも行こか？」

今まで静観していたはやてがそう言い、全員昼飯を食べることになった。

そのテーブルに座っているのは、なのはとはやてとヴィータ。他のフォワード陣は、近くのテーブルに座っている。

それぞれ食べるものを適量運び込み食べ始めた。

ちなみに、リインとアス力は、なのは達のテーブルの上で食べている。

「そういえば、アス力ちゃんのマスターってどんな人なん？」

《ボクの相棒？》

「そっや」

内心ドキツとしながら、アス力は考える。正直に言っているものなのかどうか。

確かに外見さえ言わなければ、相棒がバレることはないと思うが……、と考えたところで、でも相棒のこと以外に話せる人いない……、と気づき正直に話すことにした。自分の思う相棒のことを。アスカは少し考える素振りをし、ある程度纏まったところで話し出す。

《ボクの相棒は、優しくて、自分より相手のことを第一に考えるよ
うな人かな。あとは、時々、調子に乗り過ぎて失敗したりもするよ》
「良いマスターそうやね」
《うん》 ボクの相棒だから》

はやてに相棒を褒められ、上機嫌になるアスカ。
すると、横でリインが何かを考えていた。それに気づいたはやてが、「どうしたリイン？」と訊く。

リインは、うーん、と可愛く首を傾げると、徐に口を開く。

「なんでアスカはマスターのことを“相棒”と呼ぶですか？」

気になってるのはそこだった。

基本的にだが、ユニゾンデバイスのほとんどは使い手のことは、『主』や『マスター』『マイスター』と呼ぶことが多い。というよりは、暗黙の了解のようなものかもしれない。

リインにしたって、普段は『はやてちゃん』などと呼んでいるが、きちんと呼ぶときは『マイスターはやて』などと呼ぶ。

つまりは、普段は名前などで呼ぶが、名前以外では基本的に『主』『マスター』『マイスター』のような主人を表す単語を使うということだ。

だが、このアスカの口振りからいって、どうやら普段から『相棒』と呼んでいるみたいだったので、気になったのだ。

しかし、それに異論を唱えるように、隣のスバルが手を挙げる。

「はいはい。私のマツハキャリバーは相棒って呼ぶよ?」

正確には『バディ』だが、まあ同じ意味だろう。

しかし、それは前述した理由で言った通りだ。

それをリインが解説すると、スバルは納得したようなそうでないような感じに頷く。

そのスバルは置いておき、再びアスカに尋ねる。

アスカは尋ねられ、あの日のことを思い浮かべる。

そうすると自然と口から出ていた。あれは10年前のことだ。

辺りは暗闇。

夜の街というのは、子供——というよりは、この少年にとっては、好奇心を引き立てられる対象だった。

他にも、あまり家にいたくないというのもあったが。

とにかく、少年は夜の街を徘徊していた。

その時、少し遠くの方で、何かが崩れるような壊れるような音がした。

気になった少年は、その好奇心から、音の聞こえる方向に走る。

そして、音源に着いたのだが、そこには化け物から逃げる少女がいた。

なんだよあれ!? と思い、怖くて物陰に隠れ、その場面を見る。どう見ても普通の女の子が、化け物に襲われている。

に、逃げなきゃ!? 誰かを呼びに! と思うが、その間にあの子が殺されたら……、と思うと、その場を離れることが出来なかった。だが、だからといって、あんな化け物に立ち向かう勇気もない。

どうすれば……！ と悩んでいると、少女の悲鳴が聞こえて、身体が勝手に動き出した。助けなきゃ……！ もう人が死ぬのなんて見たくない……！

化け物が少女に襲いかかる瞬間――

『避けるバカ！』

少年は少女を突き飛ばして、化け物の前に出た。

――死――

その一文字が少年の脳裏を過る。

いやだ……！ 死にたくない……！ 生きたい……！ 俺は……

まだ……！ 母さん……！

瞬間、光が化け物を吹き飛ばした。

『え……？ 母さんのお守りが……』

それは形見である母のお守りから発せられていた。

少年はその首から下げられたお守り――碧色の丸い宝石――を手取る。

《君が次のマスター？ ボクはアクセル。よろしく》

『マスター？ アクセル？ 何言ってるんだ？』

《だって君がボクのマスターなんでしょ？》

『だから何言ってる――』

《来るよ》

『うおっ！？』

急に襲いかかってきた化け物のタックルを横に跳んで躲す。

すぐに体勢を立て直す少年。一体なんなんだ！？ なんなんだよお！

《速くボクを起動させないと、やられちゃうよマスター？》
『ああもう！ どうすりゃいいんだよ！』

もう状況が混乱している以上、少年には近くのアドバイザーの言うことを聞くしか、方法が見当たらなかった。

《セットアップって言って。そしたら、バリアジャケットを展開するから》

『……ッ！ わかったよ！ セットアップ！』

なんかもうよくわからん単語ばかりで、尋ねなくなる感情を押し殺し、言うとおりに叫ぶ。

すると、少年の身体が光に包まれ、晴れた頃にそこにいたのは、白を基調とした服装で、“スカート”を履いた少年だった。

『つておー……い！！？ なんで服装変わって……！ まあそこはいい……！ 何でスカートだ！！』

《だって前マスターから、何もイジってないし》
『前マスターって……！ うおっ！？』

尋ねようとした瞬間、再び化け物が襲いかかってきたので、身を翻し躲す。

とその時、どこからともなく少年のような声で、『ごめん！ 少しでも時間を稼いで！』と言われた。

『どっから！？』と辺りを見るが、なんだかよくわからず尻餅を ついている少女しかいない。強いて言うなら、フェレットのような動物がいるだけ。

とまあそんなことを考えている間も、化け物は襲いかかってくる。だが、先程より動きが軽くなっているため、なんとか躲せる。しかし、どうやって戦っていいやら……。

《ねえマスター、もしかして戦い方知らないの？》

『当たり前だ！』

《そっか。だったら、ボクが全力でアシストするよ。とりあえず、背中の剣を取って》

『背中なの？ あら？ い、いつのまに……』

少年は背中の鞘に納まった幅広の巨剣を手を持つ。

結構ずしつとくる重さだが、日ごろから剣を振るために鍛えているため、振れないことはなさそうだ。

そこで再び化け物が襲いかかってきた。

ちっ、と舌打ちをし、躲そうとした少年だったが――

《ボク（巨剣）を突き出して！》

「――ッ！」

唐突な指示に思わず身体が動き、化け物に剣を突き出した。

すると、化け物は不可視の壁に阻まれたかのように、火花を散らして、動きを止める。

だが、よく見ると、何か……その……なんというかバリアのようなものが張られていた。

『A。フィールド！？』

違います。

少年の驚愕とは裏腹に、バリアは化け物を吹き飛ばす。そこで更にアクセルの指示が飛ぶ。

《そのまま剣を構えて突進！》

言われるがまま少年は、いつものように剣を構えて、化け物目掛けて突進する。

そうすると、自然と口にして出る言葉がある。父や母がよく言う言葉。

『ただ一刀の元に——』

父は莊嚴に、母は流麗に放たれる一撃の前に、言われる言葉。

『《斬り伏せる！／斬り裂いて！》』

ズバツと放たれた一撃は、化け物を真一文字に斬り裂き、動きを止めた。

『なのは！ 今だよ！』

『う、うん！』

すると、また少年の声が、どこからともなくし、なのはと呼ばれた少女が、いつのまにか少年と同じように、変身しており、少女が『ジュエルシード封印！』と叫び、よくわからん内に事態は収まった。

少年は安心のあまり、腰を抜かして、その場に座り込む。

『はあ……』

《お疲れ様、マスター》

『よくわかんねえけど、とりあえず、なんでお前俺のこと“マスタ——”って言うんだ？』

《だってマスターはマスターだよ？》

『なんかなあ……それあれなんだよ……あのぉ……歯痒い？ 違うか、こそばゆい？ って言うのか？ とりあえず止めれ』

《じゃあなんて呼べばいいのさ？》

『そうだな……よくわからんが、とにかくお前はこれから俺と共にいるんだな？』

《うん》

『よし！』と勢いよく立ち上がる少年。

『だったらお前は俺の“相棒”だ！ 俺と共に駆ける。唯一無二の相棒だ。これからよろしく頼むぜアクセル』

《わかったよ“相棒”》

という話を大事な部分を伏せ、ちよつとした虚言を交えて、かいつまんで説明したアス力。

と終わったところでハツとする。いくらかいつまんで説明したとは言っても、あそこに居合わせた人物——高町なのはがいる前で、こんな話をするなど、愚の骨頂。相棒のことをばらしてるも同義である。相棒のことに気づいているかを、調査に来ているのも確かだが、ばらしに来たわけではない。

寧ろばらすのはNGである。相棒からもあまり俺を意識するようなことは言っな、と釘を刺されている。俺のことで悲しんで欲しくない、と言っていた。

アス力は冷や汗を流しながら、ちらつとなのはの方を見る。
すると――

《あ……》

思わず口から声が洩れた。

なのはのその瞳から、涙が流れていたのだ。だが、自分でも気づかなかったのか、その頬の冷たさに涙が流れているのを確認するよ
うに触れる。

そのなのはを見て、はやてが焦り出した。

「ちよっ！？ どうしたんや、なのはちゃん！？」

「え？ あ、ごめん！ ちょっと……思い出しちゃっただけ……だ
から……」

「だけって……」

「大丈夫だから」

「そか……？」

「うん」

なのはは涙を拭いて、再び笑みを浮かべた。

はやても言及するのは、忍びないか……、と思い、それ以上は何
も言わなかった。しかし、フォワード勢は、なのはの突然の涙にあ
たふたしていた。

いつもはあんなに気丈で、厳しくも優しく、弱みなど見せないな
のはが、涙を流したのだ。フォワード勢はそれだけで、どうしてい
いのかわからないだろう。

だが、それははやてが身振りで、大丈夫、というのを伝えて、そ
の場は収めた。

そんな中、アスカ——アクセルは考えていた。そこまで相棒のこ
とを……、と。

相棒とのエピソードを聞いて、思わず涙が流れるほど、相棒のこ
とを想っている。そのことはアクセルを動揺させた。

つい相棒は生きているということを言いたくなかった。そうすれば、なのはちゃんがこんなに苦しむことなんてない、と。

だが、それは相棒は望まない。相棒は怖いんだ、と言っていた。もし言ったとき、信じてもらえず拒絶されて、お前なんて！とかアイツらに言われたら、もしかしたら立っていられないかもしれない。死んだ者が生き返ることはないのだから、信じてもらえない可能性の方が高い。それが怖いのだと。

だから、アクセルは何も言えなかった。そんな自分が齒がゆくて、思わず涙が流れた。

それに今度は、なのはが慌て始める。

「ど、どうしたのアスカちゃん！？　もしかして、私が泣いちゃったから？　ご、ごめんね！」

《ちがつ……そうじゃ……ひぐつ……うく……》

なのはも今の話が、あの人の話とは思っていないだろう。ただ似た話とくらいしか。アスカが泣く理由なんて、見当もつかない。

アスカは中々泣き止まず、この場はリインとはやてに任せて、なのはやヴィータ、フォワード勢は訓練に向かった。

とりあえず、残ったはやて達は、このまま食堂にいるわけにもいかないので、部隊長室まで泣くアスカを連れていく。

そして、部隊長室に着いた頃には、アスカも泣き止んでいた。

ふう、と息を吐き、はやては席に座った。

アスカは迷惑をかけてしまったと思い、謝罪する。

《……ごめんなさい……》

「あ、いや、ええんよ別に」

《そうです。寧ろリインが変なこと訊いたから……》

《そんなこと……えと……相棒に会いたくなって……》

とりあえず、その場を取り繕うために嘘を吐いておく。まあ、無難な嘘だろう。

はやて達もマスターがいないと不安なんだろうな、と納得する。あのエピソードを聞いた後だし、アスカとマスターの信頼度は窺い知れる。

だが、なのはが何故泣いたかはよくわからない。結局アスカが泣いてうやむやになってしまった。

しかし、なんとなくはわかる気がする。なのはが泣くなど早々あることではない。特に人前で泣くなど。ただ1つの例外を除いて。

——あの人のことなんやろか……。

それしか考えられない。

一応、色々と考えが浮かぶが、あつてるかどうかはわからない。だが、今考えたところで、何にもならならへんね……、と思いはやては考えるのを止めた。

そして、仲良く話す2人を見ながら、仕事に移った。

訓練が終わった後、スバルとティアナは秘密特訓を続けていた。キリがいいところで、少しの休憩に入る。

2人は樹に背を預けながら休む。そこでスバルが口を開く。

「ねえねえあの子のどう思う？」

「あの子って？」

「アスカちゃんだよ」

「まあ、良い子そうなんじゃない？　というより、あんたが気になつてるのは、どうせマスターのことでしょ？」

「えへっ、バレた？　私と同じで、デバイスに相棒って呼ばせてる

なんて、気が合いそうなんだもん」

「あたしはあんまり会いたくないわね……」

「なんで？」

「あんたみたいなのが2人もいたら、こっちの身が保たないでしょ」

「ひつど〜いティア！」

そう言つて、じゃれついてくるスバルを軽く払つて、ティアナは立ち上がる。

「そんなことより、訓練続けるわよ」

「はい」

訓練と聞き、ふざけるのを止めて、真面目な顔になり、再び2人は訓練を始めた。

それをこつそりと覗くのは、ヘリパイロットの操縦者——ヴァイス・グランセニツク。

無理はしないで欲しいが、言っても聞くような奴らではない。だが、だからと言って、目を離しているのは心配なため、こうして来ているわけだが、そんな自分の姿を、情けねえなあ、と思いながらも、何もできないでいる。

結局俺はあの頃から何も変わっていない。そんな悲観した想いでいるヴァイスに声をかける者がいた。

《あ……あの……》

そのあまりにか細く消え入りそうな声に、一体誰だ？ とその声をする方を向く。

すると、本当に誰かわからない者がいた。

どうやら、リン曹長と同じユニゾンデバイスのようだが、リン曹長以外にそんなのがここにいるなど聞いたことがない。

「あ、あんたは……？」

《えと、その、あの、あ、ああアスカっていうんだ！》

それはアスカだった。

ヴァイスはそれを聞くと、そういえば……、と思い出す。

確か六課でユニゾンデバイスを保護したとか聞いたな……、と。

アスカは相当緊張しているのか、身体が震えていた。だが、それはどちらかというと緊張というより、恐怖だろう。やはり、相手が女と男では、対応が違う。その上、今は1人だ。怖さの度合いが半端ではない。

しかし、ヴァイスにしてみれば、何故そんなに震えているかはわからない。

わからないが、とにかく安心させようと、声を発しようとする。すると、アスカの身体がビクツとする。

そうになると、ああ、と気まずくなり、頭を掻いて一步下がる。

「えつとだなあ……こつちもそんな萎縮されると困るんだが……」

話しかけてきたのはアスカのはずだが、端から見ると、ヴァイスが話し掛けて、アスカが断りきれずにいるみたいだ。

《ごめん……なさい……。その……ボク……相棒以外の男の人が、少し苦手で……その……》

「あ、いや、別に責めてる訳じゃねって。それより、俺になんか用なのか？」

《あ……その……あの2人……》

「ああ、あいつらか……訓練の後あやって、個人で練習してんだよ」

《……大丈夫……なの？》

ヴァイスはその問い掛けに、ううむ……、と唸る。

ただ大丈夫か？　と言われれば、まあ、それは個人の能力次第だ。大丈夫といえば大丈夫なのだろう。

しかし、それは今だけだ。今後も大丈夫とは限らない。寧ろ大丈夫ではないだろう。

だが、まあこの子にそんな話をしても仕方ない。はあ……、とため息を吐くと、言葉を紡ぐ。

「まあ、若い内はそういう無茶も、いい経験になるかも知れねえな」
《あ……》

ヴァイスはそれだけ言うと、その場を去っていった。

残されたアスカは、練習をし続けるティアナとスバルを見て、締め付けられる胸を押さえた。

第12話（後書き）

次は……同時進行しましょうかね……。

出来ればティアナ撃墜シーンまでいきたいですが、さてどうなるやら。

次回もよかつたら見てってください♪

それでは♪

第13話（前書き）

むむむ……話は大体出来てるはずなのに難しいなあ。

遅れてすみません。

よかったらご覧ください。

では、どうぞ。

第13話

俺が変身魔法を覚えて数日。

一応変身魔法が出来るようになった俺は、以前の黒髪を金髪にし、瞳を黒から碧色にしてみた。顔はハーフなイケメン風にしてみた。

いや、なんかこんな感じの少し憧れない？ 憧れ……ない……。さいですか……。

まあ、とりあえずはそんな格好で動いてる。慣れるためにもな。ちなみに、バイト先には普通の格好だから誤解しないように。

この格好で、色々動き回ったんだが、少しわかったこともある。あとはアクセルからの情報も合わせると、少しは見えてくるものもあった。

結構どうでもいいことも多いんだが、どうやら、管理局内にて海と呼ばれるクロノがいるような部署と陸と呼ばれるここ——ミッドチルダに本部を置く部署は、どうにも仲が悪いらしい。

なんでも地上本部のレジアス中將とかいうのが、海を嫌っているらしい。何故かまではわからなかったが。

あとは機動六課というのは、試験運用みたいで、1年くらいで終わるらしい。

人員も結構身内で固めており、フォワードに関しては新人ばかりみたいだ。まあ、ここは予想通りだが。

前にも思ったが、やはり機動六課には裏があると見て間違いないと思う。

あれは何かに備えてるとしか思えない。近々何かが起きるんじゃないか？ それもとんでもないことだ。

そして、それはあの機械——確かガジェットとかいうのが、関係している俺は見てる。

あのガジェットは、何かを探してるんじゃないかと思う。

列車を襲い、オークション会場を襲った。

まあ、無差別に襲いかかっていると見てもいいが、オークション会場の時は、明らかに誰かがガジェットを動かしていた。

その癖、使い捨てのように、切り捨てた手際。おそらくは、あの時に他の目的があったんだ。

それが済んだから、使い捨てた。

つまりは、あの時の目的は、オークション会場そのものではなく、それに出展される予定のものが何か。

ガジェットはそれを狙って現れた。

最初は自動だったところを見ると、何か——ガジェットを造った人物の探し物——に反応して、そういう場所に行くように設定でもされているんだろう。

となると、当面の行動はガジェット探しか……あれが何を狙っているのかを知っておく必要があるしな。

だが今は——

——あの2人……。

ティアナ・ランスターとスバル・ナカジマだ。

まあ、別に訓練するのが悪いとは言わねえけど、あいつらは何のために訓練をしているのかねえ……。

ただ強くなるためにしてるんなら、止めなきゃいけねえ。間違ってた強さなんざ、破滅を生むだけだ。

まあ、俺の訓練の定義が合ってるかは知らないが、少なくともただ強くなるためにするもんじゃない。俺はそれを学んだ。だから、あいつらにも教えてやりたいな……。

だが、どうすりゃいいかねえ……。

「なんかないかなあ……」

「ごめんなさいねクロスミラージュ」

ティアナは自身のデバイス——クロスミラージュを綺麗にしていた。

ティアナとスバルは、ここ数日中ずっと早朝の自主訓練、朝のは達との訓練、午後のなのは達との訓練、それが終わった後の自主訓練を続けていた。

なのは達との訓練では、ひたすらに基礎を行い、精密射撃を極める。自主訓練で主に技数を増やすことで、行動の選択肢を増やす。うまくいけばこれで強くなれる。そうティアナは思った。

「ただいま」

ティアナがクロスミラージュを磨いているところに、スバルが飲み物を持って部屋に戻って来た。

スタスタ歩くと、ティアナに片方の飲み物を手渡す。

ティアナは礼を言いつつそれを受け取った。

そして、スバルは机に寄りかかり、今の心情を吐露する。

「明日の模擬戦……いけるかな？」

それは次の朝にやる今までの訓練の復習みたいなものことだ。

ティアナとスバルのコンビで、なのは一人と戦う。

ルールは決定打となる一撃を与えれば良し。

だがたとえ一撃でも、なのはに攻撃を与えるのは難しい。2人がかりでもだ。

スバルはティアナの考えを聞きたくて、そう訊いたのだろう。

「成功率は……いいところ6割くらいかな……」

「うん！　そんだけあればきっと大丈夫！」

活発に喋り飲み物を飲み干すスバルを見て、ティアナは「でも……」と言葉を紡ぐ。

「あんたはほんとにいいの？」
「なにが？」

ほんとに何もわからないと言う風に訊くスバルに、少し手に力を込めて話す。

「あんたの憧れのなのはさんに……逆らうことになるから……」
「私は怒られるのも叱られるのも慣れてるし、逆らってるって言っても、強くなるための努力だもん！　きっと結果出せば、わかってくれるよ！」

ティアナを安心させるように、間違っていないというように、スバルはハキハキと話す。そして、少し気持ちを落ち着かせて、顔を軽く赤く染めて、少し俯いて一言。

「なのはさん……優しいもん」

えへへ、と笑うスバルを見て、「……そうね……」とティアナは呟いた。本当にこの子は、なのはさんのことが好きなのね……、と何だか少し寂しく感じた。

そこに、こんこん、とドアを叩く音がした。
スバルが「はい」と声をかけると、「あの……アスカ……ですけど……」と少し細かい声が返ってきた。

2人は、こんな時間にどうしたんだろう？　と不思議に思いつつ、ドアを開ける。

そこには宣言通り、最近六課に保護されたユニゾンデバイス――アスカがいた。

このアスカも不幸なもので、何故かすぐ見つかると思っていたマスターが、なかなか見つからなく、六課に居着いて、数日が経った。ちなみにだが、アスカは1人は不安なためか、なのは達の部屋で寝ている。

ついでに言えば、一緒に寝てるのは、なのは達ではなくレイジングハートとである。

と言っても、アスカが一方的にレイジングハートを抱えているだけなのだが。寝る場所は、は yet から予備のラインの部屋を借りて寝ている。そこにレイジングハートとアスカが寝ているわけだ。

どうしてそうなったかという点、アスカ自らレイジングハートと寝たいと言ったので、なのはがレイジングハートに大丈夫が訊き、大丈夫という返事を頂いたので、こうして一緒に寝ている。

というのも、アスカにとって、レイジングハートはどこか姉のような存在で、一緒にいると安心するのだ。

まあ、なのは達には、同じデバイスだから……、などと適当なことを述べたのだが。

それはともかく、アスカを招き入れた2人は「どうしたの？」と問うた。

アスカはおずおずといった感じに話し始める。

「あの……明日……」

「明日って……模擬戦のこと？」

「うん」

「それがどうかしたの？」

「……怪我……しないで欲しいんだ……」

「「……？」」

ティアナとスバルはよくわからず顔を見合わせ、疑問符を浮かべる。

訓練で怪我をするなど、日常茶飯事。それが模擬戦となれば、確かに多少の怪我はする。

そりゃあ、魔力ダメージだけで戦っているため、酷い怪我はしないが。

だから、今更になって、急にアスカが心配するのに疑問を覚えるのだった。

だが、今改めて思うとアスカは、ここ数日、自分たちのことを心配していた。

事ある毎に「大丈夫？」とか「無理しないでね」など、心配する言葉を送っていたのを思い出す。

そんなに危なっかしく映ってるんだろうか？ と2人は不思議に思いながら、スバルがアスカを安心させるように言う。

「大丈夫だよアスカ。私たちそんなに弱くないよ」

と握りこぶしを作って、自信ありげに話す。

それでもアスカは顔を俯けたままである。

今までは一言で引き下がったアスカだが、今回はそうはいかないようだ。

ティアナとスバルは困ったように顔を見合わせる。

そこでアスカが声をかける。

「あのね……ボクもあんまり言いたくないんだけど、なんだか2人とも最近頑張りすぎてるような……その……えと……」

段々尻下がりになっていくアスカ。

どうやら、ティアナとスバルに見つめられて、萎縮してしまった

ようだ。

だが、なんとなくティアナとスバルにもアスカの言わんとしてることが、ある程度わかったので、2人でアスカに微笑みかける。

「アスカ、心配してくれてありがとう♪ でもまだまだ！ もっと頑張らないとだよ！」

「そうそう。まだこれでも足りないくらいよ。だから、そんなに心配しなくても大丈夫よ」

そう言う2人をアスカは気遣わしげに見る。

それでもやはり心配だった。

相棒はああいう人だったから、生前（今生きてるが）は皆が無茶をしないように、自分が無茶をしていた。そのために強くなろうと訓練を欠かさなかった。尋常ではない訓練量で。

そんな相棒だったけど、父親の一言で、無茶は控えるようになった。

相棒はいつも父親の悪口のようなことを言ってたけど、やっぱり父親の影響力って凄いなだな、と思ったものである。

なんとなくだが、この2人にもそういう導いてくれる人が必要だと思った。

でもそれはアスカには、為し得ないことだ。

アスカはそう考えると、少し寂しげに微笑み「うん。明日頑張っ
てね」と言っ、ティアナとスバルの部屋を出ていった。

明くる日の早朝。

俺は機動六課に向かっていた。

何故かと言うと、昨日のアクセルの連絡で、今日に実力テスト的なことをするとかなんとか。

これはチャンスと思い、あいつがどれ程俺の言葉の意味を考えたか知る機会を得た、と意気揚々に向かっている。

まあどうせ対して考えてないんだろなあ、とは思っけだな。

だって、急に現れた変なフード男に助言めいたこと言われても……ねえ？ 俺なら何も聞かないな。

ま、それは重々承知。だが、まあゼロとも言い切れないから、実行しただけだ。少なくとも、俺のことは印象付けられただろう。

実際そのために入ったと言っても過言ではない。ほ、本当なんだからな！ う、嘘じゃない！ 断じて自分が考え無しに突っ込んだことを認めたくなくて、その後付け設定をしてとかじゃないからな！

ふゝ、なに俺はいきなりツンデレみたいなこと言っただか……

アレだ。こう……1人って寂しいよねって奴だ。

なんつつか、ほら、1人ってやっぱり苦手なんだよ。どうしても独り言（心の中で）が多くなるし。

とか弁明してる内に六課に着いた。

さて、今回は派手に行こうか……！

アスカ——アクセルはなのはと対峙しようとするティアナとスバルを見ていた。

昨日から言っていた模擬戦である。

だが、この模擬戦はもう少しで模擬戦ではなくなる。

昨日の夜、アスカがスバルとティアナの部屋を出た後、アスカ——アクセルは相棒に連絡を取った。もちろんバレないように、手は

打ってある。

そこで相棒と話したところ、相棒は「おーけー、じゃあそっち行くわ」とアクセルが絶句する一言を放った。

何故、模擬戦をやる話から、急に相棒が乗り込む話になるのか、とアクセルが狼狽しながら訊いたところ、「そこは、ほら、なのはより俺の方が優しいし」と何だか納得できるような出来ないような返しをされた。

アクセルももう相棒の無茶苦茶に付き合わされるのは慣れているので、呆れながらも了承するのだった。

じゃあボクとはどこで合流する？ とアクセルが訊いたところ、相棒は「いや、お前は皆に見える位置で、俺の戦闘を見てろ」と言った。

アクセルはよくわからず「なんで？」と問い返す。

相棒のそれに対する答えはこうだ。

アクセルはここ数日六課に厄介になっている。そしてアクセルの扱いは迷子だ。もうマスターが見つかってもいい頃である。寧ろ遅いくらいだ。

それにアクセルはマスターのことを優しい人と皆に話している。その優しいマスターが、何故ここまで迎えに来ないのかと、疑問に思っているはずだ。

ここで俺がいるときにアクセルがいなかったら、俺に疑惑がかかる可能性がある。

その可能性を消すために、アクセルには俺がいるときに、皆の前にいて欲しいのだ。

もし、アクセルがマスターのことを悪い人（アクセルを捨てるような人、アクセルが逃げ出すような人）だと言っていれば、よかったんだが……、と相棒は最後に付け加えた。

アクセルはそれに「でも……ボクは相棒しか知らないし……」と返したら、相棒は通信越しに若干恥ずかしがったような声で、「あんまりそういうこと言つな……変な誤解を招きそうだから」と言っ

た。

あれってどういう意味だったんだろう？　と思いながら、アクセスは現実世界に戻ってきた。

今まさになのは達の戦いが、始まろうとしている。

だがそれは――

『――ッ！――』

けたたましい警報の音で終わった。

全員が何事かと構えたり、ロングアーチに通信を取ろうとする。

しかし、それも突如として架けられたバインドに阻まれた。

だが、そんな中動ける2人がいた。スバルとティアナだ。

そして、上空には――

「久しぶりだな六課の諸君」

フードの男がいた。

第13話（後書き）

さあここからどうなるか……！

と言ってもまあ原作から大して離れないので、展開は予みやすいかな（苦笑）

さあてどんな風に書こうかな。

では、

第14話（前書き）

うにゅにゅ……更新は大体2週間に1回ってところですかね……。

むう……もう少し早く出来たらなあ……。

では、よかったらご覧ください♪

第14話

モニタにはスバルとティアナが、フードの男と戦闘をしているシーンが流れている。

「状況は？」

「隊長、副隊長、ライトニング3、4は以前バインドを架けられたままです。スターズ3、4はFと交戦中」

はやての問いにグリフィスが簡潔に答える。ちなみにFはフードの男のFだ。

「今動ける魔導師は、私とザフィーラとシャマル、リインだけやね……」

はやては現状を冷静に見つつ、そう呟く。

あのフードの男——Fはあの後、更に4重にバインドを架けた。流石のなのは達でも、リミッター状態でそれを解くのは、手間がかかる。

だが時間さえあれば、外れないことはない。

だから、スバルとティアナには、時間を稼ぐように言ったのだが、どうにもティアナは冷静さを失っているようで、倒しにいつているようだ。

だが、そんなことは無理だ。

隊長陣が苦戦する相手を新人が倒せるはずがない。

しかし、今ティアナを冷静にさせようとするのは、寧ろ逆効果だろう。おそらくは更に頭に血が上るだけだ。

ならば、やることはひとつ。

「グリフィス君、ここ頼んだで」
「ぶ、部隊長!？」

はやては身を翻して、その場を去った。

「久しぶりだな六課の諸君」

って俺はどこぞの偉い奴だよ……、なんてツツコミを自分にしつつ、空中からこの場にいる全員を見る。

なのは、フェイト、ヴィータ、赤髪の確かエリオ、ピンク髪のキヤロ。ついでにアクセル……ここまでがバインドを架けたメンツ。そして、青髪のスバルに橙髪の子リスことティアナ。
いないのは――

「はあ!！」
「シグナム!」

上から襲いかかってきたシグナムの一閃を横に躲す。
そこで仕掛けといった罠を発動。

「なっ!？」 設置バインドか!」
「ご明察。お前は常に近づいて斬るだからな。やりやすい」
「なに……?」

やばっ!？ 口滑らせた!？
い、いや、落ち着け俺。ここで焦ったら敗けだ。

一度シグナムと戦ってるんだ。それを言えればいい。

「一度戦えばそれくらいわかる」

「くっ……！」

危ねえ……！ 咄嗟の機転……！ ナイスだ俺！

まあ、それはさておき、これじゃあすぐ破られるしな……。

とりあえず、ケージタイプも使い、4重にバインドをしとく。これでまあ10分くらいは保つだろ。

さて本題に入るかな……。

「よう、子リスにワンコ、久しぶりだな」

「「なっ！？ 誰が子リスよ！／ワンコだ！」」

「ぴつたりな名だろう？ 俺のイメージは完璧だ」

「「どこがよ！／どこがだ！」」

わからんやつらだな。もう少し動物愛護の精神を学んでこい。

と、そんなことしてる暇なかった。

なのは達のバインドが解けちまう。

目的を果たさないとな。

「さて、何でお前らだけバインドしなかったかわかるか？ 答えは

簡単。お前らを俺が直々に叩いてやるためだ」

子リスとワンコの眉が若干つり上がった。

どうやら、やる気にはなったようだな。

「スバル！ ティアナ！ 少しだけ時間を稼いで！ すぐに脱出するから！」

そこで、なのはが子リスとワンコに呼び掛けた。
まあ、それが妥当な作戦だろうな。バインドはいずれ外れるだろうし。

「大丈夫です！ 私たちだけでもやってみせます！　いくわよスバル！」

「おう！」

「ティアナ！？　スバル！？」

うゝん……血が上ってんなあ……まあ、そう仕向けたわけだが。
だが、それじゃあダメだろうよ。
何を意固地になってるか知らねえが、圧倒的な力量差をみせてやる。

現れたフードの男。

それは自分でも不思議なくらい、ティアナにとって自分を苛つける存在だった。

何故かはわからないが……といっても、初対面であんなム力つくことをされれば、それは姿を見ただけで苛つくだろうが。

とにかく、苛つくのだ。

どうしても、冷静に判断がつかない。

だが、それもなんとなくわかつてる。

才能がある者に嫉妬しているのだ。自分はただの凡人で。努力しなければ、強くなれなくて。

それはここ最近になって、想いが強くなっていた。
それは六課にきたからだ。

今まで自分の周りの才能のある者はスバルだけだった。

だが、この六課には、自分以外が全員才能ある者。

努力を怠れば自分だけを取り残される。足を引っ張ることになる。そんなのは許せない。なにより自分自身が。兄の銃を汚してしま
う自分自身が。

だからこそ、証明しなければならない。

ランスターの弾丸は、敵を倒せるのだと。

そのためにも――

「あんたを倒す……！」

「やってみな子リス」

戦闘が開始した。

序盤は定石通りに、スバルが前線で攪乱。幻術を駆使しつつ、スバルはウイングロードの上を爆走し、Fに近づいていく。

そんなスバルだが、1つ気になることがあり、思わず声を張る。

「デバイスは起動しないの！」

「うん？　なんだあヒヨッコ共？　まさか子リスとワンコの分際で、俺にデバイスを使って欲しいのか？　ハハハ、冗談も休み休み言いな。ちゃんちゃらおかしいぜ？」

フードの奥の歯がチラリと見え、それが馬鹿にしたように、口角が上がっていた。

それにスバルはムツとする。

そこで下から声が張り上がった。

「だったら出させるまでよ！」

その声はティアナ。その声と共に放たれたのはクロスファイアシ
ュート。

しかし、その魔力弾はどこかキレがない。Fは少し疑問に思いつ
つ、追尾してくるそれを避けるように飛ぶ。

その飛ぶFの前に、水色の道が出来上がる。ウイングロードだ。
ここは普通なら、相手をかく乱させるために、幻術のスバルを放
ち、次に繋げるのが筋だ。だがそのスバルは幻術ではなかった。

Fもそれに気づいたのか、少し怪訝に思いながらも、牽制に2個
ほど放つ。どうやら、魔力弾はあまり得意ではないらしい。

スバルはそれを前面にシールドを展開して防ぎつつ、Fに突貫。
いける……！

「うおおおおお！！」

雄叫びを上げながら、スバルは前面に捉えたFに殴りかかる。

Fはシールド展開し受け止める。火花が散り力が拮抗するが、F
はシールドを爆発させて距離を離れた。

「わあっ！」

スバルはそれに吹き飛び、ウイングロードの上に着地する。

Fは更に追ってきた魔力弾を拳で屠りながら、スバルに声をかけ
る。

「あめえな。この程度の拳が通ると思ったか？ やるなら本気で殴
つてきな！」

スバルはくつと舌を打ち、再びウイングロードを走る。

そこでFは周りをキョロキョロしだした。どうやら、ティアナを

探しているようだ。

その姿はすぐに見つかった。ビルの屋上。そこで両銃を構えて、砲撃の準備をしていた。

しかし、それをFは一瞬で無視し、更に視線を這わせた。それは幻術であると見切ったのだ。

『クロスソフトC！ やるわよスバル！』

『おお！』

スバルとティアナはそう念話を交わす。

Fの前には再びスバルが突貫を仕掛けようとしていた。カートリッジをロードし、ウイングロードを駆ける。

Fはそれに向かい打つように、前面にシールドを展開。

スバルの拳とFのシールドがぶつかる。

そのままスバルは反発する力に耐える。

その間に――ティアナがウイングロードを走る。銃口からは魔力刃が生まれる。バリアを切り裂いてフィールドを突き抜ける……！

いかに強い相手でも、これならまともに入るはずと……！

ティアナが飛び出した。Fの頭上から、頭めがけて。

「でえええええい！！」

「ダメ！ スバル！ ティアナ！」

なのはの叫びと共に、爆発がスバルとティアナとFを包み込んだ。

あのときと同じ。

なのははスバルとティアナの戦いを見ながら、そう感じていた。何も出来ずただ見ているだけ……、それがいやで自分は魔導師に

なった。

それなのにまた何も出来ていない。こんな壁に阻まれて。だけど……！

腕に力が入る。ケージタイプのバインドにヒビが入り始めた。

今は違う……！あの頃みたいに、何も出来ない私じゃない……

！守ってみせる！絶対に！

なのはのバインドが解かれたのと、ティアナが特攻をかけたのはほぼ同時。

ティアナの特攻は自分が殺られるか、相手が殺れるかの謂わば賭け。状況があのときをフラッシュバックさせた。

なのはは人知れず叫んだ。

「ダメ！スバル！ティアナ！」

こういう作戦に出たか……。

俺はワンコの攻撃を止めながら、視界の端に子リスを捉える。

賭け……か……。

状況が状況なら、やってもいいかもしれないが……今は間違いな……。

それにあの子リス……まさか……。

「でえええええい！！」

子リスの叫びと共に、銃口から生まれた刃が俺を襲った。

煙が晴れば、そこにいるのは当然拳と刃を受け止める俺の姿。

流石に刃の方は、生身で搦んでる分、血が出てるがまあ問題ない。

倒せなかった——というより、軽く受け止められたことにショックでも受けたか、ワンコと子リスは一瞬固まった。
はぁ……。

「なあ子リス……お前もしかして今までのイライラを全部俺にぶつけてるだけなんじゃねえか？」

「な……にを……！」

「周りにいるのは優秀な魔導師。でも仲間だ。自分の感情をただぶつけるなんて真似は出来ない。そんなときに俺が現れた。格好の的だな」

「ち……！ 違う！」

子リスは魔力刃をしまうと、俺から離れて水色の道に立ち、銃口を構える。

「私は！ あんたを倒して証明してみせる！ だから！」

「証明？ 何を？ 間違ったやり方で得たものに、なんの価値がある？ 今のお前に証明できるものなんて何もねえよ」

「あんたに……！ 何がわかるのよ！！」

子リスの銃口が光り始める。砲撃か……。

——パーン！

そのとき、なのはが子リスの頬を叩いた。

子リスは何が起こったのかよくわからないのか、頬を押さえて、なのはを見る。

そのなのはの顔を見て、力が抜けたのかその場にへたりこんだ。その子リスを一瞥し、なのはは呆然として、その光景を見る俺に視線を変えた。

「スバル、離れなさい……」

「は、はい……」

なのはの少しトーンの落ちた声に、スバルは多少ビクつきながら、その場を充分離れる。

なのはがデバイスを構える。その瞳に浮かぶのは、明確な敵意。これは……覚悟してたとはいえ……やっぱり辛いな……。

なのはに敵意を向けられるのが、ここまでキツイなんて……想像以上か……。

俺の身体が心なしに一步下がる。

そのとき――

――黒……点……？

こ……これは……！

黒点はそれを中心に、爆発でもしたかのように広がる。

――ディアボリック・エミッション！？

「があああああ！？」

まずい……！ デバイスがない状態でこれは……！

俺はとにかくこの空間攻撃を抜けるべく飛び出す。

はやての野郎……一体どこから……俺が全く感知できない距離からなんて……。

「はあ……！」

ディアボリック・エミッションから抜け出した俺を、すぐさまバ

インドから抜け出したフェイトが襲いかかる。

くそ……っ！

俺は腕をクロスして、シールドを張り、甘んじて受ける。

だが流石はフェイト。デバイスがない俺は、シールドを切り裂かれ、後方に吹き飛ばされる。

そこに――

「デイベイイン……！」

砲撃の準備をしていたなのはの一撃が――

「バスター……！」

襲いかかった。

Fが倒れているだろう地点には、煙が舞い上がり、視界を悪くしていた。

流石のやつでも、なのはのデイベインバスターをまともに受けたのだ。

意識があるかも怪しい。

しかし、油断はできない。相手は何をしてくるか予想が出来ないから。

そんな警戒をするのはとフェイトの横を2つの影が通った。シグナムとヴィータだ。

一直線に煙に向かっている。

理由は1つ。

Fの力はある人と同じ可能性が高い。ならば、確実に意識を奪わなければ、こちらがやられる。

それはなのは達にもわかってるだろう。

しかし、どうしてもそこまで踏み切れなかった。あの人だったら……、と思うと。

シグナムとヴィータは、それがわかるため、自分達が代わりに突っ込んだ。

しかし――

「少し……遅かったな……」

2人が煙の中に突っ込んだのとほぼ同時に、上から声が聞こえた。ボロボロになったフード。破れたフードから覗く金髪。顔は自らの腕で、上半分ほど隠されていた。

「目的はある程度達したんでな。これで帰らせてもらうよ」

Fが身を翻した瞬間、その姿は消えていた。

お前がやった行為を、もう一度よく考えるんだな

「え……?」

そのとき、ティアナの元に念話が届いた。

第14話（後書き）

ど……どうでしょう？

え？ マジで原作と全然変わらねえじゃねえか、オリキャラでやる意味ないだろ……？ ごめんなさい……ですが、ティアナの心情が原作とは少し違うので、次は若干言葉の違いがあると思います。それで勘弁してください……。

ではまた次話で♪

第15話（前書き）

ちょっと時間かけ過ぎちゃいました……。

少し短いですが投稿します。

ではどうぞ〜 ♪

第15話

「逃げられたか……」

「その様ですね」

そう会話を交わすのは、はやてとザフィーラ。

はやてはあの後、Fに気づかれないほどの距離を取って、リインフォースとユニゾンした。ザフィーラはもし気づかれた際の守り役だ。

あれほどの相手だ。用心するに越したことはない。

シャルルの方は、ロングアーチと共に、なのは達のバインド解除の手伝い。

実際、Fの見込みよりバインドは速く解けていた。それはロングアーチやシャルルのおかげでもある。

すいません。追いきれませんでした

いや、ええよ。誰も傷つかなかったただけでも良しとしよ

心は別やけど……、と心の中で付け足すはやて。

一瞬だが見えた金髪。

それは黒髪である彼とは、別人だという証。わかってたことだ。

違うというのは……。

それでも……。

「期待したかったんや……」

「主……」

《はやてちゃん……》

思わず出たはやての言葉。

その酷く落ち込んだ様子を、ザフィーラとリインフォースは掛ける言葉が見つからず、見つめることしか出来なかった。

Fの襲撃より時間が経った。

ティアナはあの後、ショックやその他諸々の精神、肉体ダメージからか気絶してしまった。溜まっていた疲労が来たのだろう。

あんなハプニングがあったため、訓練は当然中止である。

なのは夜の訓練場で、モニターを開き新人達の訓練のことを書き込んでいた。

そこに――

「なのは」

「フェイトちゃん……」

フェイトがやって来た。

なのはは作業を終わらせて、フェイトと六課内に戻るために、歩き始める。

そんな折、なのはがぼつりと話し出す。

「……ティアナのこと……叩いちゃった……」

「うん」

「教え子にあんな一か八かなことさせちゃうなんて、指導員失格だよね」

「そんなことない。ティアナ達も謝りに来てたよ」

でも少し腑に落ちない感じだったかな、と付け足すフェイト。

なのはは「そっか……」と返す。フェイトは更に「明日の朝に謝りに行ったら？ って言っちゃったんだけど大丈夫だった？」と訊

くと、「うん。ありがとうフェイトちゃん」と返した。
そこからは少し無言で歩き、なのはが再び口を開く。

「あの魔導師——」

「あの人じゃなかったね」

こくつと頷くのは。

あの金色の髪。あの人黒髪。つまりはあの人ではない。
でも——

「もう関係ないよ。私はもう迷わない。もう誰も失わせない。絶
対に……！」

「うん。そうだね。私も迷わない。あんなことはもうたくさんだか
ら」

2人は決意を新たに、六課の中に足を踏み入れる。
その時——周囲が赤く光り始めた。警報である。

「ありがとう、優しいルーテシア」

『じゃあ、ごきげんよう』

モニターの紫の髪の少女——ルーテシアの通信が切れる。
どうやら、ルーテシアは海上に出現したガジェットを見て、レリ
ックかと思い、自らこの男——白衣に黄色の瞳をした男に通信した
ようだ。

男は通信が切れると、人知れずに笑う。不気味に。

「クックク、私の作品はやはり良い出来だな」

『そうして笑っていると、ただの不気味な男だな。ジェイル・スカリエッティ』

白衣の男——ジェイル・スカリエッティに突然通信が来た。
サウンドオンリーのようで、顔は見えないが、声は男のようだ。

「やあ、君は——」

『そちらからは、あまり連絡をしてくると伝えただが？ それともそれほどのものであったのか？』

ジェイルの言葉を遮り、モニターの男は用件を聞き出そうとする。
それにジェイルは「焦らないでくれよ」と返す。

なんとなくだが、モニター越しに、いらつとした感じが伝わった。

「実はね、君の探しているモノも見つけたんだ」

「なに……？ 貴様に私の探しているモノを教えたくもりはないが？」

「ククク、確かに僕も確信があるわけじゃないよ。でも——有力な情報だと思っけどね」

「……」

スカリエッティの言葉にモニターの男は、何かを考えるように黙る。

「いいだろう。何が望みだ？」

「ロストナンバーの秘密を」

「たかが有力情報で、そこまでは教えられないな。ヒントをやるう。
“古代ベルカ”。これだけだ」

「まあそつだろうね。それじゃあデータをそちらへ送るよ」
「最後に言っておく。協力はしてやる。だがそちらからの通信はしてくるな」

それを残しモニターが消えた。

その瞬間、スカリエツティは笑う。それはもう不気味に。

“古代ベルカ”……何となく見えてきたよ。ロストナンバー……
ますます調べたくなった。

「博士……」

「タカネか……」

「お疲れ様です」

タカネと呼ばれる少女から、男はお茶をもらい、それを飲む。

タカネはそのまま椅子に座る博士の傍に立った。

博士はお茶を飲み干すと、端末から送られたデータを再生するべく手を動かす。

そして、そのデータが大きなモニターに再生された。

それはフードの男が、その場から一步も動かずに、ガジェットを破壊したように見える映像だった。

博士はその映像を食い入るように見て、徐に隣にいるタカネに質問をした。

「お前はどっ思う？」

「当たり前……かと……。モニター越しには、感覚がわかりにくいために確実ではありませんが」

「そうだな。私も当たりだと思う。下手すれば当たりだ」

「大当たり……ですか……？　つまり私より上の壱番だと？」

「さあ、どうだろうな」

「？」

機動六課。そののへり乗り場。

六課のフォワードメンバーとアス力が集まっていた。

部隊長と隊長陣で話し合ったところ、海上に現れたガジェットの目的が、こちらの戦力調査の可能性が高いため、なるべく新しい手口を見せないように、今まで通りで倒すことになった。

今回は空戦ということもあり、高町なのは、フェイト・T・ハラオウン、ヴィータが出撃することになる。

シグナム他、フォワード勢は六課にて待機である。

その旨を話し、ヴィータが締め言葉を発する。

「そっちの指揮はシグナムだ。留守を頼むぞ」

「「はい！」」／「はい……」

しかし、ただ1人返事が鈍かった。

ティアナである。

確かに無茶なところはあったし、怒られるようなことをしたのもわかってるつもりだ。それでも納得できないでいる。

あの叩かれたことによつて、すべてが否定された気がしたのだ。

今まで頑張ってきたことが。

必死に訓練してきたことがすべて。

それは劣等感から来るものであった。

きつと同じレベルの人に言われれば、素直に納得できただろう。しかし、周りにいるのは、すべてがエリート級で、才能溢れる者達で。自分だけが凡人で。

その苦しみはわからないとどこかで思ってしまう。

だから、あの魔導師が何を言おうと、どうしても納得できないし、したくない。その理由もない。

ティアナに近いなのという存在でも、その一言を歪んで捉えてしまう。

「ティアナは出勤待機から外れとこうか」

こんな一言も。

「言うことを聞けないやつは……使えないって……ことですか……」

言っちゃいけない。そんなことないと思って、口が勝手に動く。歪んで捉える。

「……自分で言ってるわからない？ それ、当たり前のことだよ」

なのはがどんな気持ちでこんな言葉を言っているのか。そんなことは、微塵も考えられない。ただ、納得できない。

「……！ 私は強くなりたいんです！」

——こんなことしたって意味ないぜ。

「教導以外の努力まで、教えられた通りじゃないとダメなんですか！」

——訓練つてのは、強くなるためにするもんじゃねえ。

「じゃあ私はどうやって強くなればいいんですか！？ 私はなのはさん達みたいにエリートじゃないし！ スバルやエリオみたいな才能も！ キャロみたいなレアスキルもない！」

——今のお前に証明できるものなんて何もねえよ。

「——ッ！ 少しくらい無理したって、死ぬ気でやらなきゃ強くなんなれないじゃないですか！」

ティアナのすべてを吐き出したかのような叫び。
そのティアナの身体が、急に引っ張られ、ティアナの視界を何かが埋め尽くした。

「な……ッ！」

「や……めて……！」

急に引っ張った者はシグナム。シグナムはあまりのティアナの身勝手さに、殴ろうとしたのだ。

しかし、その拳は小さな身体に止められた。とは言っても、別の手で受け止めたとかではなく、シグナムがギリギリで止めたただけだ。そのシグナムの拳を止めた小さな姿は、目をギュッとキツく閉め、身体を震わせるアス力だった。

シグナムは行き場を失った拳を下げると、なのは達に向かって言葉を投稿掛ける。

「さっさと行け。駄々を捏ねるだけのバカは、なまじ付き合ってるから付け上がる」

そう言うと共に、ヘリの操縦席の方を向き――

「ヴァイス！ もう出られるな！」

「乗り込んでいただければすぐにでも！」

そう会話を交わすと、まだティアナが心配で、何か言いたげなのはを引つ張り込み、ヘリは出発した。

そのヘリの中から、フェイトがエリオとキャロに念話を送る。

エリオ、キャロ、ごめん。そっちのフォローお願い

は、はい！

がんばります

ヘリは完全に飛び立った。

そのヘリを見送ったシグナムは、呆然と立つティアナに向き直る。

「目障りだ。いつまでも甘ったれてないで、さっさと部屋に戻れ」

「あのシグナム副隊長――」

「酷いこと言わないで……」

エリオがフォローしようとする、アスカが口を挟んだ。

シグナムは一瞥し、きつめに言葉を発する。

「これはこちらの問題だ。部外者は口を挟むな」

「そう……だけど。お願い酷いこと言わないで……」

シグナムの剣幕に怯むアスカだが、言葉を変えることはなかった。そこで放心気味のティアナを支えていたスバルが、言葉を発してきた。

「シグナム副隊長！」

「なんだ？」

意気込んで言葉を発したスバルだが、シグナムと目を合わせると、少しばかり怯み、目線を下にする。

「命令違反は絶対ダメだし……さっきのティアの物言いとか、それを止められなかった私は確かにダメだったと思います……だけど……！」

今度は自信を持って、顔を上げる。間違っているはずないから。

「自分が強くなろうとするのとか！ キツイ状況でもなんとかしようと頑張るのって、そんなにいけないことなんじゃないか！ 自分なりの努力とか……そういうこともやっちゃいけないんじゃないか……！」

最後は涙声になりながらも、自分の考えをありったけ伝えた。シグナムにもそれはわかる。だが……。

シグナムが口を開こうとした瞬間、違う方向から声がした。

「自主練習は良いことだし。強くなるための努力もすごく良いことだよ」

皆がそちらを向く。そこにいたのは――

「シャーリーさん……」

シャリオ＝フィニーノこと通称シャーリーだった。

「持ち場はどうした？」

「メインオペレートはライン曹長がいらっしやいますから。なんかもう……みんな不器用で、見てられなくて……。みんな！ ちよつとロビーに集まって！ 私が説明するから。なのはさんのことと、なのはさんの教導の意味」

第15話（後書き）

次はまあ大体主人公の心情とアクセルの心情……などなどを書いていこうかな……と。

もちろん、ティアナとなのはも。

では、頑張って書いていきま〜す、

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4241v/>

ロストナンバー

2011年11月13日19時57分発行